

＜日本の真相 6＞

＜日本の真相 5＞では古代日本に於ける祭祀の真相をまとめ、古代大王家の系図を明らかにした。また、一部、神社や古墳などが何らかの意味があるかのように配置されている聖定について記した。

今回、古代ヤマトの中心地だった奈良盆地に点在する神社群・古墳群の配置が何を意味しているのか、古代祭祀の真相を基に明らかにする。

また、古代ヤマトに大きく関わるフェニキアについての資料を入手したので、その内容をまとめる。

1：前回の概要

古代祭祀の真相を中心に、前回の内容をまとめる。

- ・天照大神は本来、男神の天照国照尊＝豊受大神＝天照大神＝天之御中主神＝大物主神で大元の大神である。陽としての側面が太陽神・天照国照尊、陰としての側面が水神・豊受大神、天神としての側面が天照大神、地祇としての側面が大物主神である。また、天照大神の和魂は豊受大神の荒魂、天照大神の荒魂は豊受大神の和魂である。
- ・天香語山命は天村雲命に先立ってヤマトに渡来し、祭祀基盤を整えた祭司レビである。その名に由来する天香具山＝天香語山の土はヤマトの国の物実で、ヤマトの国の魂そのものである。原型はシュメールで、王権のあった場所は聖別され、その土に、エンリルが“天空のように明るい物体”を埋め込んだことである。この“天空のように明るい物体”が転じて“輝く玉”となり、玉が王権のある場所の象徴となった。
- ・天村雲命は、草薙神剣ことアロンの杖を持ってフェニキア人と共に渡来したエフライム族の大王であり、最初に日向国に降臨し、次に丹波国、そしてヤマト国へ降臨した。それと共に遷されたとされる真名井の水はアロンの杖の象徴であり、共に象徴としては陰である。
- ・天村雲命の渡来後に徐福が丹波に渡来した。この徐福が田道間守である。その後、一旦秦に戻って九州に再渡来した徐福は、ニギハヤヒと名乗って物部氏の大王となり、天村雲命の娘の葛城出石姫命を娶って葛城氏の祖となった。この徐福が天之日矛である。つまり、徐福＝田道間守＝ニギハヤヒ＝天之日矛（＝少彦名神＝可美真手命＝味耜高彦根）である。
- ・卑弥呼の時代が倭王、その後の崇神～成務朝に掛けて、トヨがヤマトを統一した時代が大倭王の時代と言え、邪馬台国は邪馬台国と大邪馬台国、あるいは前期邪馬台国と後期邪馬台国に分けられる。その邪馬台国は現在の奈良県、大和を中心とする地方だった。

- ・皇太神宮＝内宮は元々御室嶺上宮にあった。日本書紀の一書に依ると、三諸原の宮＝御室山（三輪山）の宮が最初の宮処となっていた。
- ・第10代・崇神天皇6年、ヤマトの笠縫邑に磯城（しき）神籬を立て、天照大神と草薙神剣を遷して奉った。
- ・神籬と心御柱の原型はアロンの杖であり、アロンの杖こそ、本来の心御柱である。だからこそ、来るべき時に、草薙神剣は本来の神宮である伊雑宮の心御柱となり得る。主が自ら選ばれた杖故、神が降臨できる神籬であり、芽吹いたアロンの杖の姿は、神に捧げる木＝榊の原型で「生命の樹」である。天照国照尊＝天照大神が降臨する草薙神剣は陰で、太陽＝日＝火に対しては水となる。故に、太陽神・天照国照尊に神器としては剣を奉じ、神饌としては真名井の水を奉る。
- ・八咫とは八頭のことであり、八岐大蛇の象徴で、八岐大蛇の尾から出てきた草薙神剣と八咫鏡は、切っても切れない関係にある。そして、王権（＝海部氏・尾張氏）の玉を象徴する天太玉命の依り代は剣だから、祭祀には剣が必要だったことが伺える。これらで三種の神器を構成する。
- ・記紀編纂に於いて、天照国照彦火明命を祖とする一流＝海部氏・尾張氏と、ニギハヤヒ＝徐福一団を祖とする一流＝物部氏（海部氏・尾張氏を含まない狭義の意味での物部氏）の系図を合わせて一神とし、両者を合わせて天照国照彦火明櫛玉饒速日尊とされた。これこそ、多次元同時存在の法則に於いて、すべて同一、とされてしまった根源である。記紀は、天村雲命を黙秘して神武天皇とした。
- ・記紀は人物移動、年代移動の操作により創作されている。実際の神宮創祀は雄略21年丁巳の年（AD477年）と思われるが、神話では、それよりも8元＝480年遡らせたBC4年の丁巳の年とされた。
- ・伊勢に祀られている天照大神は単に日神＝天照国照尊だけではなく、現人神であった頃の天照大神も併せて祀られており、外宮がトヨ、内宮が卑弥呼と考えられる。
- ・春日大社、宇佐神宮などで祀られている比売大神＝海神の宗像三神（多岐津姫命、市杵嶋姫命、多紀理姫命）は女神としての天照大神の娘だが、わざわざ皇祖神で女神としての天照大神としていないのは、“女神としての天照大神”ではなく、“本来の天照大神＝天照国照尊”で、古代ヤマトに於ける最高神を象徴しているからに他ならない。その天照国照尊と祖先の卑弥呼を祀ったのがトヨであり、それが比売大神として象徴されている。
- ・カモ族とは神族のことで、本来の天神族＝海部氏のことである。それを、秦

氏に乗っ取られてからは“賀茂”とされ、乗っ取った秦氏＝八咫鳥が“鴨”族である。

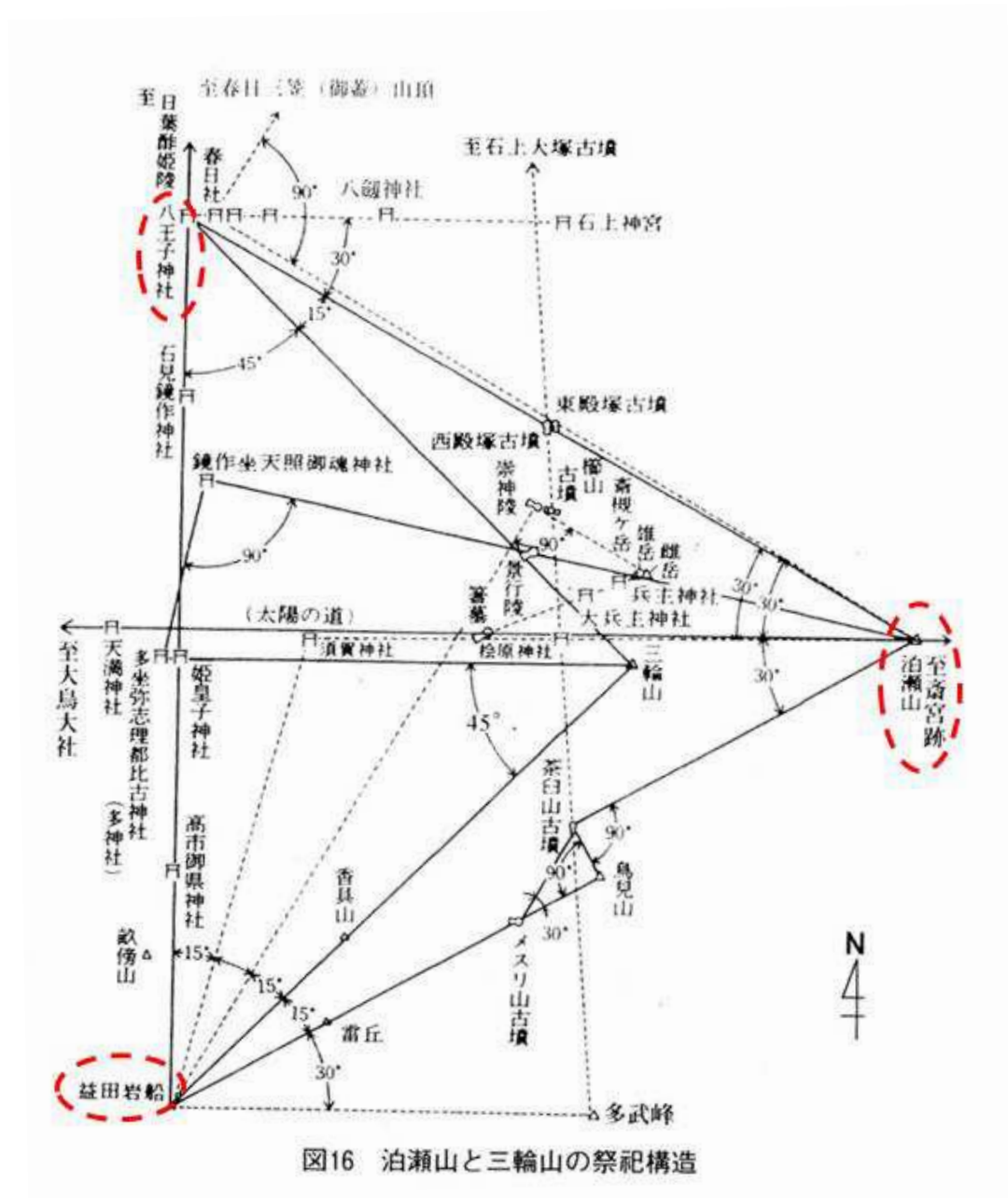
- ・ 出雲大社の素戔嗚社は大国主神の父あるいは祖神のスサノオを祀るが、実質は容易に国譲りしたのが蘇我氏（の祖）であることを暗示している。その蘇我氏は徐福の系統であるが、海部氏の神祭りを継承していた。
- ・ 徐福一団＝物部氏は改宗して秦氏となった。天之日矛が秦氏と見なされることが多いのは、天之日矛＝徐福だからである。容易に従った徐福一団が秦氏になったことにより、後から渡来した原始キリスト教徒の秦氏が徐福縁の地に赴き、同じ“秦”を冠する始皇帝に縁を関連付け、徐福が求めた“不老不死”をイエスの“復活”と重ねた。
- ・ “不老不死”思想のヤマトに於ける根源は海部氏であり、フェニキア＝フェニックス＝不死鳥に由来する。そのフェニキアの主神はイナンナである。

2: ヤマトに於ける古代祭祀

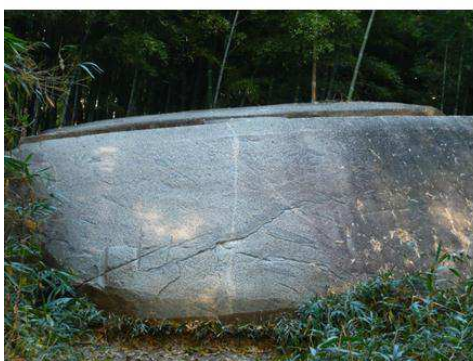
小川光三氏の著書「ヤマト古代祭祀の謎（学生社）」に、奈良盆地に点在する神社群・古墳群の配置が詳細に記され、その意味するところがまとめられている。それを参考に、ヤマトに於ける古代祭祀の真相をまとめる。なお、著書からの引用図は、著書内の図番号をそのまま利用しているので、この資料の中で順に図1、図2、…、となっているわけではない。

(1) 益田岩船（ますだのいわふね）と泊瀬（はつせ）山

奈良盆地に点在する神社群・古墳群は、益田岩船を基点とし、泊瀬山を拝する構造となっている。すなわち、岩船は古墳群と同時期に設定されたものである。



益田岩船は明日香の西側、岩船山（丘のレベル）の斜面にあり、東西 11 メートル、南北 8 メートル、高さ 4.7 メートル、重量 715 トンと推定される巨岩であり、上面には 160 センチ四方の方形の穴が東西に 2 つ並べて穿たれている。実際に見に行くと、案内してくれたタクシーの運転手も、奈良盆地にある有名な巨石をいろいろ見ているが、これほどのものは無い、とのことであった。



元々この山には存在しない岩で、ここから明日香の里を隔てた東にある多武峰（とうのみね）山系から運ばれたとされる。多武峰とは、神に幣（ぬさ）を手向けて祈りを奉げる“手向けの峰”の意味である。この多武峰には藤原鎌足を祀り、十三重塔（イエスと12人の使徒）で有名な談山神社があるが、その山系から超巨岩を切り出して里に降り、更に丘を登って設置することなど、現在でも相当困難な作業であり、「神々」の力添えがあったと考えられる。また、そこまでして持ってきた以上、相当重要な意味が秘められているはずである。

岩船を起点として神山と古墳の配置を見ると、30度、45度、60度といったお馴染みの角度で配置されている。このような方位を設定する古代の測量法としては、BC10世紀前後に編纂されたと言われる支那の天文数学書「周髀算経（しゅうひさんけい）」に記されており、角度の設定として句股之法（こうこのほう）があつて、句を3、股を4にとると、その対角の弦は5になり、句と股の角度は直角になるというピタゴラスの定理と同じ原理が、ピタゴラスが発見する以前から用いられてきたのである。また、これらの角度は、定規とコンパスで容易に作図でき、正統フリーメイソンの象徴でもある。

泊瀬山は古くから天照大神影向（ようごう、神仏が姿無く出現する意）の山として崇敬されていた。（近くに同じ名称の山“初瀬山”があるが、こちらではない。）これを遥拝するのが大神神社の摂社で、最初に天照大神を宮中外で祀った倭笠縫邑と言われる桧原神社である。泊瀬山は大和平野からは見えにくい場

所にあり、このように奥まって顕に見えない場所を隠国（こもりく）と言い、神聖な神の世界だった。（だから、神社などでも御神体を見ることができない。）

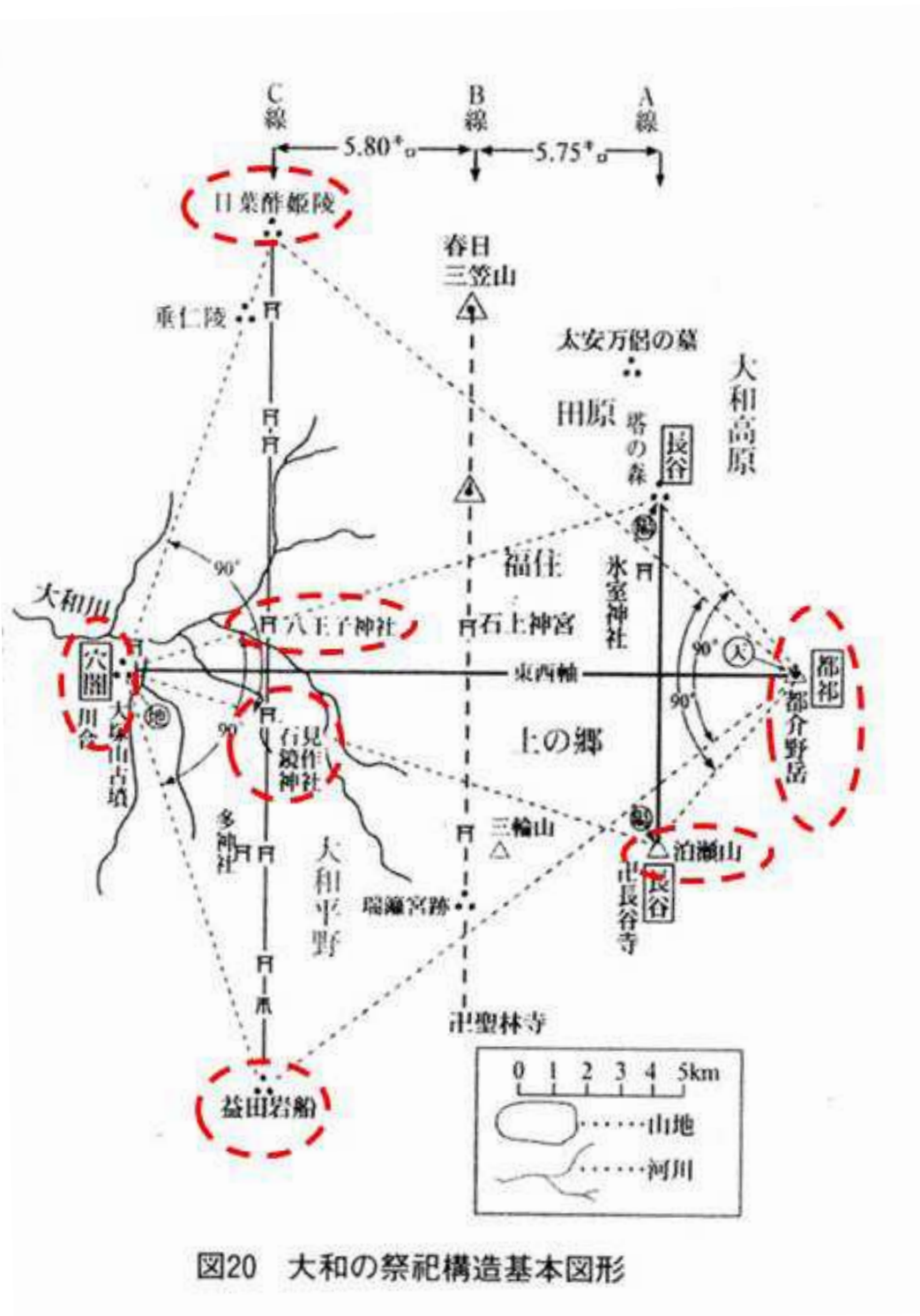
ここで、図 16 を見ると、日の出の山の三輪山を頂点とした直角三角形と、天照大神影向の泊瀬山を頂点とした正三角形に気付く。これは、太陽神を大和平野に導いて豊穰を祈念するためのもの、と小川氏は主張しているが、それだけではないだろう。そして、岩船を北に延長した端には日葉酢姫陵があるが、＜日本の真相 5＞に記したように、日葉酢姫は丹波道主王の娘で、卑弥呼が投影された海部氏の姫であり、太古の神祭りに於いて大変重要な役割を示唆している。

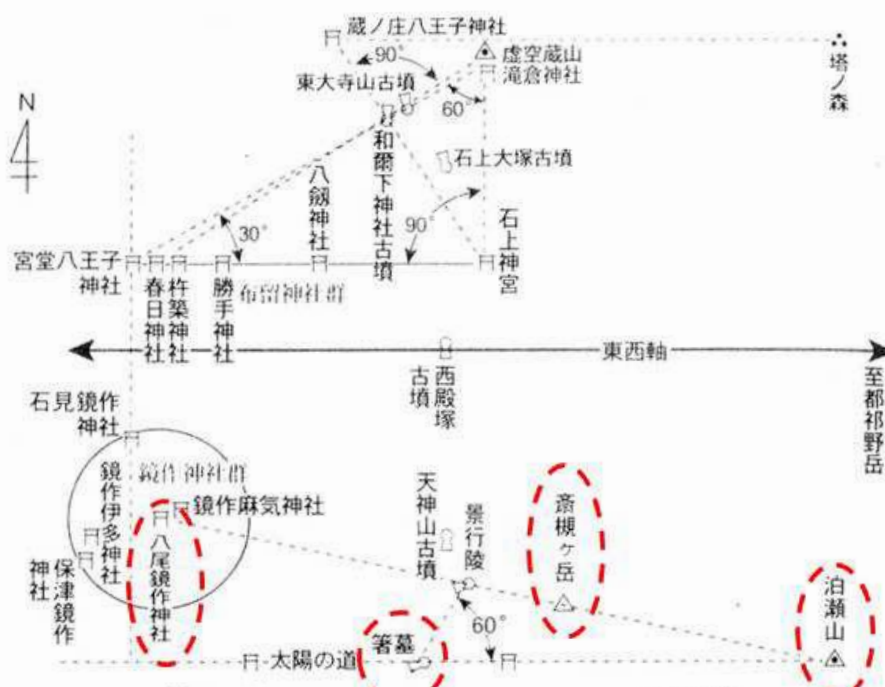
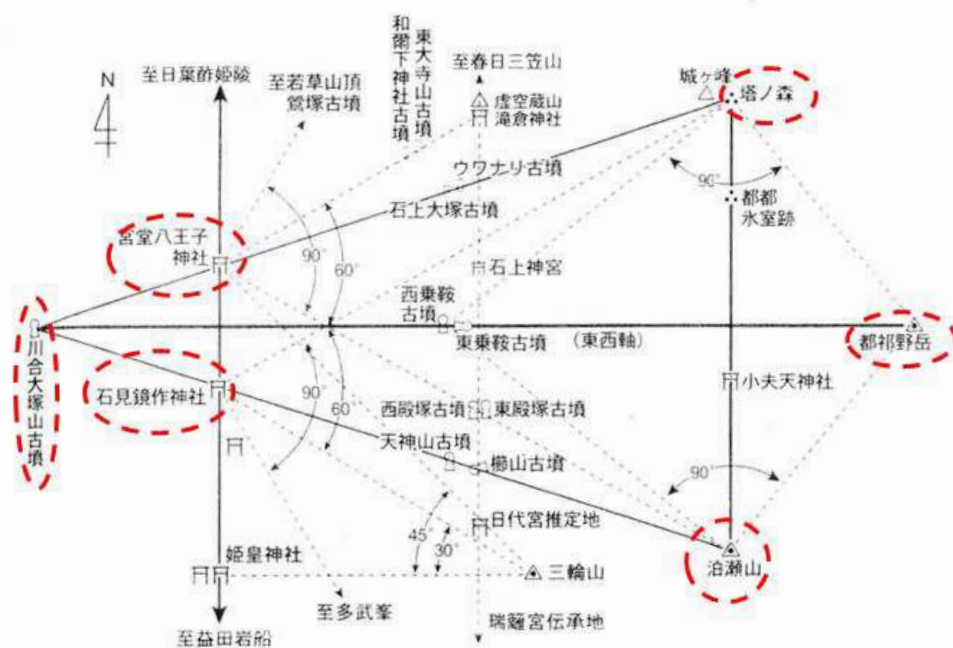
日葉酢姫陵と岩船の中間点の真東には都祁（つげ）村（現・奈良市都祁）の都介野（つげの）岳がある。（ここでは“媛”ではなく“姫”としておく。）

この都祁から真西に行くと穴闇（なぐら）に到達する。都祁は太陽の昇る方角だが、都祁を“つげ”と読むのは呉音読みとされ、漢音では“とき”と読む。古代朝鮮語では“とき”とは“太陽の出現する盛んな様子や日の出”を意味し、これが日本語化して“鶏がときを告げる”とか“ときの勢い”“ときの声”などという言葉ができた。この都祁一帯は都祁国造が支配する都祁国があったのだが、彼らの居住した地域は小山戸（おやまと）と言い、奈良県で“ヤマト”を冠する数少ない場所である。都祁の中心には都介野岳があるが、本来は都祁野岳（ときのだけ）であり、“日の出の神山”という意味である。また、朝鮮の三国遺事や支那の三国志には、この山が天を祀る神山であったことなどが記されている。穴闇は太陽が沈む方角だから、太陽が穴に入って闇となる、という地名になっている。

ここで、長谷（ながたに）ー泊瀬山ラインを A 線、三笠山ー聖林寺ラインを B 線、日葉酢姫陵ー岩船ラインを C 線とすると、A 線は聖なる山の聖線、C 線は平地の俗なる地域のライン、B 線は両者の接点の山麓地帯という構造であり、太陽神を大和平野に導いて、豊穰を祈念するための構造が明確である。（図 20）

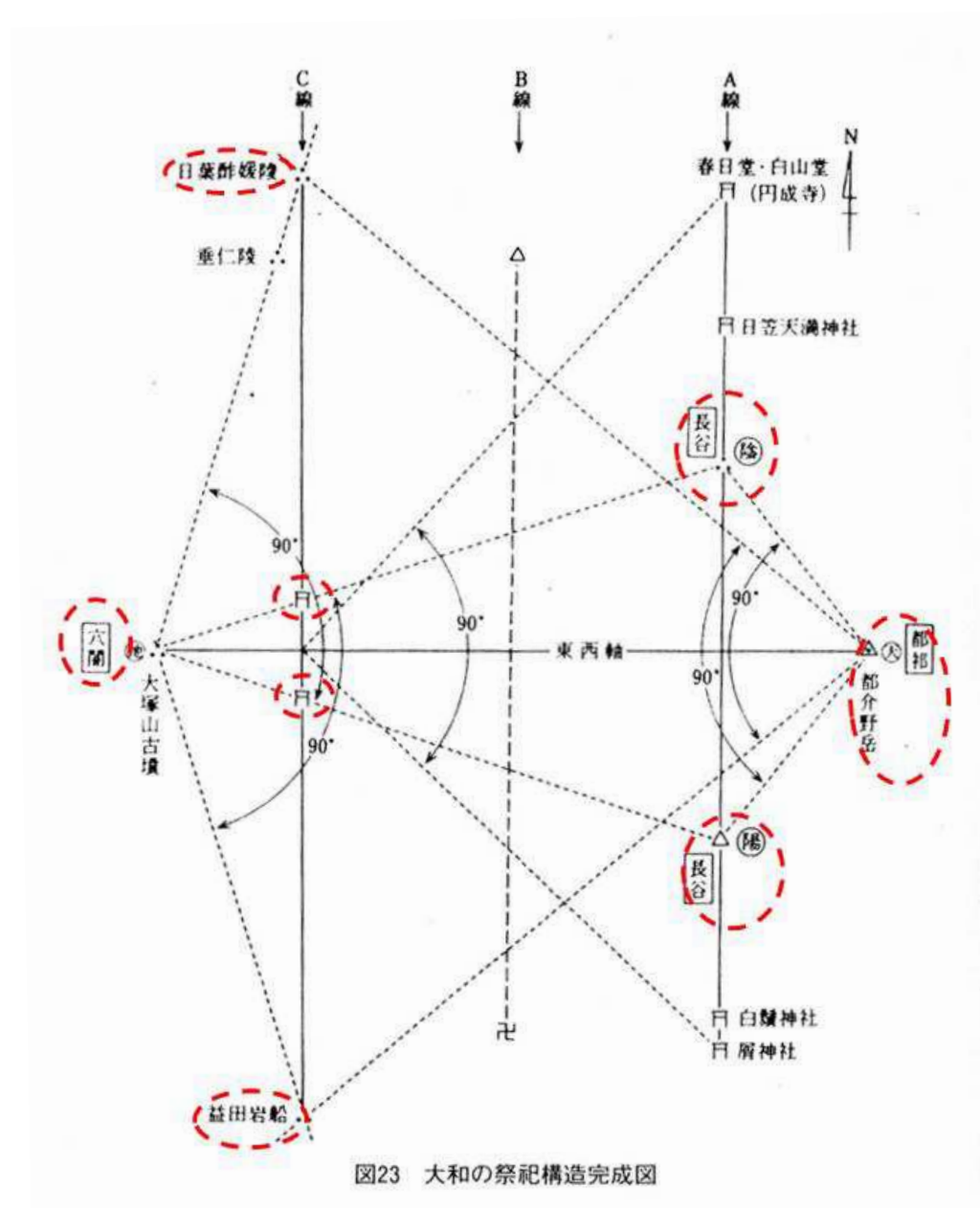
さて、この東西線を中心に、奈良盆地に広がる図形は見事、南北に分割される。天照影向の泊瀬山には長谷（はせ）寺があるが、その対称点にはやはり長谷という地名があり、水神を祭る氷室神社がある。そうすると、都祁を中心に、南が太陽神＝陽、北が水神＝陰という陰陽の構造であることが解る。同様に、岩船ー日葉酢姫陵ラインにある八王子神社は剣＝陰を、石見鏡作（いわみかがみつくり）神社は鏡＝陽を祀り、やはり南が陽で北が陰である。古墳の発掘では鏡や剣、玉が同時に出てくると思われがちであるが、この付近の古墳では鏡が発掘される場所では剣や玉は発掘されず、逆に剣や玉が発掘される場所では鏡は発掘されない。これは、神器としての陰陽が明確に区別されていることを意味している。





また、八王子神社から真東の石上神宮に掛けて剣と玉（玉も象徴としては陰）を祀る神社群が整列する。その北側の領域にある三笠山は三輪山と同様な円錐形の山であり、天を象徴する数字“三”を冠する天の山、すなわち、太陽信仰の山であるが、三笠山は同時に月への信仰にも関わり、有名な阿倍仲麻呂の歌にも詠まれている。月は象徴として陰だから、やはりこの領域は陰である。

更に、石見鏡作神社付近を拡大すると鏡作神社が点在するが、その本社は八尾（やお）の鏡作坐天照御魂神社（かがみつくりにありますあまてるみたまじんじゃ）で、正一位という最高格であり、天照大神の神霊と伝えられている。



石見鏡作神社からは冬至に三輪山から昇る太陽を、八尾鏡作神社からは立春と立冬に三輪山の日の出と二上（ふたかみ）山への落日を望むという位置関係にある。二上山の“二”は地を象徴するので、落日となる。また、石見の方は天神山古墳を介して泊瀬山に、八尾の方は景行天皇陵と斎槻岳（ゆずきがたけ）を介して泊瀬山に達する構造で、いずれも太陽信仰の泊瀬山に関わっていることから、鏡作神社は太陽神信仰を暗示している。

景行天皇は日葉酢姫と垂仁天皇の子で、日本武尊の父とされ、妹に倭姫命がいる。しかし、＜日本の真相5＞の“本来の皇統”に記したように、景行天皇は志理都彦命（彦坐王）と考えられる。図22から、この陵の後円部が、泊瀬山ー鏡作神社のライン上にあるのだが、その意味するところは後述する。

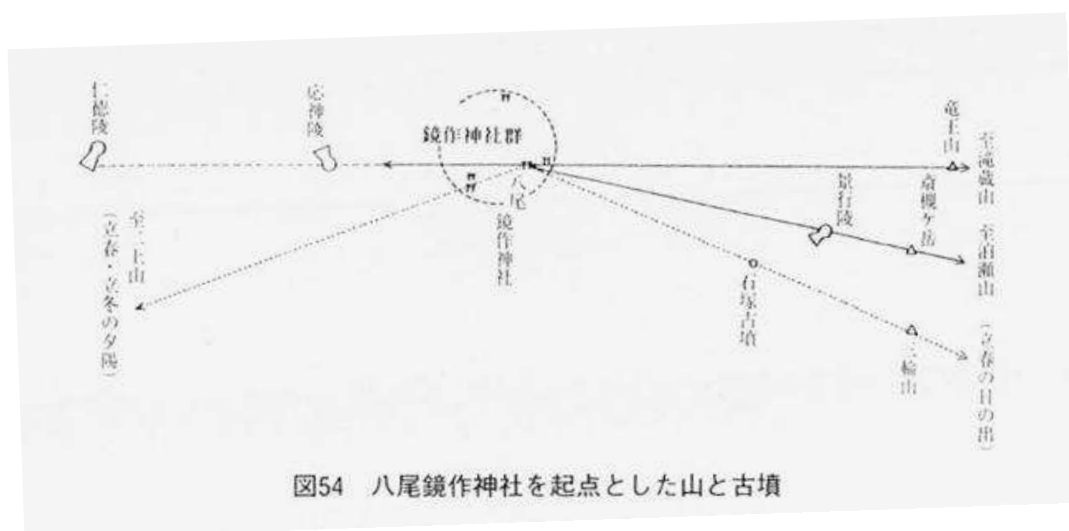
この八尾鏡作神社を見学したところ、一見、町の氏神様といった様相だったが、境内や本殿の作りは立派なものだった。前述のように、正一位という最高格であり、天照大神の神霊と伝えられているが、天火明命の分身がここの鏡である、と記されていた。天火明命＝天照国照尊で本来の男神・天照大神であり、故に、ここの鏡がその分身とされ、最高格なのである。すなわち、海部氏の天照国照尊が封印されているのであり、鏡ー景行天皇陵ー泊瀬山のラインで、これを暗示しているのである。



また、“八尾”を“鏡”に映せば“八頭”であり、＜日本の真相 5＞に記したように、八咫とは八頭のことであり、八岐大蛇の象徴である。八岐大蛇の尾から出てきたのは草薙神剣だから、八尾鏡作神社は草薙神剣を奉じて太陽神・天照大神（天照国照尊）を祀っていることの象徴でもある。

更に、境内の池の中央には小さな磐座があり、そこに神籬が立っていた。これは、元々海部氏の領地であり、現在は 3 本鳥居の立っている太秦の木嶋坐天照御魂神社と同じ構造だから、やはり海部氏が封印されているわけである。

鏡作神社の位置は重要で、他にも仁徳・応神天皇陵などとも深い関わりを持っている。



ところで、7 ページの図 20 を良く見ると、太陽神影向の三輪山と泊瀬山の北側領域が“上の郷”となっている。“上の郷＝上ノ郷”で、“上ノ郷”には本来の神宮である伊雑宮がある。更に、近くには白木という地名があり、伊雑宮のある志摩にも同様の地名がある。ということは、地名を“上の郷＝上ノ郷＝神の里”とすることにより、邪馬台国の位置を暗示しているのではないかな？

海部宮司は、木津川を上ってかの地に着いた、と言われた。確かに、木津川を上って行くと奈良に行けるが、そこは三笠山の近くであり、邪馬台国の位置とは程遠い。そこで、更に遡って行くと名張川に分かれ、それが宇多川に分岐して泊瀬（初瀬）、上の郷付近に到達する。また、奈良盆地はかつて湿地帯（古くは湖）であり、邪馬台国の時代は三輪山山麓の纏向遺跡付近ではなく、泊瀬付近の方が最初の王国建設には向いている。

日本書紀には、天照大神が天邑君（あめのむらのきみ、天上界に於ける村の長）を定め、天狭田（あめのさなだ）と長田（ながた）を作った、とある。このような山間地では平地のような田は作れないので、段々畑のような狭い田やどちらかの方向に長い田にならざるを得ず、この天狭田と長田は泊瀬付近の山

間部に最初の王国ができたことを暗示している、と見なせる。

また、神武天皇は即位して 4 年後、靈時（まつりのにわ）を鳥見山（とみやま）の上小野榛原（はりはら、はいばら）及び下小野榛原に造営し、皇祖である高皇産靈神を祀った、とされる。“鳥見”とされる場所はいくつかあるが、長谷寺の東に榛原があり、その北西方向、泊瀬山の東側に鳥見山があるから、ここがその鳥見山だと考えられ、泊瀬～上の郷付近で一致する。（図 16 でも三輪山の南側に鳥見山があるが、岩船－鳥見山－茶臼山古墳で屈曲させ、泊瀬山に到達させていることから、この鳥見山も泊瀬山を象徴しているのだろう。）

女神の天照大神と神武天皇は秦氏の創作だが、神祭りをを行う卑弥呼の姿が投影されている最高神と、初めてヤマトの地に入って行ったとされる天村雲命が投影されている初代・神武天皇の逸話の両方で泊瀬～上の郷付近を暗示しているということは、そこそこ邪馬台国のあった場所だった、という可能性が非常に高い。

しかし、卑弥呼の次の男王の時代には国が乱れ、13 歳のトヨを女王に立てることにより、ようやく国は治まった。トヨは海部氏系図では 11 世孫・日女命に相当するが、この時の大王は小登與命＝御間木入彦命で、天皇名としては崇神天皇であり、諡号はハツクニシラススメラミコトである。卑弥呼の邪馬台国は一部がまとまっていただけだが、トヨの時代によりやうく日本国としての体裁が初めて整ったからこそ、“ハツクニシラス”なのである。そして、邪馬台国は纏向にあったとされるが、海部宮司は、邪馬台国は邪馬台国と大邪馬台国、あるいは前期邪馬台国と後期邪馬台国に分けられる、と言われている。ならば、卑弥呼の邪馬台国は泊瀬～上の郷にあり、トヨの大邪馬台国は纏向にあったのではなかろうか。現に、泊瀬～上の郷には巻向山があり、同じ“まきむく”である。この点については、後ほど詳細に検討する。

なお、神武天皇陵は三輪山からの冬至の落日が見られる位置にある。冬至は太陽復活の日だから、神武天皇の真相が天村雲命で、この国に於ける海部氏最初の大王ならば、不老不死伝説の海部氏を意識しての配置である。

(2) 十一面観音とお地蔵さん

泊瀬の有名な長谷寺には大きな十一面観音があるが、奈良盆地には十一面観音を祀る寺社が他にも多く存在する。円成（えんじょう）寺、屑神社近くの観音堂、大神神社の神宮寺だった聖林（しょうりん）寺、天満神社近くの帝釈寺、塔の森、春日大社の春日四所明神の本地仏など。

十一面観音の原型はインドの山の神で天候神の十一荒神ルドラとされるが、真相は＜神々の真相 3＞に記したようにコスミック・ヴィシュヌであり、「生命の樹」そのものである。日本では天候を支配するのは天神で、天神の降臨する依り代は神籬であり、その原型は草薙神剣＝アロンの杖だから、これも「生命の樹」の象徴で、十一面観音と神籬は象徴として同一である。故に、習合して霊木たる十一面観音が盛んに造られるようになったのである。十一面観音を祀るのはいずれも真言宗系だが、真言宗は真言密教であり、日本に於ける仏教の根源、隠された秘密の教えである。

特に泊瀬と共に太陽神信仰である大神神社の神宮寺だった聖林寺には巨大な花崗岩製の地蔵菩薩像があるが、全国各地にあるお地蔵さんの多くは石でできている。地蔵の原型はインドの大地豊穰の神クシュティガルブバであり、これが神道に於ける大地の神が出現する磐座と習合して石のお地蔵さんとなった。大地豊穰の神と言えばイナンナことであり、イナンナは女神だから陰、磐座も陰である。

そうすると、十一面観音と地蔵菩薩という組み合わせは、天神の依り代である神籬と大地の神が出現する磐座の変形だと言え、陰陽合一を象徴しているのである。特に十一面観音は天のラインである A 線に集中しており、それは天神の依り代を象徴しているからに他ならない。そして、十一面観音は「生命の樹」で、イナンナが掛けられた木が原型であり、また中東ではナツメヤシが「生命の樹」と言われており、ナツメヤシはイナンナの好物だったことからイナンナの木であり、地蔵菩薩は大地豊穰の神でイナンナの象徴だから、この組み合わせは“木に掛けられたイナンナ”に他ならない。それが、原始キリスト教では“十字架に掛けられたイエス”となっているのである。つまり、秦氏のカバーラでは、十一面観音と地蔵菩薩という組み合わせで“十字架に掛けられたイエス”を暗示しているのである。

(3) 岩船の意味

岩船は前述のように、神社群・古墳群の起点となっている。その岩船の上部には 2 つの穴があるが、そこに神籬を立てれば、岩船は大地の神、神籬は天神が降臨する依り代ということで、天地の陰陽合一を表す祭祀施設となる。

かつて大和地方では、春に 2 本の高い棹を立てる行事が盛んに行われていた。旧暦 4 月 8 日に農家で行われていたテントバナ（天道花）という行事（お祭り）である。これは、高低 2 本の竹竿の先に野草の花を付け、これを天に向かって庭先に立て、高い方は太陽に、低い方は月に奉げる。すなわち、陰陽一対の花を天に奉げるお祭りで、竹竿は天からの神を迎える依り代であり、神籬である。この日は稲播種を行うにあたり、天からの穀霊を迎える日であり、山から神を迎える日でもあった。これは天＝陽、山＝大地＝陰で、天地合一の陰陽合一である。そして、斎槻岳の山麓にある大兵主（だいひょうず）神社（穴師（あなし）下社）の例祭日でもあり、山頂の元兵主神社（穴師上社）から下社に神を迎える。また、大神神社では三輪山の山頂から若宮社に神霊を迎えるが、若宮社は大物主神を祀った大物主神の子孫、大田田根子を祀る。いずれも山から神を迎えるわけだが、兵主神社は太陽信仰の根源である泊瀬山に繋がる斎槻岳の山頂にあり、大物主神を祀る三輪山も太陽信仰だから、その神とは、実は太陽神である。（兵主神社の詳細については後述する。）だから、テントバナに於ける“天からの穀霊”も太陽神のことである。そして、大物主神を子孫の大田田根子が祀ることにより大物主神の祟りが治まったことは、古代に於ける神祭りは特定の血統の者にしか許されないことを暗示している。故に、大田田根子を祀る社に大物主神の神霊を迎えることは、古代に於ける神祭り＝邪馬台国に於ける神祭りを再現し、暗示していることに他ならない。

仏教に於ける釈迦の誕生日、花祭りもこの日だが、釈迦を花で飾って甘茶を掛けるのは日本だけの風習で、大陸や半島には、そのような風習は無い。つまり、このテントバナが仏教と習合したのである。

花はコノハナサクヤヒメの象徴で、降臨してきたニニギと結婚して 3 人の子供が生まれた。ニニギ＝ホノニニギとは“稲が実る”という意味なので、このテントバナは、天から穀霊が降臨して花の精と結ばれると豊穡になる、というお祭りなのだが、コノハナサクヤヒメは海部氏の、ニニギは秦氏の象徴だから、秦氏が海部氏に婿入りしたことも暗示している。

前述のように、長谷寺には大きな十一面観音があるが、伝説に依ると、巨岩の上に開けられていた 2 つの穴に霊木の観音を立てたという。これは、大地の神が出現する磐座に天神の依り代である神籬を立てたことと同義であるが、岩船の上部にも 2 つの穴がある。ならば、ここにも神籬を立てれば、陰陽合一の象徴となる。その神籬とは前述のテントバナであり、故に、祭りとして伝承されてきたのである。

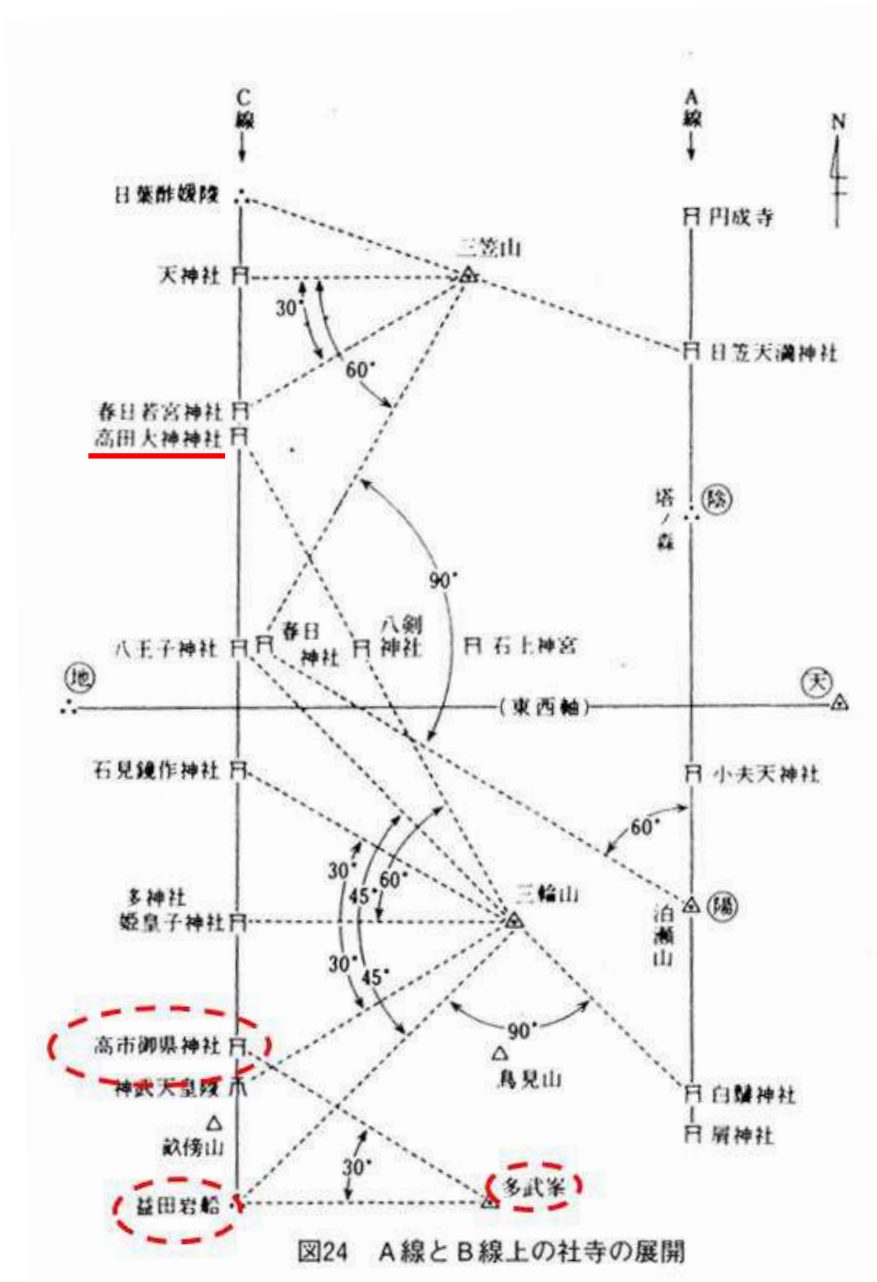
岩船の上に立つ神籬は高い木だが、高い木と言え、高木神＝高皇産霊神である。高皇産霊神は天照大神と並ぶ最高神の一柱だが、何故かこの神を祀る神社はごく僅かで、大和では橿原の北にある高市御県（たけちのみあがた）神社のみである。この神社は第一位の“御県に坐す神”という扱いであり、名神社という高い格式を誇る。この神社と岩船、多武峰を結ぶ三角形は 30 度、60 度、90 度を成す直角三角形を形成する。

岩船は前述のように多武峰から持って来られたものであり、大和平野の巽という方角に相当するこの山系は、神々の世界とされていた吉野・熊野山系との接点である。＜日本の真相 5＞に記したように、天村雲命は吉野に入って真名井の水を祀り（＝草薙神剣を奉じて天照国照尊を祀り）、熊野という地名は海部氏・尾張氏を象徴して日神を祀ることを暗示しており、天空の大熊座は北極星＝太一の周りを周回する御者だから、神宮を護る役目も暗示しているが故に、吉野・熊野山系は神々の世界とされているのである。

また、(1)に記したように、多武峰とは、神に幣を手向けて祈りを奉げる“手向けの峰”の意味である。その真西に岩船が位置することは、岩船が神々の世界を地上に勧請することを意味する。その多武峰にある談山神社では藤原鎌足が祀られ、その息子が不比等であり、秦氏のカッパーラにより様々な仕掛けを施した。その不比等をモデルとして創作したと言われるのが高木神＝高皇産霊神であり、これを祀るのが、岩船の真北にある高市御県神社である。そして、多武峰－岩船－高市御県神社は特徴的な三角形を形成する。

故に、高市御県神社で不比等＝秦氏＝八咫鳥の関与を仄めかし、岩船を起点として、奈良盆地に秦氏の仕掛けが施されたことを暗示している。

なお、この図の中に高田大神神社があるが（次ページ図 24）、別名を壺明神と言う。三輪山とこの神社の間に八剣神社があり、三輪山は鏡で、マナの壺とアロンの杖が揃うことになる。



(4) 古墳と山立てが暗示する邪馬台国の位置

①山立て

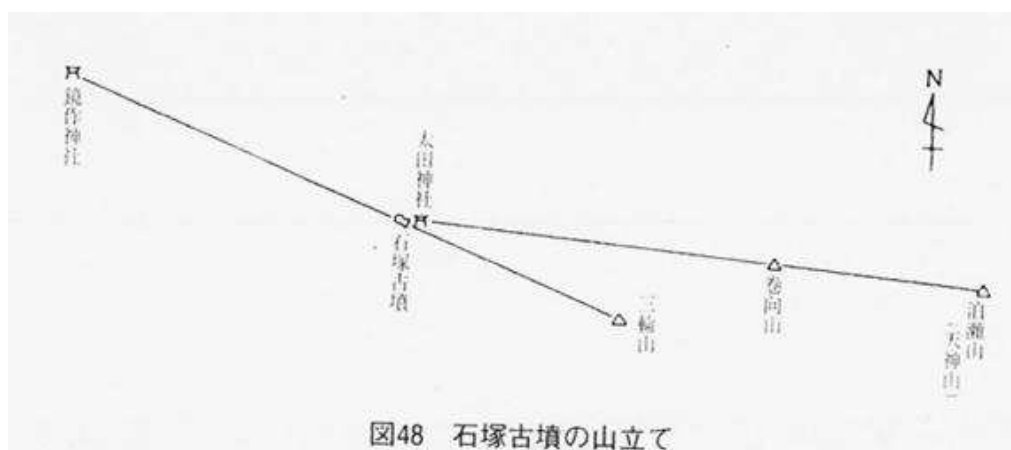
以上のような神社群・古墳群の配置は意図的だということが良く解るが、その配置方法として“山立て”という手法が使われている。

山立てとは、海上の船から陸地に重なって見える2つの山頂（あるいは目印となるような木や構築物）などを適宜選択し、これを真っ直ぐに見通すと、海上に1本のラインを設定したことになる。次に、このライン上の船から別の目

標を定め、このラインとその目標との角度を記憶しておけば、いつでもその場所に船を進めることができる。これを山立てと言う。このようにして、近海の漁師たちは豊富な魚場を発見した時、山を立てて位置を記憶し、それが航海にも応用され、航海長のことも山立てと呼んだ。例えば、纏向遺跡の石塚古墳（最古級の帆立貝式前方後円墳）を見てみると（図48）、その円丘部の中心が泊瀬山と巻向山を立てたライン上に位置し、中心線を三輪山に向けた山立てになっている。しかし、船での山立てとは以下の違いがある。

- ・立てた山が神山であること。
- ・その山の1つ（泊瀬山）が古墳から見えないこと。
- ・ライン上に古い神社があること。

この古い神社というのが、(1)で記した極めて重要な神社、八尾鏡作神社であり、天火明命＝天照国照尊で本来の男神・天照大神の分身としての鏡を祀る、海部氏の天照国照尊が封印された神社である。この神社から石塚古墳を介して三輪山の山頂に日が昇るのは立春であり、春を迎える日だから、三輪山から太陽神を大地に迎える豊穰の祈念である。



泊瀬山が見えないのは、山の神霊を大地に迎える神の道であることに重要な意味がある。それは前述のように、神道では畏敬すべき存在を直接見てはならない、という考えに基づく。その根源は、シュメールで「神々」は姿を見せず（ある時から見せなくなった）、「神々」の地に人間が踏み込むことは禁止されていたことに因る。泊瀬山は現在、与喜山（よきさん）とか天神山と言われるが、かつては天照大神に仕える斎宮があり、天武紀には泊瀬の斎宮のことを“身を潔（きよ）めて、稍（やや）に神に近づく所なり”とあり、神の忌み隠（こも）る尊い場所である。

更に、石塚古墳のすぐ東には太田神社があるが、正式名は他田坐（おさだに

ます)天照御魂神社で、祭神は八尾鏡作神社と同じ天火明命＝天照国照尊である。そして、鳥居や玉垣は無く、大きな楠木が聳える境内に拝殿・本殿が建ち、境内の端に“天照御魂神社”と彫った大きな自然石があるのみで、神社名の表示や由緒案内など何も無い。ならば、この神社も大変重要な封印された神社だ、ということである。(<http://www3.ocn.ne.jp/~tohara/nara-osada.html> 参照。)

前述のように、この場所から三輪山山頂に立春の日の出が見えるが、立冬の日の出も見え、春分と秋分には巻向山山頂に日の出が見える。敏達天皇が他田幸玉宮に遷座し、日祀部(ひまつりべ)を設置していることから、この場所は日読みの地である。そして、地名の“太田”は大物主神を祀った大田田根子を象徴するから、古代に於ける神祭りの真相が隠されていることを暗示する。

その鍵となるのが、神社と古墳が並列していることである。石塚古墳の中心線は三輪山に向けられ、八尾鏡作神社－石塚古墳－三輪山という太陽神影向ラインが形成されているが、古墳を山の一種と見なし、八尾鏡作神社を太田神社に、石塚古墳を巻向山に、三輪山を泊瀬山に遷せば(映せば)、太田神社－巻向山－泊瀬山という太陽神影向ラインに変換される。太田神社と石塚古墳が並列していることは、ここを基点にラインを変換せよ、という暗示であり、三輪山の祭祀の元は、石塚古墳＝太田神社を基点にライン変換した泊瀬山を中心とした祭祀であることを暗示していると言える。前述のように、石塚古墳の円丘部の中心が泊瀬山と巻向山を立てたライン上に位置するが、古墳の円丘(後円部)は天、方形(後円部)は地を表す。つまり、前方後円墳とは、天地合一・陰陽合一を象徴したものであり、天神は太陽神に他ならないから、円丘の中心が泊瀬山－巻向山ラインにあることは辻褄が合う。だからこそ、泊瀬山が天神山と呼ばれているのである。

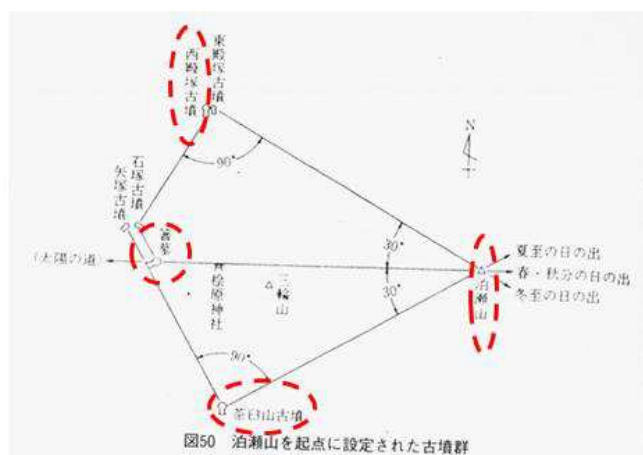
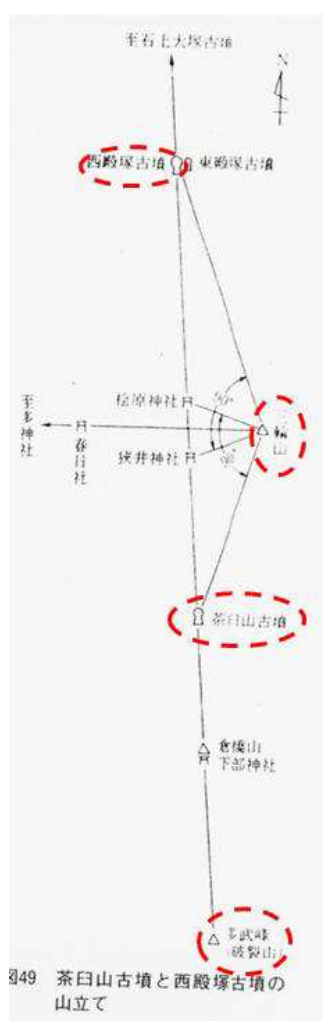
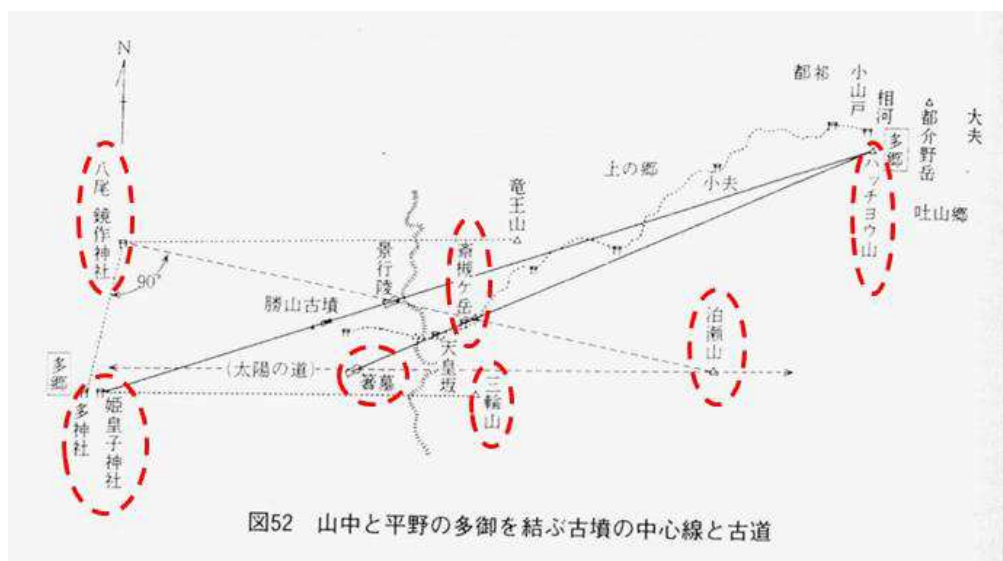
また、(1)に記したように、八尾鏡作神社は斎槻岳を介して泊瀬山に達する構造で太陽神信仰を暗示するから、三輪山は地祇の大物主神を祀ってはいるものの、八尾鏡作神社を介して三輪山の本来の信仰が太陽神信仰であることを暗示しているとも言える。その鏡作神社は様々な重要古墳と山に関係しており、如何に重要な神社なのか暗示されていることは、前述の通りである。

以上のことから、三輪山祭祀の元は泊瀬山祭祀と考えられる。

②邪馬台国の位置

ここで、卑弥呼が前期あるいは小邪馬台国、トヨが後期あるいは大邪馬台国ならば、三輪山祭祀がトヨで、泊瀬山祭祀が卑弥呼なのだろうか。

(1)では、泊瀬～上の郷付近が邪馬台国のあった場所で、トヨの大邪馬台国は纏向にあったのではないかと推定した。また、これまではトヨが三輪山で太陽神を祀ったと見なしてきた。しかし、三輪山はトヨの墓とされる箸墓と泊瀬山のラインからわずかにずれている。そして、図 16 や次に示す図 52 から見ても、三輪山は泊瀬山とは直接関係していない。むしろ、“太陽の道”とされるライン上にあるのは箸墓と泊瀬山で、やはり三輪山は直接関わっていないのである。



また、図 49 のように茶臼山古墳と西殿塚古墳を介し、図 50 のように、その両古墳が箸墓－泊瀬山のライン（太陽の道）と夏至・冬至の日の出の角度を形成している。茶臼山古墳－西殿塚古墳のラインの南端は多武峰であり、そのライン上に大神神社の摂社で水を祀る狭井神社と太陽を祀る桧原神社が、三輪山－春日社のラインに対して対象に位置する。

三輪山と泊瀬山は、このようになんかなり間接的な位置関係であり、トヨの大邪馬台国が、直系 2 代前の卑弥呼の邪馬台国をこのような複雑な関係で暗示しているとは考えにくい。それよりも、このような三輪山と泊瀬山の関係は、泊瀬山での祭祀と三輪山での祭祀の間に大きな断絶があることを暗示していると考えの方が妥当である。すなわち、三輪山での祭祀は大和朝廷のものであり、泊瀬山での祭祀はトヨの大邪馬台国の祭祀ということである。それは海部氏・尾張氏から秦氏へと権力・権威が委譲され、皇統が変えられた、ということを暗示しているのではないか。この考えを裏付けるためには、前述のもう 1 つの太陽神影向の地で、“日の出の神山”という極めて重要な意味を成す都介野岳との関係を見なければならない。

7 ページの図 20 にあるように、ヤマトの祭祀基本構造は、最も東に位置する都介野岳を中心として綺麗な対称形となっており、日の出の都祁野から始まって展開し、穴闇に収束するかのような構造である。これこそが、都介野岳が最も重要な地点であること、すなわち、ヤマトに於ける祭祀の“始まりの地点”であることを暗示していることに他ならない。これは、箸墓の中心線が泊瀬山の方には向いておらず、斎槻岳と八王山（はっちょうさん）を経て都介野岳を向いていることでも暗示され、箸墓での祭祀の元が都介野岳（都祁野）であることを暗示している。（次ページ図 35。）

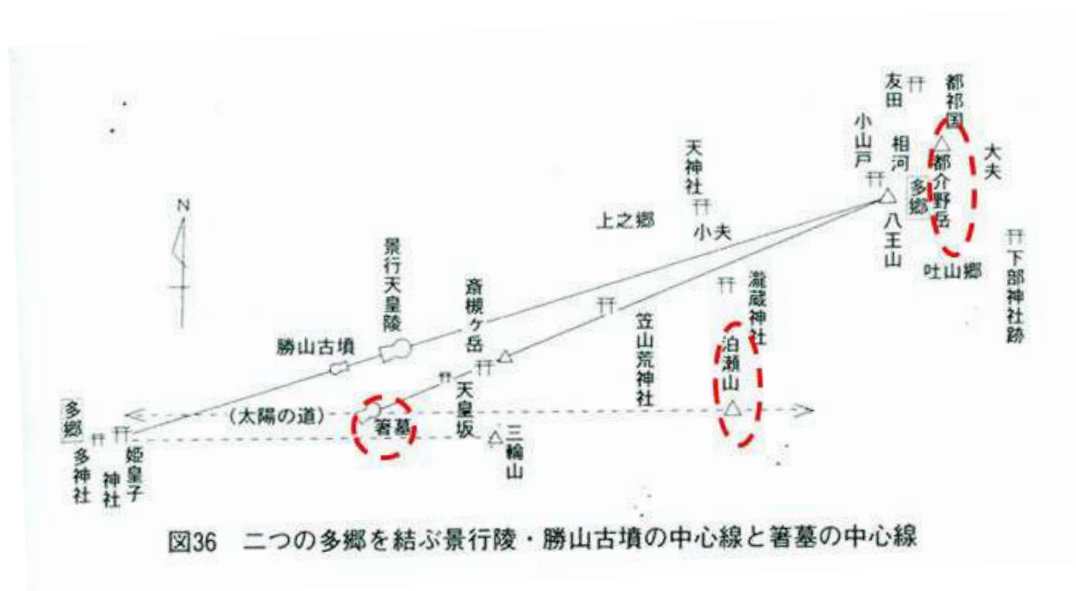
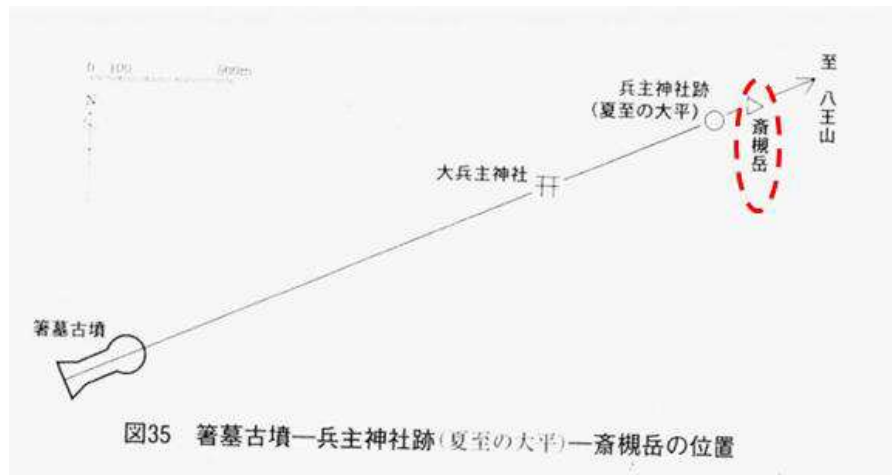
斎槻岳については万葉集にも詠まれており、いずれも雲が掛かって恵みの雨を期待する歌である。

- ・穴師川 川波立ちぬ巻向の 斎槻岳に雲居立てるらし
- ・あしひきの 山川の瀬の響るなべに 斎槻岳に雲立ち渡る

また、八王山は“八大龍王（水神）の山”という意味だが、一説には、スサノオによって 8 つに切断された八岐大蛇の 8 つの身に 8 つの頭が取り付き、8 つの小蛇となって天に昇りって水雷神と化し、天村雲剣に従ってヤマトの国の布留川の川上にある日の谷に降臨し、八大竜王になったという。

(<http://kamnavi.jp/log/yumv0110.htm> 参照。)

つまり、斎槻岳は雨をもたらす龍神、八王山は水雷神と化した八岐大蛇を象徴し、いずれも草薙神剣を暗示している。それが都祁野の前にあることは、天照国照尊を祀るために草薙神剣を奉じたことを暗示しており、箸墓の中心線が指し示す方角は極めて重要である。つまり、箸墓の主、トヨが示している方角は、祖先の卑弥呼が神祭りした場所を暗示していることに他ならず、都祁野こそが、卑弥呼の邪馬台国だと言える。



他にも、八王山麓には都祁山口神社があり、裏山には御社尾（ごしゃお）の磐座がある。この御社尾の磐座—祭祀遺跡状の台地—八王山の配置は、箸墓—夏至の大平（兵主神社跡）—斎槻岳と同じ構造であり、元が八王山から都祁野にあることを物語っている。

この都祁山口神社は式内大社という重要な格式で、大山祇神と大国主命を祀る。ならば、海部氏系である。縁起としては、神武天皇の皇子、神八井耳命（カムヤイミミノミコト）の孫、都祁直が鬨鶏の国造となり、小山戸に居住して都祁氏の氏神として神祀りを始めたことが起源とされ、神主職は貞観年間より藤原氏を称している。ここに祀られていた都祁水分神社は天禄 2 年に鞆田の阪窪山に遷座された。

(<http://www.geocities.jp/englishiki01/yamato/html/031507-01.html> 参照。)

その都祁水分神社は、大和の国水分四社（都祁、宇陀、吉野、葛城）の 1 つ

で、速秋津彦命、天之水分神、国之水分神が祀られ、大和川と木津川の分配を司る神として祀られている。

(<http://www.tsugemukumari.or.jp/>参照。)

神八井耳命には“ミミ”という文字（言葉）が含まれているが、山幸彦＝ホホデミ＝彦火明命には“ミ”が含まれ、神武天皇の亦名でもあり、大和朝廷にとって極めて重要な名前である。第2代・綏靖天皇はカムヌナカハミミで“ミミ”、第3代・安寧天皇はタマデミで“ミ”を含む。また、大丹波王国の但馬にはフトミミあるいはサキツミミという人がいて、その娘が天日槍と結婚したという伝承があるが、ここでも“ミミ”が含まれる。更に、魏志倭人伝に依ると、投馬国＝大丹波王国の一部の長官は弥弥（ミミ）、副長官は弥弥那利（ミミナリ）とされ、やはり“ミミ”が含まれる。では、“ミ”もしくは“ミミ”とはどういう意味なのだろうか。

神からの言葉を授かっていたのが“みこ”だが、この“みこ”という言葉は、“巫女”“皇子”“皇女”“御子”“神子”と書ける。この場合、いずれも男性名だから“御子”もしくは“神子”が該当する。そうすると、“ミ”は“御”“神”に該当するので、“ミ”は“神”、“ミミ”は“神々”の象徴となる。（伴とし子著、「ヤマト政権誕生と大丹波王国（新人物往来社）」参照。）また、御神酒は“おみき”と読み、“神”は“み＝ミ”に対応していることも、これを裏付ける例である。ならば、その大元は彦火明命＝ホホデミであり、海部氏の象徴である。それが小山戸で神祀りを始めた都祁氏＝ツゲの国造であり、後に藤原氏に乗っ取られたということである。因みに、シュメール語で“ミ＝mi”と書かれる意味は“女”、似たような“mis”は“主人、聖職者”という意味で、海部宮司がイナンナを重視されていることからすると、“ミ”は元々“女神イナンナ”もしくは“イナンナに仕えた大王、神官”の可能性がある。そして、ホホデミ＝彦火明命＝天照国照尊ならば、この“ミ”は太陽神をも意味する。ならば、“ミ”はイナンナと太陽神ウツという双子の兄妹の「合わせ鏡」を暗示しており、“ミミ”ならば“神々”ということで両者である。この二柱は、初めて地球上で誕生した「神々」に他ならない。

都祁水分神社は大和川と木津川の分配を司る神を祀り、海部氏は木津川から上ってヤマトの地に入ったから、これも海部氏の象徴である。

よって、八王山は伝承からも神社の縁起からも、海部氏を暗示するものである。

都介野岳については、13世紀末に高麗の高僧、一然によって書かれた三国遺事に興味深い記述がある。新羅の延鳥郎（ヨンオラン）と細鳥女（セオニョ）の逸話である。

“第8代・阿達羅王の即位4年（AD157年）の丁酉の年のこと。東海の浜辺に延鳥郎と細鳥女がおり、夫婦で暮らしていた。ある日、延鳥郎が海中で海藻を探っていると、突然岩（魚の場合もあり）が出現し、延鳥郎を乗せて日本に帰った。日本の人は「これは並みの人ではない」と言い、王に擁立した。

細鳥女は夫が帰って来ないのを不審に思い、夫を探し求めた。夫の脱いだ鞋

(わらじ)を見つけると、彼女もまた岩に上った。岩はまた前のように細鳥女を乗せて日本に帰った。日本の人は驚き怪訝に思い、謹んで王(延鳥郎)に細鳥女を献上した。そして、夫婦が再会することとなり、細鳥女は后とされた。

この時、新羅の太陽と月は光を消してしまった。日官(イルクワン)という予言者が(新羅の)王に奏して言うには、「日月の精は、降臨して我が国に在った。しかし今、日本に去ったので、この不思議な現象に到った」と。新羅王は使者を派遣して2人を探した。延鳥郎が「私がこの国に到ったのは、天が然るべくさせたものである。今どうして帰ることができようか。だが、私の妃が織る薄絹があるので、これを持ち帰って天を祀ると良いだろう」と言った。

使者はその薄絹を持ち帰り、新羅王に事の仔細を奏上し、延鳥郎から言われた通りに薄絹を奉じて天を祀った。すると間もなく、太陽と月は元に戻った。そして、その薄絹を国宝として国王の倉庫に収納し、その倉庫を貴妃庫と名付け、天を祀った場所を迎日県、または都祁野と名付けた。”

この場合の新羅とは、BC2世紀末からAD4世紀にかけて存在した辰韓のことだが、この逸話は天日槍=天之日矛の逸話とそっくりである。＜日本の真相4＞にも記したように、古事記では、赤い玉が変化した妻、阿加流比売神(アカルヒメ)を追って天日槍は但馬国に上陸し、そこで現地の娘、前津見と結婚した。日本書紀では、新羅王子・天日槍が7種の神宝を持参して渡来し、但馬国の出石に定住して現地の娘、麻多鳥(マタオ)と結婚した。(アカルヒメを追いかける主人公は意富加羅(おおから)国王の子、都怒我阿羅斯等(ツヌガアラシト)となっている。)記紀では、男が女を追って渡来したことになっており、「合わせ鏡」で逆にされている。しかし、いずれも但馬国で結婚したことは共通しており、但馬は大丹波の一部だから、海部氏を象徴している。

絹を持って帰る話は、日本書紀に登場する。ここでは新羅が任那に変えられ、新羅が悪者扱いである。それは、新羅の建国に海部氏に関わっていたため、陥れたのである。

“都怒我阿羅斯等は崇神天皇の御世に加羅=任那から渡来し、垂仁天皇に3年仕えた後、帰国した。その際、垂仁天皇から赤織の絹を賜って帰国し、自分の国の蔵に収めて大切に保管したが、新羅人がそれを聞いて兵を起こしてやって来て、その絹をすべて奪って行った。”

記紀は13世紀末に書かれた三国遺事よりも遙か以前に完成されているので、記紀が三国遺事を真似たのではない。元々、日本にも朝鮮半島にも同じ話が伝承されていた、ということである。つまり、どちらも共通の史実を基に書き上げられたのである。それは、天日槍=天之日矛伝承である。＜日本の真相5＞に記したように、実は天日槍=天之日矛=田道間守=徐福で、海部氏の祖で新羅建国に助力したとされる瓠公と、新羅王になったとされる脱解王の話に重ねられ、渡来順は「合わせ鏡」で逆転されていた。(瓠公と脱解王は倭宿祢命~建田勢命の世代の誰かである。息津鏡・辺津鏡は天之日矛が持って来たとされるが、実際に持って来たのは天之日矛=徐福ではなく、6世孫・建田勢命の時代の誰か

である。)

脱解王は新羅の第4代の王(在位はAD57年～80年)とされているので、この延鳥郎と細鳥女の逸話はその4代後であり、年代的には9世孫・卑弥呼の邪馬台国からの使者が洛陽に到り、明帝から親魏倭王の称号を与えられたのがAD239年からすると、その前の時代だから、7世孫(建諸隅命)か8世孫(倭得魂命)、あるいは、正確な年代推定は難しいので6世孫(建田勢命)～8世孫あたりと言えるだろう。

そうすると、この逸話は脱解王の血統の海部氏一族の誰かが息津鏡・辺津鏡を持って帰国し、後にこれらの鏡を新たな太陽神信仰の御神体とした卑弥呼の邪馬台国建国を象徴している話と考えるのが、最も辻褃が合う。日本書紀に記載されている“赤織の絹”の“赤”は、<日本の真相5>に記したように、古代に見られた瑞兆の象徴であり、火の鳥＝フェニックス＝不老不死に由来するもので、海部氏の象徴だった。また、海部氏一族の大海人皇子は壬申の乱の際、赤い色を旗印とし、天武15年には“朱鳥”という元号が立てられたことからすると、“赤織の絹”の“赤”は“新羅人”と合わせて海部氏を暗示しており、矛盾しない。

そして、新羅で天を祀った場所を迎日県、または都祁野と名付けたことは、実は新羅建国に関わった海部氏を暗示し、ヤマトでは邪馬台国、朝鮮半島では新羅を建国したから、話が新羅になっていても良いわけである。言い換えれば、卑弥呼の邪馬台国は都祁野と呼ばれる地域に存在した、ということを仄めかしているのである！

つまり、三国遺事は阿達羅王の時代や邪馬台国の時代から見れば千年以上も後に書かれているから、正式な歴史書としては、記紀と同様な扱いで見なければならぬのであって、史実に基づいたフィクションとして書かれていると見なすべきである。(以下、Wikipedia 参照。) 事実、朝鮮半島に於ける、現存する最古の史書である三国史記(AD1145年完成)に次ぐ古文献ではあるが、由来の怪しい古書を引用するなど、史書としての問題点は少なくない。三国史記は儒学者、金富軾の編纂で、中国史書の書式(紀伝体)に従うために、三国時代の故事・伝承が数多く削り落とされると同時に、当時利用が可能だった支那の書籍を資料として利用しているため、例えば卑弥呼の記載があるなど不自然な点もある。特に、新羅の立場から編集している点は注目である。金富軾の編集態度に不満を抱いた一然は、三国史記が取りこぼした故事を拾い集め、また自身の禅僧としての立場から仏教の普及に関わる事実とを併せて収録しようとした。全5巻9篇から成り、巻一の「紀異」は檀君朝鮮に始まる諸国の興亡と新羅各王の逸聞を記し、巻三以降では新羅を中心とした仏教受容について記している。このように、一然は高麗の高僧だったが、その内容は新羅的立場なので、一然も海部氏に関わっている可能性がある。

また、新羅となる以前は辰韓＝秦韓だったが、秦の始皇帝の労役から逃亡してきた秦人の国とも言われている。ならば、一旦秦に帰国した後、朝鮮半島を経由して九州に再上陸し、秦氏が渡来してきた後に容易に改宗して秦氏となった徐福一団を“秦の始皇帝の労役から逃亡してきた秦人”と称し、瓠公と脱解

王だけではなく、彼らも建国に関わっていた、と考えれば辻褄が合う。すなわち、徐福一団が関わっていた朝鮮半島の地に、海部氏が一族の者を送り込んで王国を建国した、ということである。年代的な再考は必要だが、場合によっては、最初に丹後に上陸した徐福は一旦秦に帰国したが、それを“瓠公”と称している可能性も否定できない。

さて、その都介野岳は深めの笠のように整った円錐形の山であり、山頂中央には、円形の列石が置かれている。円形列石＝ストーンサークルは古代祭祀の典型例であり、＜神々の真相 1＞に記したように、世界各地に存在するストーンヘンジはニンギシュジツダが考案し、ニヌルタとイシュクルが建造を手伝ったから、日本にもその足跡が残っているということである。この山の北の麓にある南之庄という集落には柏峰という小山があり、山頂には水平に均した方形の台地が確認できる。また、この丘の北の麓には国津神社があり、伝承に依ると、柏峰を御神体として祭祀する社であると伝えられている。

周髀算経には“笠を以て天の形を写す”とあり、“天は青く、地は黄色く赤い。そこで丸い笠型の表面を青黒に、裏面を丹黄にすれば、これによって天と地の位置を象徴する”とある。よって、笠型の都介野岳は天の祭壇、方形の柏峰の台地は地の祭壇となる。そして、“天は円に通じ、地は方に通じる”とされ、古代支那では“冬至には円丘に至りて天を拝み、夏至には方丘に於いて地を拝み、これを“二至（にし）の祀”と呼んだが、都介野岳と柏峰はまさにこの関係になっている。では、“柏”の方の意味は何なのか。

（以下、http://sogyusha.org/saijiki/02_summer/kashiwamochi.html 参照。）

柏は日本の山野に自生するブナ科コナラ属の樹木で、ブナ科の中では最も大きな葉をつける。柏と言えば柏餅が思い浮かぶが、柏の葉は新芽が出ないと古い葉が落ちないという特徴があるので、これを“子供が産まれるまで親は死なない＝家系が途絶えない”という縁起に結び付け、子孫繁栄の象徴とされている。そうすると、都介野岳＝天神と柏峯のセットで、“天神の未来永劫の繁栄”となり、“天神の子孫の未来永劫の繁栄＝永遠、不老不死”をも象徴する。

支那では状況が異なり、“柏”と言えばヒノキ類の常緑樹を指す言葉で、日本に生えている樹木ではイブキ、ビャクシンに相当し、やはり神聖な木である。日本のカシワに対して当てる漢字を間違えてしまった、という説が有力で、ビャクシンこそ本当の柏であるということで“真柏（しんぱく）”とも言われる。

いずれにしろ、柏は神木とされ、樹木を守る葉守神がこの木に宿るとされていた。“柏木”という姓も、元々は“神聖なる柏の木”という意味から、皇居を守る兵衛、衛門の別称だった。つまり、皇居＝天皇＝天＝天神＝都介野岳を守るのが柏峰、ということである。（柏木の姓は本来、都介野岳を拝する柏峰、に由来するのだろう。）

なお、“天は青く、地は黄色く赤い”ことから、“奈良”に掛かる有名な枕詞“青丹よし”の真意を解釈できる。“黄色く赤い”色は丹（に）色と言って、神社の鳥居などに塗られている色である。あの色は赤でも朱でもなく、丹色と言い、その根源は不老不死の妙薬とされた丹生（にゅう＝硫化水銀）である。ならば、“青”は“天”、“丹”は“地”を象徴するから、“青丹よし 奈良”は“天

と地が良く調和する素晴らしい奈良”という意味であって、無意味な枕詞ではない。そして、俗説で言われる“奈良”が朝鮮語で“国”を意味する“ナラ”ならば、“天と地が良く調和する素晴らしい国”という意味にもなる。

更に、都介野岳の西側にある小山戸は、かつては“おうやまと”と呼ばれていた。“小”を“おう”と読むのは、都祁に隣接し、“神の郷”で真相を暗示している上の郷地区の小夫（おうぶ）がある。聞書覚書には“小夫は多部（多氏の居住区）にして神八井耳命の末裔”とある。日本地理志料には、小夫には斎宮山があり、天照大神を祀る天神社があって、これを笠縫邑の伝承地と称して元伊勢と伝えている。ならば、都介野岳という神山を祀るための場所が小夫である。卑弥呼の邪馬台国が都介野岳を神山として祀っていたならば、卑弥呼を支えた男王（男弟）は意富那比命（オオナビノミコト、オウナビノミコト）であり、この命に因んで“意富＝小＝多の部”としたと考えることは、辻褄が合っている。また、“おう”“おお”は美称とされ、ヤマトにこの美称を付けて“おうやまと、おおやまと”としたとも考えられるが、邪馬台国と書いて“ヤマトの国”と読んでいたので、やはり小山戸は邪馬台国の地に相応しい。小山戸は都祁国の中心地として都祁国造が居住した場所とされるが、真相はこのようなことなのであろう。

他にも、小夫の南に接した滝倉には神山の瀧蔵山があり、イザナギとイザナミを祀る瀧蔵権現社がある。ここは泊瀬山の信仰と関わりの深い土地で、元長谷寺の場所だという伝承や、その地主の神であったとされるなど、上の郷には古代祭祀にまつわる古社や伝承が多い。

また、都介野岳は円丘状の山で天を祀ることから、原型は支那で天を祀る処とされた委粟山（うえりいさん）である。その都介野岳の中腹には、堂ヶ平という祭祀遺跡の反対側の尾根に、約 40 メートルに亘って岩石を積み上げた遺跡があるが、高さ約 8 メートルの主丘の裾に陪冢（ばいちょう）を控えた墳墓である。その上部は穴が開けられて盗掘されているが、弥生後期の巨大な墳墓であることはほぼ間違いない。しかも、聖なる山の中腹という位置からすると、この時代の特別な貴人の墓と伺える。これこそが、卑弥呼の墓なのだろう。

③鳥

このように、新羅の延鳥郎と細鳥女の逸話が卑弥呼の邪馬台国の位置を謎解く鍵になっていたのだが、ここで着目しなければならないのは共に“鳥＝カラス”だということである。

鳥と言えば八咫鳥である。＜日本神話＞に記したように、鳥はアレキサンダー大王を導いた。支那では、太陽には鳥が住み、10 個の太陽がそれぞれ天を駆け巡って 1 つの旬を形成すると考えた。ある時、太陽が一度に天に現れて地上は灼熱と化し、天帝に命じられた弓の名手が 9 個の太陽を射落とすと、9 羽の“金の鳥”が落ちてきて、足が 3 本だったことが八咫鳥の元である。秦氏の中核の鳥ならば、これだけの解釈で良いだろう。しかし、延鳥郎と細鳥女の逸話は秦氏ではなく、新羅と邪馬台国建国の中枢にいた海部氏の象徴である。ならば、

秦氏の中核である原始キリスト教徒が、元々あった鳥伝承に重ねて、自分たちを八咫鳥と称した、ということである。

シュメールのメソポタミアでは、聖書に於いて、大洪水後のノアの方舟から地上の偵察として初めて外に放たれた動物で、水が引いたことを知らせた。エジプトでは太陽の鳥とされ、ギリシャでは太陽神アポロンに仕える鳥だった。大洪水後に水が引いている状態は空が晴れ上がっている状態だから、大地に太陽光が降り注いでるわけで、これも太陽関係である。つまり、鳥は太陽とは切っても切り離せない関係なのであり、八咫鳥のオリジナル、というわけではない。それ故、延鳥郎も新羅の太陽とされている。

よって、シュメールを基として太陽神信仰を始めた邪馬台国でも、鳥を太陽神の使いや化身という象徴としたことは、まったく自然な成り行きである。ある意味、海部氏一族（祭祀に協力した徐福の系統＝葛城氏を含む）は“元八咫鳥”とでも言うべき存在である。

④大邪馬台国の位置と斎槻岳

このように、都祁野一帯こそが卑弥呼の邪馬台国のあった位置で、それはトヨの墓である箸墓の中心線が斎槻岳と八王山を経て都祁野を向き、その斎槻岳と八王山はいずれも草薙神剣を暗示し、都介野岳で天照国照尊を祀るために草薙神剣を奉じたことを暗示したものである。

そして、箸墓の真東には最初の元伊勢とされる桧原神社があり、ここは天照大神影向の山である泊瀬山を遥拝する場所である。言い換えれば、卑弥呼の邪馬台国の祭祀を都介野岳－八王山－斎槻岳のラインでヤマト平野の位置に遷し、泊瀬山から真西に伸ばしたラインとの交点に箸墓を造ったとも言える。

奈良盆地はかつて湿地帯（古くは湖）であり、邪馬台国の時代は三輪山山麓の纏向遺跡付近ではなく、都祁野付近の方が最初の王国建設には向いている。しかし、卑弥呼の邪馬台国は全国的な統一国家ではなく、卑弥呼亡き後、国は乱れた。そこから新たな統一国家に向け、国造りの基礎として奈良盆地を埋め立てたり干拓し、稲作を基盤とする国家体制を築いたのだろう。それに伴い、かつての祭祀場から新たな祭祀場として、隠国の泊瀬山を遥拝できる纏向の地が選ばれたと考えられる。

すなわち、纏向の箸墓こそが新たな邪馬台国、トヨの大邪馬台国に於ける中心地と言える。その地からは泊瀬山と同時に、古墳の中心線で示すことにより、卑弥呼の邪馬台国の祭祀場も遥拝することができるのである。そうすると、泊瀬山を遥拝するのが桧原神社ならば、都介野岳を遥拝するのはどの神社なのだろうか。その手掛かりが斎槻岳である。

②に記したように、斎槻岳は雨をもたらす龍神で、草薙神剣を暗示していた。斎槻岳は弓月ヶ岳とも記され、万葉集などに登場する有名な山だが、長らく所在は不明だった。それは、実は穴師山のことである。

兵主神社跡には約 40 メートル四方の水平な台地が造成され、そこから穴師山

山頂に向かって広い葺き石があり、神祭りの痕跡と見られる小型の磐座や朽ちた祠などがある。そして、かつては“夏至の大平”と呼ばれていた。つまり、穴師山山頂部が斎（いつ）きの嶽＝斎槻岳である。

穴師山＝斎槻岳には穴師坐兵主神社（あなしにいますひょうずじんじゃ、兵主神社、穴師上社）があったが、応仁の乱で焼失した。（故に、元兵主神社とも言う。）この神社は名神（めいじん）大社という最高の社格である。現在は、かつての穴師下社だった大兵主神社に、摂社だった巻向坐若御魂神社と共に合祀されている。大兵主神社の御由緒書きには、以下のようにある。

“若御魂神（ワカミタマノカミ） 巻向坐若御魂神社（右）

穴師兵主神（アナシヒョウズノカミ） 穴師坐兵主神社（中）

大兵主神（オオヒョウズノカミ） 穴師大兵主神社（左）

当社は三神殿にして、古典の伝えるところでは、今から 2 千年前の御創建にかかり、延喜の制で名神大社に列せられ、祈年・月次・相嘗・新嘗の諸々の祭の官幣に預かり元禄 5 年には正一位の宣旨を賜った最高の社格をもつ大和一の古社と言われている。

中央の神は、第 10 代・崇神天皇の 60 年、命を受けて皇女倭姫命が創建され、天皇の御膳の守護神として祀られ、天祖降臨の際の三体の鏡の一体を御神体として、御食（ミケ）津神と申し上げ、生産と平和の神、又、智慧の神として崇敬を受けられた。

右の神は、三種の神器を御守護された稲田姫命を御祀りし、御神体は勾玉と鈴で、芸能の神として崇敬を受けられている。

左の神は、纏向山上の弓月嶽に祀られたが、後に下られて御祀り申し上げている。御神体は剣（ほこ）で、武勇の神、従って相撲の祖神となり、スポーツ界の信仰を御受けになっています。その神殿はいずれも三つ屋根造りで、全国にその類を見ない。”

大倭神社注進状裏状に依ると、“上社は御食津神也。神体日矛”とあり、日矛とは鏡のことである。また、大倭本記に依ると、斎（いつき）鏡が三面と鈴があり、一面は天照大神の神霊、一面が国懸（クニカカス）大神（紀伊国一ノ宮）として紀伊国に、もう一面と鈴が御食津神で、天皇の朝夕の御食と日夜の護りに斎き祀る神として元兵主神社に祀られた、とある。

いずれも、上社＝穴師坐兵主神社＝元兵主神社は鏡を御神体とする御食津神だから、これは籠神社の豊受大神そのものである。

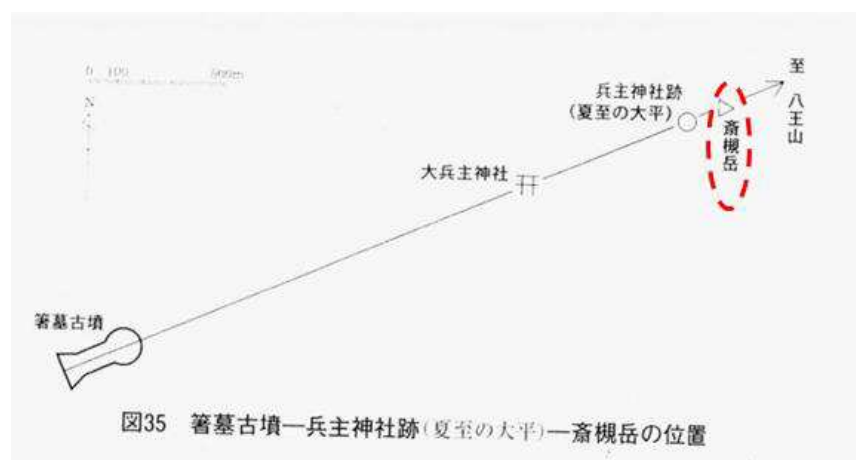
右の神は若御魂神で稲田姫命としているが、“稲”はやはり“御食”の根源で、籠神社である。そして、御神体が鈴で、芸能の女神ならば天細女命そのもので、原型はイナンナであり、海部宮司がイナンナを重要視されていることと矛盾しない。また、若御魂神の“若”だが、＜日本の真相 5＞に記したように、天香語山＝須弥山＝シュメールにあった元初最高の神々の宮殿は天の少宮（わかみや、小宮）とも日の少宮とも言われ、“少＝小＝わか”という言葉はこれに由来した。ならば、若御魂神とは結局、元初の神々＝シュメールの「神々」のことに他ならない。中でも、イナンナのことなのだろう。

左の神の御神体は剣なのに“ほこ”と読ませているのは、それが本来の金属製の剣ではなく、木でできたアロンの杖だからである。また、中央の神の御神体が鏡であり、鏡を持って来たとされる天之日矛を連想させるため、ということもあろう。それは、太陽神を祀るために鏡と剣が必要とされたからであり、更に王権のある土地の象徴である勾玉も揃って三種の神器を構成しているから、古代、元兵主神社で現在に繋がる神祭りが行われたことは間違いない。それは取りも直さず、トヨを女王とする大邪馬台国の祭祀場に他ならない。

また、兵主の神は支那の史記に登場する。山東地方で祀られていた天主、地主、兵主などの八神を始皇帝が祀ったのが初めて、漢の高祖が兵を挙げた時、兵主神の蚩尤（シユウ）を祀って勝利を祈った。支那では、蚩尤は魔を払う半人半獣の守護神で、両鬚は逆立って剣の切っ先のように鋭く、頭の真ん中には角が生えており、砂と石、一説には鉄鉱石を食べていたという。ならば、蚩尤は製鉄を暗示している。鉄を制したものが武力を制したので、まさに兵の神、兵主神となる。そして、邪馬台国時代の朝鮮半島に於ける製鉄の中心は辰韓＝新羅と弁韓＝伽耶であり、海部氏が新羅を建国したから、日本海を挟んで新羅からヤマトへ鉄が流入し、ヤマトに於ける中心が兵主だった、と言える。

このように、元兵主神社は元内宮と元外宮の唯一元伊勢である籠神社そのものであり、大邪馬台国に於ける祭祀場だったと言える。また、御紋は“橘”であり、不老不死の妙薬とされた橘を持ち帰った田道間守＝徐福をも暗示している。ならば、前述の左の神の御神体は剣なのに“ほこ”と読ませているのは、天之日矛を暗示しているとも考えられる。そして、田道間守＝徐福＝天之日矛だから、トヨの大邪馬台国では、海部氏だけではなく徐福系＝葛城氏も祭祀に加わることにより国が統一され、それを暗示するような言葉が残されているとも考えられる。

現在、穴師下社とされるのが大兵主神社だが、そこと箸墓古墳の中心線を延長すると、兵主神社跡（元兵主神社、穴師上社）と斎槻岳に達する。



このラインと東西ライン（箸墓－桧原神社－泊瀬山ライン）の角度は約 22 度だが、このライン上から太陽が昇るのは夏至の約 1 ヶ月前後で稲の播種の時期であり、故に、前述の“夏至の太平”と言われる所以でもある。ここからも、奈良盆地を埋め立てたり干拓し、稲作を基盤とする国家体制を築いたことが伺える。現に、古墳は墳墓と思われているのだが、実は古墳の周囲に張り巡らされている周濠は広範囲の灌漑用水として利用されていたことが解っており、古墳造成期と平地での稲作普及の時期が一致している。

また、下社から上社に昇る古道は天皇坂と呼ばれていた。（ここでは“天皇”を当てているが、海部氏由来なので、“天の王、天王”の可能性が高い。）そうすると、古代の大王は祭祀王だから、大王が歩いて行く坂道が天王坂であり、元兵主神社のあった水平な方形（＝天に対する地）の台地から、斎槻岳を通じて天神の都介野岳を遥拝していたという祭祀形態が浮かび上がる。

すなわち、都介野岳を遥拝するのは元兵主神社であり、言わば、元桧原神社でもある。邪馬台国と大邪馬台国は別の国ではなく、邪馬台国の発展系が大邪馬台国だから、大邪馬台国での祭祀は邪馬台国での祭祀も直接受け継いでいるのである。更に、②に記したように、笠縫邑の伝承地と称して元伊勢と伝えられ、斎宮山があり、天照大神を祀る天神社がある都祁野の小夫が、これらの大元と言える。

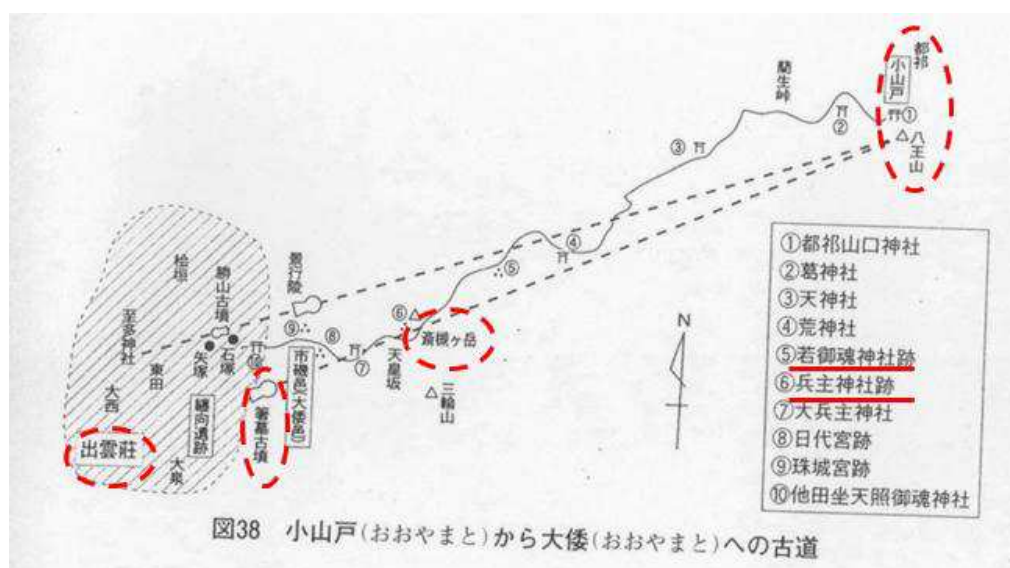


図38 小山戸(おおやまと)から大倭(おおやまと)への古道

ここで、“弓月”と“日矛”が登場したことに着目する。これらは徐福系に関わる言葉だから、徐福系が祭祀に関わっていたことを暗示し、前述のように、元桧原神社とも言える兵主神社にも、そのような暗示がある。そうすると、卑弥呼の邪馬台国は、おそらく海部氏のみが祭祀に関わっていたのだろう。しかし、卑弥呼亡き後に国が乱れたことは、海部氏以外の勢力、すなわち、徐福系

の物部氏＝葛城氏がそれに満足できなかったためと思われる。故に、陰陽道と道教の基となる祭祀を司っていた徐福系＝葛城氏も祭祀に加わるにより国が統一され、それを暗示するような言葉が残されていると考えれば辻褄が合う。斎槻岳＝弓月ヶ岳に日矛＝鏡が御神体となっていたことは、“月”と“日”で陰陽を成す。そして、斎槻岳は草薙神劍の象徴でもあり、鏡は太陽神の分け御霊（分身）だから、劍を奉じて太陽神を祀るという構造で、矛盾しない。

また、図 38 を見れば解るように、纏向遺跡を中心とした一帯は“出雲荘”という地名である。つまり、出雲という地名の根源であり、“元出雲”である。＜日本の真相 5＞に記したように、出雲は徐福系の葛城氏（末裔は蘇我氏）だから、この点でも、大邪馬台国では徐福系＝葛城氏が祭祀に加わっていたことに矛盾しない。そして、出雲に関わる話として、日本書紀に登場する丹波の氷香戸辺（ヒカトベ）という巫女が皇太子・活目命（垂仁天皇）に次のように言ったことも、出雲人＝葛城氏が祭祀に加わっていたことの象徴であり、矛盾しない。

“「私に子供が言います、出雲人の祈り祭る本物の見事な鏡、力強く活力を振るう立派な御神の鏡をもって祭れ、出雲人よ」と。これは、私の子に神が乗り移って言うのであろう。このことによって、出雲人は神祭りを許した。”

ここで、穴師上社＝元兵主神社に関わると思われる記述が、大倭神社注進状にある。崇神天皇 6 年、笠縫邑に天照大神を祀った際、共に大倭大国魂大神（オオヤマトオオクニタマノオオカミ）を祀り、市磯（いちし）邑を大倭国魂の神名に因み、大倭邑に改める、とある。

大倭社は和（おおやまと）神社のことだが、天理市南部にあるものの、後に遷ったとされる地であり、元の地は明確ではない。また、市磯邑については他に記録が無いが、垂仁紀 25 年条には、“大倭大神の神地を穴磯（あなし）邑に定め、大市長岡岬（おおいちながおか）に祀る”とあるので、箸墓のある大市と穴磯＝穴師の地名を合わせたものであろう。穴師は斎槻岳のある穴師山の西の麓、三輪山と穴師川の間を流れる穴師川の右岸地域で、その西に続く位置に箸墓がある。

そうすると、穴師で大倭大国魂神が祀られていたことになるが、穴師の元兵主神社は元桧原神社と言える社で天神系であり、大国魂大神＝国津神（地祇）系ではない。だから、これらの文書については再考を要する。

＜日本の真相 5＞に記したように、崇神天皇はトヨの時代の大王オトヨノミコトのことであり、垂仁天皇は崇神天皇の次の代だから、ほぼ同時代の出来事を象徴的に表現していると考えられる。この時代に天照大神を笠縫邑に祀った話は日本書紀に登場するが、それは秦氏の創作である。その部分を振り返る。

- 1) 崇神天皇 3 年（BC95 年）9 月、三輪山西麓の瑞籬宮に遷都。
- 2) 崇神天皇 5 年、疫病が流行り、多くの人民が死に絶えた。
- 3) 崇神天皇 6 年、疫病を鎮めるべく、従来宮中に祀られていた天照大神と倭大国魂神（大倭大国魂大神）を宮中の外に移した。天照大神を豊鍬入姫命に託し、笠縫邑（現在の桧原神社）に祀らせ、その後各地を移動したが、垂仁天

皇 25 年 (BC5 年) に現在の内宮に御鎮座した。倭大国魂神を淳名城入媛命 (ヌナキイリヒメノミコト) に託し、長岡岬に祀らせたが (現在の和歌山神社)、媛は身体が痩せ細って祀ることができなかった。

- 4) 崇神天皇 7 年 2 月、大物主神が倭迹迹日百襲姫命に乗り移り託宣する。11 月、大田田根子 (大田原) を大物主神 = 倭大国魂神を祀る祭主とし、市磯長尾市 (イチシノナガオチ) を倭大国魂神を祀る祭主としたところ、疫病は終息して五穀豊穡となった。

次に示す天理市の大和神社紹介ページに依ると、大倭神社注進状は大倭直歳繁が平安時代の仁安年 (1166~1169) 中に提出したとされているが、それは、日本書紀の記述に合うように作成されたと考えられる。

<http://www.city.tenri.nara.jp/kanko/bunkazai/bunkazai06.html>

また、祭神は大倭 (大和) 大国魂大神以外に八千戈大神 (ヤチホコノオオカミ) と御年大神 (ミトシノオオカミ) であり、日本書紀の所伝に依れば、御祭神の大倭大国魂大神と八千戈大神は大己貴神 = スサノオの異名同神、御年大神は穀物の守護神とされている。スサノオは陥れられた海部氏の神、天照国照尊だから “大神” となっているのであり、御年大神はスサノオの子孫とされる大歳神と読みが非常に良く似ているので、おそらくは大歳神のことである。ならば、いずれもスサノオ = 天照国照尊と見なすべきである。

その大倭大国魂大神は大和一国の地主神とされ、第 5 代・孝昭天皇即位の年、初めて宮中に天照大神と同殿共床で奉斎されたが、崇神天皇 6 年に天皇が神威を畏れ、天照大神と分けられて市磯邑に遷されたのが大和神社の創祀であると伝えられている。そして、大和神社の奉斎は、神武天皇の功臣とされる椎根津彦の子孫、市磯長尾市を祭主として以来、その子孫の大倭氏が長く奉仕し、同族の市磯氏が代々奉仕して明治に至っている。椎根津彦は天村雲命の子、倭宿祢命だから、やはり元は海部氏ということである。

<日本の真相 5> で判明したことは、天照国照尊が大元の根源神だが、陽としての側面は太陽神である天照大神、陰としての側面は水神である豊受大神であった。ならば、邪馬台国建国から秦氏に権力委譲した (させられた) 大和朝廷成立までは天照国照尊を祀っていたが、秦氏に権力委譲した後に天神系から地祇系に落とされ、本来一柱だった根源神を分離せざるを得なくなったのだろう。それが、“大倭大国魂大神は天照大神と同殿共床で奉斎されていたが、神威が強すぎて分祀された” という記述によって暗示されているわけである。そして、地祇とされてしまった大物主神 = 倭大国魂神を祀る祭主として、特定 (海部氏) の血統である市磯長尾市を選んだところ、疫病は終息して五穀豊穡となったことは、本来の神祭りは海部氏系でなければならない、という象徴である。

ならば、大倭神社注進状に登場する地祇の大倭大国魂大神とは、象徴的に地祇は陰だから豊受大神のことで、元は天照国照尊に他ならない。すなわち、穴

師で祀られていた大倭大国魂神とは実は天照国照尊のことであり、天神系で、やはり穴師の元兵主神社は元桧原神社なのである。それが、秦氏創作の日本書紀の記述に合わせ、大倭大国魂神という地祇に変えられているのである。

言い換えれば、祭神を大倭大国魂神という地祇に変えられ、箸墓のある大市と穴磯＝穴師の地名を合わせた地名“市磯”に祀らせ、それを大和（おおやまと）神社の創祀としたことは、大邪馬台国＝“おおやまとのくに”の中心地が箸墓のある纏向で、その祭祀場が穴師の（元）兵主神社であったということを暗示しているのである。そして、その祀られていた神とは、地祇に変えられた天照国照尊であって、元兵主神社が元桧原（日原）神社だったことによって暗示されているのである。

そうすると、＜日本の真相 5＞ではトヨの大邪馬台国を三輪山での祭祀としていたのだが、見直さなければならない。すなわち、卑弥呼の邪馬台国は都介野岳を神山とする小夫、トヨの大邪馬台国は泊瀬山を神山とする纏向の地であって、三輪山の西麓ではない。これは、“三諸山”とされている山を通説のように“三輪山”と解釈していたことに依る誤解である。その部分を振り返る。

・三輪山の宮は御室嶺上宮（みむろのみねうわつみや）と言い、日本書紀の一書に依ると、三諸原の宮＝御室山（三輪山）の宮が最初の宮処となっていた。

“三諸山”は元々“御室山”で、最初の宮処とされているが、それを三輪山としてしまったのである。ならば、三輪山は秦氏の創り上げた最初の王朝、大和朝廷の宮処とも見なせるが、ここではおそらく、最初に国家として統一された大邪馬台国の宮処を“最初の宮処”として暗示していると思われる。では、本来の“三諸山”とは、どの3つの山なのか。

大邪馬台国の本拠地と判明した纏向の地は三輪山、巻向山、穴師山などの流れが巻向川に合流し、その扇状地上に形成されている。よって、三輪山、巻向山、穴師山としたいところだが、前述のように三輪山は異なるので除外する。そこで、前述の大兵主神社の御由緒書きを振り返る。

“若御魂神（ワカミタマノカミ） 巻向坐若御魂神社（右）

穴師兵主神（アナシヒョウズノカミ） 穴師坐兵主神社（中）

大兵主神（オオヒョウズノカミ） 穴師大兵主神社（左）

中央の神は、第10代・崇神天皇の60年、命を受けて皇女倭姫命が創建され、天皇の御膳の守護神として祀られ、天祖降臨の際の三体の鏡の一体を御神体として、御食津神と申し上げ、生産と平和の神、又、智慧の神として崇敬を受けられた。

右の神は、三種の神器を御守護された稲田姫命を御祀りし、御神体は勾玉と鈴で、芸能の神として崇敬を受けられている。

左の神は、纏向山上の弓月嶽に祀られたが、後に下られて御祀り申し上げている。御神体は剣で、武勇の神、従って相撲の祖神となり、スポーツ界の信仰を御受けになっています。”

中央の神は“穴師坐”だから穴師にあるわけで、穴師山である。左の神はかつて“纏向山上の弓月嶽”に祀られていたのだが、纏向は平地の名称で、これとは別に巻向山があることから、この平地の纏向は巻向山由来と考えられる。また、前述のように弓月嶽は斎槻岳のことで、実は穴師山のことであった。その山を纏向山と言っており、右の神は“巻向坐”だからこれも巻向山であって、巻向山周辺を巻向山系とでも言うべきなのだろう。そうすると、穴師山と巻向山ということは確実だろう。

もう1つとなると、最も近くは三輪山だが、ここは外れる。29ページの図38より、箸墓から斎槻岳を望み、その向こうに若御魂神社跡があるが、ここも巻向山系の一部であり、しかも纏向の平地から見ると、斎槻岳の向こう側になって見えない。しかし、斎槻岳は雄岳と雌岳から成るので、これを二山と見なせば雄岳、雌岳、巻向山という3つの山になり、三諸山とも言える。

ここで、兵主神社は“元桧原”神社と言うべき神社だが、現在の桧原神社の祭神は天照大神若御魂神、イザナギ、イザナミである。この天照大神若御魂神は天照大神とされているのだが、この御神名は大兵主神社の右の神、巻向坐若御魂神社の祭神“若御魂神”を暗示していることは明白である。そして、桧原神社は箸墓から真東に位置するのだが、その背後に見える巻向山は、実は箸墓－桧原神社－泊瀬山のラインからやや北にずれている。しかし、海部宮司が言われるように、太古の神祭りは東西方向が基本であり、箸墓から卑弥呼の邪馬台国を見るラインは東西ラインではなく、やはりそのラインは箸墓－桧原神社－泊瀬山であることは間違いない。そこで、このラインと巻向山周辺を見直す。

④-2：三諸山

通常の地図では解りにくいですが、以下に示す奈良県のハイキングコース案内ページに依れば、箸墓－桧原神社のラインを真東に伸ばすと、標高450メートルの白山とダンノダイラがある。

http://www.pref.nara.jp/secure/46081/50sen_15.pdf





現在は烈しく風化して奇怪な岩肌が露出し、そこだけ白く浮き出た風景となっているので“白山”と呼ばれているらしいが、白山と言えば白山比咩神社で、菊理姫が祀られており、＜日本の真相 2＞に記したように、“菊”は草冠で「生命の樹」に於ける絶対三神と「合わせ鏡」の奥義、そして下のつくりでヤハウエ＝イエスを象徴し、“再生、復活”を象徴し、“菊の理”ということで“イエスの理＝復活”を象徴していた。そして、イエスが“復活”を約束し、光り輝いて変容した山の象徴が白山であった。しかし、イエスの奥義は秦氏が持って来たものなので、ここでは、かつては白い大理石の化粧版で光り輝いていたピラミッドが原型であると見なすのが妥当だろう。

そして、この白山のすぐ近くにはダンノダイラがある。ここは巻向山の南側、三輪山の東方約 1700 メートルのところにある磐座で、古代出雲族の集落があったとされ、現に“出雲”という地名が残っている。その南側、初瀬街道沿いの出雲集落にある十二柱神社は神世七代からウガヤフキアエズに至る十二柱の神々を祀る神社だが、本殿が無く、出雲村の人たちはダンノダイラの磐座を拝んでいたようで、明治時代の初めまでは年に一度、全村民がダンノダイラに登って出雲族の祖先を祀り偲んだ、とされている。

(<http://blogs.yahoo.co.jp/sweetbasil2007/36473726.html> 参照。)

また 29 ページの図 38 から、纏向にも“出雲”を関する出雲荘があり、大邪馬台国の中心地で、“出雲”は祭祀に加わっていた徐福系＝葛城氏のことだから、神祭りの場所を“出雲”という名称によって表していると考えられる。すなわち、纏向の出雲荘は元兵主神社を経て卑弥呼の邪馬台国＝都介野岳を拝する祭祀場、ダンノダイラは大邪馬台国の泊瀬山を拝する祭祀場で、都介野岳、泊瀬山はいずれも見えない隠国の天照影向の地であり、その構造は一致している。

<http://kamnavi.jp/as/yamanobe/juunisha.htm> に依ると、この出雲集落からダンノダイラへ至る道の途中の開けた所から西方を眺めると、正面に葛城山が見えるという。それはすなわち、出雲族が葛城氏であることを暗示していることに他ならない。

また、十二柱神社は武烈天皇の泊瀬烈城宮（はつせのなみきのみや）伝承地としても知られ、泊瀬列城に壇場（たかきみくら）を設けたとされているが、これは、泊瀬山を影向したダンノダイラを暗示していると考えられる。

このホームページの著者に依ると、ダンノダイラに住んでいた先住部族の祭神との関わりを榮長増文氏が著書の「大和出雲の新発見」の中で述べているという。氏は三諸山をダンノダイラ、巻向山、泊瀬山（天神山の泊瀬山と混同しており、巻向山の北側の初瀬山のこと）と見なしている。ダンノダイラは嶺上の比較的平坦な土地で、その東奥に巨大な磐座があり、手前に天壇跡らしい土の盛り上がった場所がある。直径 20 メートルぐらいの土盛りが 5 段の円丘状になっていることから、日本式天壇ではないか、と皇學館大學の村野豪氏が唱えられている。（葛城御歳神社宮司による以下のページ参照。）

<http://blog.goo.ne.jp/mitoshi7/e/6b521b9d4eafb037681b6d9cc979f07c>

天壇とは道教に於ける祭壇のことで、冬至の日に皇帝が天帝を祀るために設けられた祭壇である。②に記したように、古来、支那では天帝が“冬至には円丘に至りて天を拝み、夏至には方丘に於いて地を拝む”とされ、二至の祀と呼んだ。夏至からは陰に転じるから陰である地を拝み、冬至からは陽に転じるから陽である天帝を祀るのである。また、三国志には“洛陽の南、委粟山を営み円丘となす”という記事があり、②に記したように都介野岳がそれに倣っており、円丘が都介野岳、方丘が柏峰という関係である。

ならば、この場所も都介野岳－柏峰に倣っていると考えるのが妥当である。すなわち、都介野岳に相当するのが泊瀬山だから、柏峰に相当するのがダンノダイラであり、柏峰＝方丘だから、天壇のように見えても、実はダンノダイラの巨大な磐座を泊瀬山に見立て、泊瀬山＝天神山を影向していたのであろう。そして、ダンノダイラは山の頂上ではなく、三輪山から巻向山へ至る尾根（嶺）上にあるから、山とは見なせないで、三諸山の 1 つとは言えない。

海部宮司の言われるように、太古は東西が祭祀の方向だったから、箸墓から真東を見なければならぬ。そこにはピラミッドが原型と思われる白山があり、ピラミッドは太陽神を影向する“神の山”であって、すぐ傍には、泊瀬山＝天神山を影向していたと考えられるダンノダイラがある。箸墓から夏至の方向には卑弥呼の邪馬台国があったことを暗示する元兵主神社があり、斎槻岳＝穴師山がある。白山の向こうには見えない聖なる山、泊瀬山（天神山）があり、斎槻岳の向こうには見えない聖なる山、都介野岳があつて、共に見えない隠国の山、天照影向の山で、構造が一致している。その白山と穴師山の間には、白山に隣接して巻向山があり、穴師山も巻向山系だから、いずれも巻向の山である。

よって、“三諸山＝御室山”は三輪山ではなく、また、ダンノダイラ＝巻向山－初瀬山でもなく、穴師山＝斎槻岳、白山、巻向山のことであり、いずれもト

ヨの大邪馬台国の時代からの祭祀である。穴師の元兵主神社での祭祀は卑弥呼を祀るものだから、おそらく海部氏直系のみが担当し、ダンノダイラでの新たな祭祀は葛城氏が加わったから、葛城氏が中心となって祭祀を行っていたと考えられる。故に、ダンノダイラへ至る道の途中からは葛城山を拝することができ、“出雲”と称する村人たちが明治まで祭祀を続けていたのである。そして、祭神も元兵主神社では記紀では聞き慣れない神名だが、ダンノダイラを拝する十二柱神社では記紀の神々であり、それは、秦氏に素直に従ったのが出雲族＝葛城氏であることを暗示しているからに他ならない。

ただし、これは本来の三諸山であり、後に秦氏が創作した記紀に合うように、三諸山も変えられたと考えられる。大和朝廷は三輪山を御神体としたから、変えられた三諸山には三輪山が含まれる。そうすると、白山（とダンノダイラ）は三輪山と巻向山の間にあるから三輪山～巻向山系に含まれると見なし、新たな三諸山は三輪山、巻向山、そして穴師山だと考えられる。巻向坐若御魂神社は現在だと穴師なのだが、それをわざわざ巻向としているのは、巻向を広い範囲で考えよ、という意味であり、ダンノダイラでの祭祀と出雲の真相を隠すため、とも言える。

よって、ある記述に“三諸山”とあった場合、それが本来の三諸山（穴師山、巻向山、白山）なのか、変えられた三諸山（穴師山、巻向山、三輪山）なのか、考えなければならない。（要は、三輪山を含むか含まないか、ということである。）このような改変が成されているので、三諸山を三輪山と勘違いしてしまう。

三輪山は桧原神社から見て真東には無く、南東にずれていることから、三輪山の祭祀は大邪馬台国の後の時代、すなわち、秦氏に依る大和朝廷での祭祀であることは間違いない。ならば、桧原神社も同様である。何故なら、ダンノダイラから泊瀬山を影向していたのなら、更にその手前（真西）に影向する祭祀場は必要無いからであり、元兵主神社が元桧原神社、すなわち、大邪馬台国当時の桧原神社だからである。つまり、桧原神社は泊瀬山の遥拝所ではなかったのである。大神神社摂社の桧原神社は、大神神社だけでなく大和朝廷前後の時代の謎を解く鍵である。

(5) 三輪山の祭祀

① 三輪山と泊瀬山、都介野岳

ここまで見てきたように、卑弥呼の邪馬台国の祭祀は都介野岳を神山として小夫で始まり、それを暗示するように、泊瀬山を神山とするトヨの大邪馬台国に祭祀が受け継がれた。これが、ヤマトに於ける祭祀構造の根本である。ここでもう一度、ヤマトの祭祀基本構造図を振り返る。

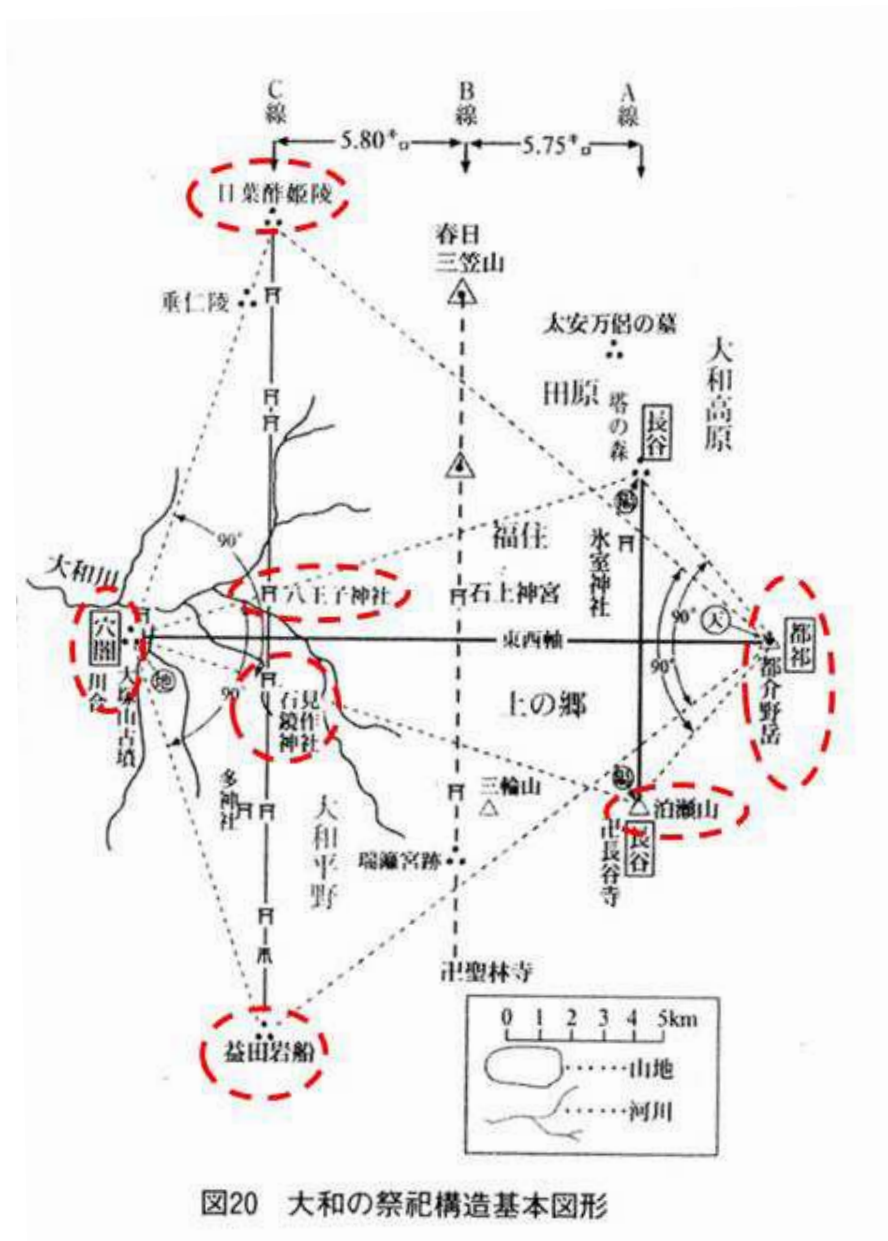
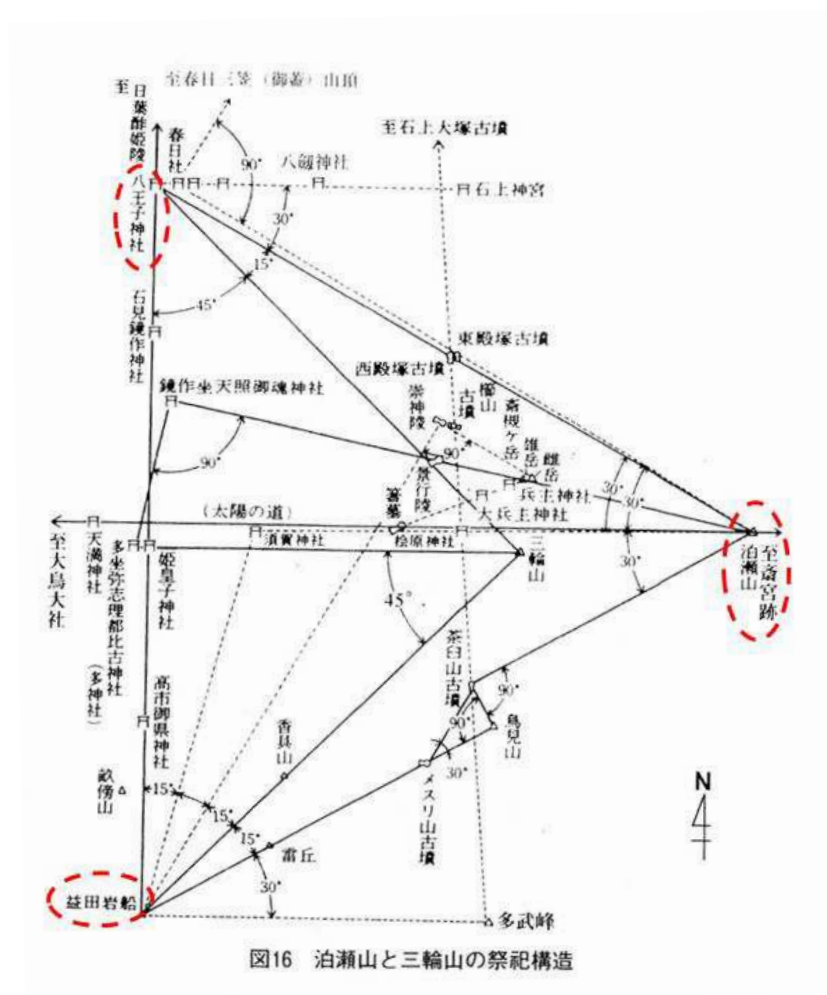


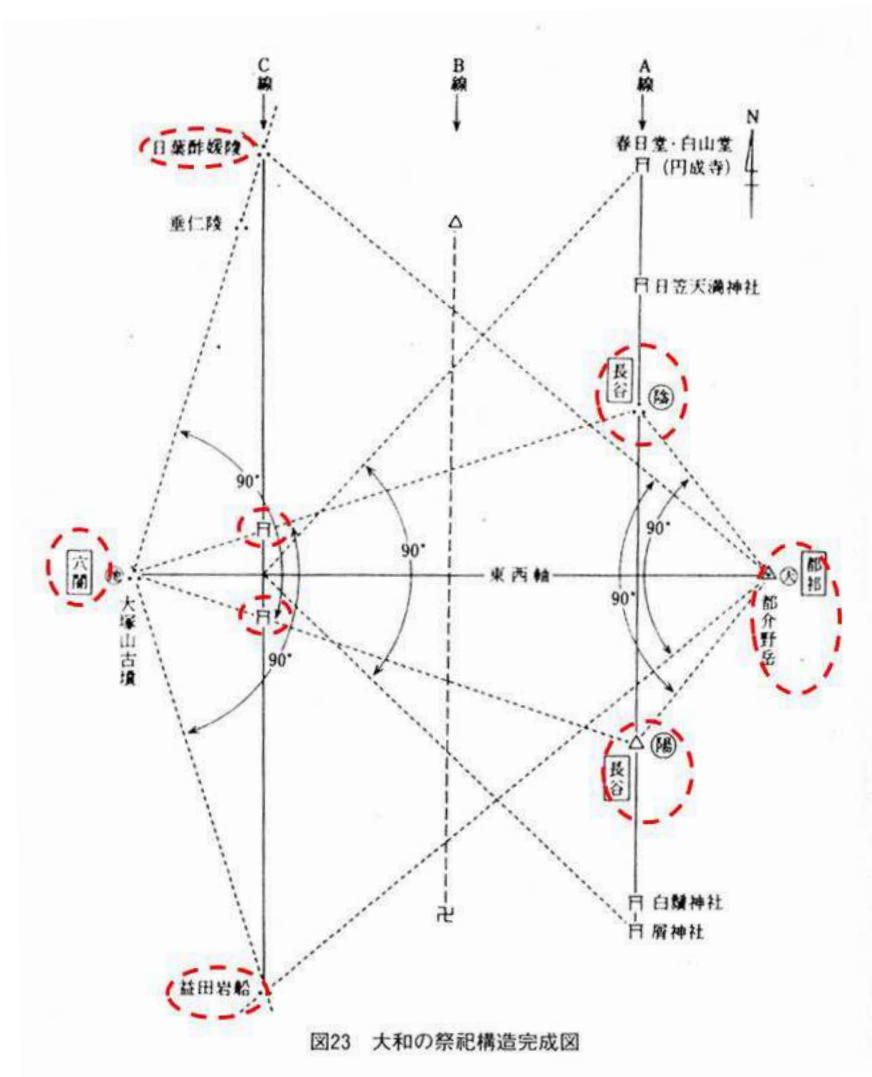
図20 大和の祭祀構造基本図形

基本となるのは都介野岳と泊瀬山である。都介野岳から真西に伸ばした都介野岳ー穴闇のラインを陰陽の対称線として、泊瀬山の対称点を長谷とし、都介野岳ー泊瀬山のラインに直角を成す線を都介野岳から引く。同様に、都介野岳ー長谷のラインに直角を成す線を都介野岳から引く。長谷ー泊瀬山を A 線とした場合、巻向山系から三輪山の麓に当たる部分に南北の B 線を引く。次に、B 線から西側に、A 線ーB 線の間隔と同間隔の線を南北に引き、C 線とする。そして、都介野岳ー泊瀬山のラインに直角を成す線と C 線との交点を日葉酢姫陵、都介野岳ー長谷のラインに直角を成す線と C 線との交点を岩船とする。また、長谷

一穴闇とC線との交点を八王子神社、泊瀬山一穴闇とC線との交点を石見鏡作神社とする。これを基本とし、各寺社・古墳を散りばめる。この時点では、三輪山はいずれのライン上にも乗っていないから、ヤマトに於ける基本祭祀に関わっていなかった、ということの意味する。

ところで、次の図16を見ると、泊瀬山からC線に向かって30度の地点に八王子神社があり、そこと三輪山を結ぶと、三輪山を起点とした東西ラインと45度の角度を成す。そして、三輪山と岩船を結ぶラインも、東西ラインと45度の角度を成す。よって、三輪山を起点とすると、八王子神社と岩船は対称点に位置するが、これは出来過ぎである。つまり、三輪山起点の東西ラインから見て45度を成すラインと、泊瀬山起点の東西ラインから見て30度を成すラインとの交点を八王子神社とし、その対称点を岩船としたのである。岩船が多武峰のほぼ真東に位置することまで考慮して。そのためには、都介野岳から真西に相当する穴闇もまた、八王子神社がこのような配置になるような位置に置かれた、ということである。





都介野岳



<http://park.geocities.jp/yamasupa3/tugefuji.html>より転載

泊瀬山



<http://www5c.biglobe.ne.jp/izanami/iwakura7nara1.htm>より転載

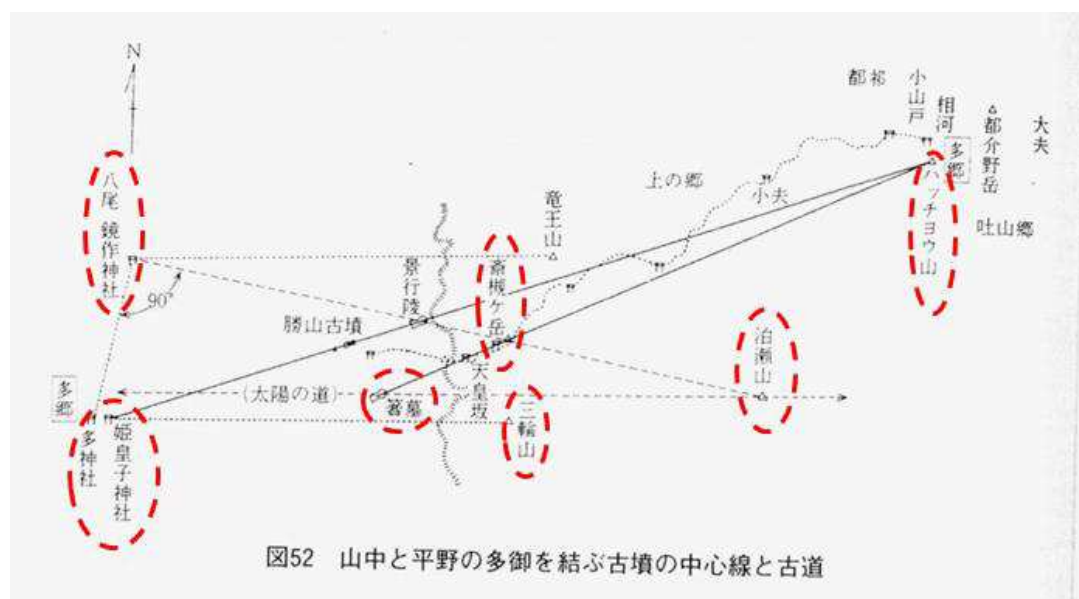
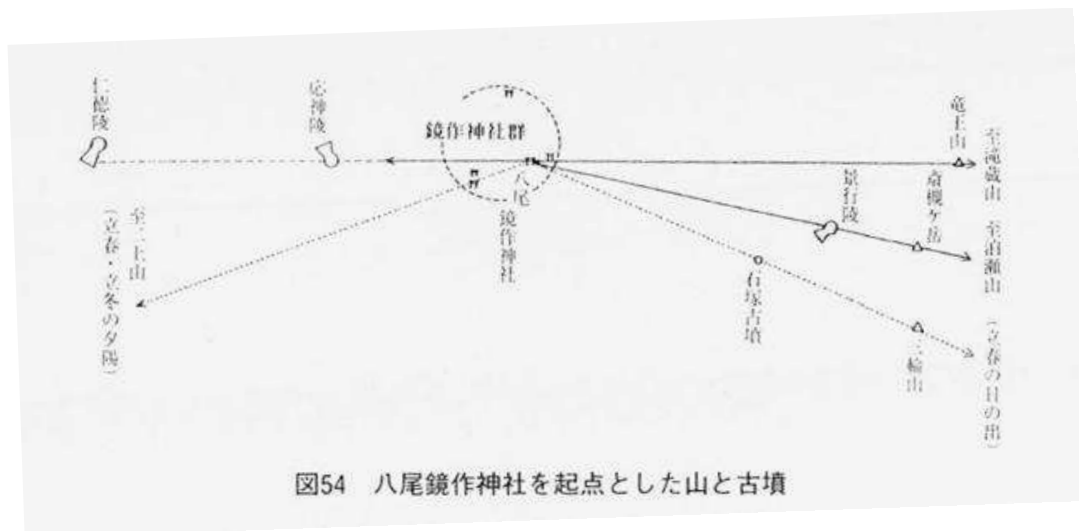
何よりも、古代に於ける太陽神信仰の山で、いずれも東向きであり、同様な信仰の山の根源はエジプトのピラミッドである。ピラミッドはニンギシュジッダが設計し、この「神」はエジプトから中南米に渡り、ククルカンあるいはケツァルコアトルと呼ばれ崇められた。そして、＜日本の真相 3＞＜日本の真相 4＞に記したように、猿石や猿田彦など日本にもニンギシュジッダの足跡が認められ、このような壮大な仕掛けを施すことができる「知恵の神」はニンギシュジッダをおいて他にいない。

よって、他にも山が存在するのに、わざわざ都介野岳と泊瀬山を神山としたのは、それが人工的に造られた巨大磐座、ピラミッドだからだろう。だから、これらの神山を遥拝する場所には、自然の岩を生かした磐座が利用されているのである。

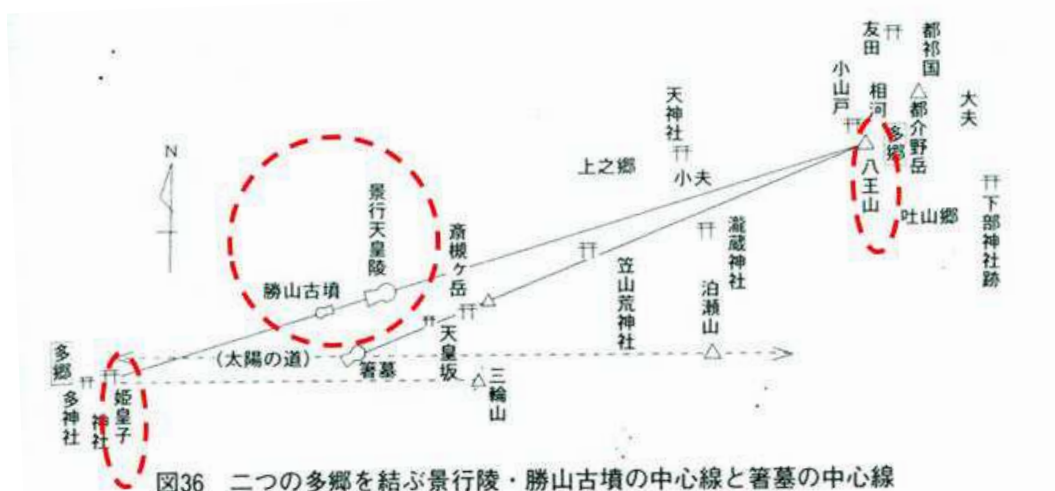
では、大和朝廷に於いて、三輪山をどのように都介野岳や泊瀬山と関わらせているのだろうか。注目すべきは、(1)に記した本来の男神・天照大神＝天火明命＝天照国照尊の分身としての鏡を祀り、草薙神剣を奉じて太陽神・天照大神（天照国照尊）を祀っていたことを暗示している八尾鏡作神社である。八尾鏡作神社の位置は重要で、他にも仁徳・応神天皇陵などとも深い関わりを持っているが、ここは泊瀬山と斎槻岳を結んだライン上にある。ここから三輪山を望むと立春の日の出を拝め、二上山を望むと立春・立冬の落日を拝むことができ、かつ、雨乞いの竜王山はほぼ真東に位置する特異的な位置にある。

ならば、竜王山なども人工では？と思わせるが、それはさておき、泊瀬山と斎槻岳を結んだライン上で、三輪山を望むと立春の日の出を拝める場所として選ばれたのが八尾鏡作神社である。（落日よりも日の出の方が重要で、しかも立春は、その日から春＝新たな年の収穫の始まりを意味する。）そして、八尾鏡作神社から泊瀬山－斎槻岳－八尾鏡作神社のラインを 90 度曲げ、三輪山から真西に伸ばしたラインとの交点を多神社としたのである。この神社は、八尾鏡作神社に直結しているライン上にあるから、御神体としては鏡、祭神としては太陽神の天照国照尊である。

しかし、多神社は C 線からわずかにずれているし、太陽神を祀るための剣が無い。そこで、C 線と三輪山から真西に伸ばしたラインとの交点に姫皇子神社を置き、今度は箸墓－斎槻岳－八王山のラインに着目すると、斎槻岳も八王山も前述のように雨乞いや水神に関係し、剣の象徴でもある。その八王山と姫皇子神社を結べば、姫皇子神社は八王山に直結しているライン上にあることになるから、御神体としては剣、祭神としては天照国照尊の陰の側面、豊受大神となり、神社名も“姫”を関して陰であることを象徴している。（表向きは神武天皇の皇子とされてはいるが。）そして、これら一直線に並ぶ 2 つの神社、多神社と姫皇子神社から真東に三輪山を遥拝すると、三輪山に太陽神を迎え、剣を奉じて祀る形態が完成する。三輪山は、このようにかなり間接的に泊瀬山と関連しているわけであり、それは取りも直さず、卑弥呼の邪馬台国、トヨの大邪馬台国とは異なる王統であることを暗示しているのである。



そして、八王山－姫皇子神社のライン上に景行天皇陵と勝山古墳という 2 つの古墳の中心線を置いて、このラインが姫皇子神社の謎を解く鍵であることを暗示し、また、それぞれの古墳の向きが逆向きになっているのは、姫皇子神社から八王山を拝することと、八王山の神をヤマトの平野に降ろすという意味である。



また、多神社が西、姫皇子神社が東に並んでいるのは、卑弥呼の邪馬台国では都介野岳が東、小夫が西であり、女王で巫女の卑弥呼が都介野岳で祭祀を、男王の意富那比命が小夫＝多部＝意富の部で政（まつりごと、政治）を司っていたことを遷したものと言える。現に、姫皇子神社の“姫皇子”は海部氏系図にある卑弥呼の名、“日女命＝ヒメノミコト”を思わせる。そして、この位置からは、春分と秋分に三輪山から昇る太陽を見ることができる。昔は春分から耕作を開始するという不文律があった。稲は日本に自生していなかった植物で、本来は日本の気候風土に適さない。だから、正確な季節の変化を知る必要がある。それは太陽の運行に他ならず、これを見て農業の指導を行う人を“日知り”と言い、これが“聖”の語源となった。そして、太陽の運行は暦に他ならず、暦を操る者こそが大王だった。すなわち、天皇は農事などの指導を行う聖だった、というのが、小川氏の説である。

さて、姫皇子神社の祭神は、多神宮注進状には天媛日火靈神尊（アマツヒメヒメノカミ）とあり、その裏書きに引用される社司多神名秘伝（？）には、“天媛日火靈尊は天疎向津少女命（アマサカルムカツヒメノミコト）、天照大日靈尊之分身、故姫皇子、天照日靈大神之若魂、故天疎と云う 高宮郷座天照大神和魂神社同体異名也”とあり、天照大神の和魂であるという。

(<http://www3.ocn.ne.jp/~tohara/ou-mikogami.html> 参照。)

“大日靈”は“大いなる日女（ヒルメ）”という意味だから、やはり卑弥呼であり、その亦名が若魂（若御魂）である。若魂＝若御魂と言え、大兵主神社で祀られている若御魂神だが、三種の神器を守護された稲田姫命を祀り、御神体は勾玉と鈴で、芸能の神として崇敬を受けられた、とされている。卑弥呼の時代によりやうく神器が整ったので、それが“三種の神器を守護された”と象徴され、“稲田”は食の根源だから豊受大神の象徴で太陽神と陰陽の対を成す。勾

玉は王権のあった場所の象徴で、鈴は巫女の象徴だから、女王で巫女だった卑弥呼に相応しい。芸能の神というのは、巫女舞が神楽の根源になっているからである。

ならば、かつて巻向坐若御魂神社で祀られていたという若御魂神と姫皇子神社で祀られている姫皇子命＝天媛日火靈神尊は、共に卑弥呼を象徴していると言える。(更に、(4)④に記したように、イナンナも重ねられているだろう。)

多神社は正式には多坐弥志理都比古神社（おおにいますしりつひこじんじゃ）で、延喜式では名神大社という最高の社格であり、弥生前期以来の遺跡の中心にある最古級の社である。この社を創始したとされるのは、神武天皇と三輪の神の娘イスケヨリヒメとの子、神八井耳命とされているが、(4)②に記したように、“小夫は多部（多氏の居住区）にして神八井耳命の末裔”だから、神祭りが可能な意富那比命の血統ということである。この神八井耳命は神武天皇の皇子とされているので、姫皇子と兄弟あるいは同一人物となるが、いずれにしろ、神武天皇の子とされていることは同じである。

志理都比古と言えは 13 世孫・志理都彦命であり、＜日本の真相 5＞に記したように、この時代に高尾張氏が分家し、伊理泥王が裏切ったと推定される。“多”は“ハタ”とも読み、記紀に於ける多氏は、実は容易に改宗して秦氏に変身した物部氏、すなわち、徐福の系統の葛城氏＝伊理泥王の血統と見なせば、神社名を“志理都比古”とすることにより、祭祀が伊理泥王の血統に異動したことを暗示することになり、矛盾しない。その血を受け継いだのが蘇我氏である。王統が秦氏に移譲されたとは言え、神祭りは特定の血統にしか許されていないから、大和朝廷と言えども、祭祀権まで即座に移譲されたわけではないのである。あくまでも、海部氏の血統に限られる。特定の神の妻や子、子孫という伝承は、その神を祭祀する人であることを意味し、この多氏の子孫には大物主神を祀ることになった大田田根子があり、大物主神を子孫の大田田根子が祀ることにより大物主神の祟りが治まったことは、古代に於ける神祭りは、特定の血統の者＝海部氏一族にしか許されないことを暗示している。

そして、この志理都比古＝13 世孫・志理都彦命に相当する天皇は、＜日本の真相 5＞の“本来の皇統”に記したように、景行天皇である。前述の八王山－姫皇子神社のライン上に位置する景行天皇陵は、泊瀬山－斎槻岳－八尾鏡作神社のライン上にも位置しているが、これは三輪山と泊瀬山、都介野岳とを関係付け、その印として八王山－姫皇子神社のライン上に配置した古墳と、新たな遥拝の地である多坐弥志理都比古神社がほぼ同時期に建造されたことと、その祭司の血統が徐福の系統の葛城氏＝伊理泥王の血統であることを暗示しているのである。言い換えれば、13 世孫・志理都彦命に相当する天皇が景行天皇であり、この時代に伊理泥王が裏切ったと推定することの正しさが裏付けられた、とも言える。

この景行天皇陵の中心線は八王山と姫皇子神社を結ぶ直線上にあるが、前述のように、このラインは陰である剣を象徴するラインである。また、図 22 から解るように、この陵の陽の部分である後円部が陽のラインである泊瀬山－鏡作

Figure 22 is a map illustrating the expansion of the ritual structure along the East-West axis. The map shows various shrines and archaeological sites, with angles of 30, 60, and 90 degrees marked. Key locations include Hachiman Shrine (八咫神社), Hachiman Prince Shrine (八咫王子神社), and various other shrines and burial mounds. A dashed line indicates the 'Way of the Sun' (太陽の道). The map also shows the 'Way of the Sun' (太陽の道) and the 'Way of the Sun' (太陽の道).

しかし、景行天皇陵に於いてこのように陰のラインと陽のラインがクロスしていることは、＜日本の真相 5＞に記したように、景行天皇＝13 世孫・志理都彦命の時代に秦氏が渡来して祭祀に影響を及ぼし始め、最終的には陰と陽に分祀されてしまったということを暗示しているのだろう。

45

としては太陽神の天照国照尊である。八王子神社は剣に関係し、三輪山－岩船ライン上にはヤマトの物実で王権のある土地の象徴、天香具山（神器としては勾玉）がある。（そのような位置に造成された。）ならば、この巨大な直角二等辺三角形は、新たな祭祀場に三種の神器を遷したことを暗示している。

ただし、“暗示している”だけであって、実質的には息津鏡・辺津鏡は海部氏が、草薙神剣は尾張氏が持っているから、あくまでも象徴的な意味に過ぎない。そして、三輪山の神は地祇の大物主神とされており、天照国照尊が地祇に陥れたとも考えられるが、むしろ、秦氏はやはり天神を直接祭祀することはできないので、本来唯一の神であった天照国照尊を陰と陽に分離し、陰である地祇を伊理泥王の血統に祀らせていた、と考えるのが妥当である。（陽である天照大神は、息津鏡・辺津鏡を有する海部氏が祀る。）それが、崇神天皇6年に疫病を鎮めるべく、従来宮中に祀られていた天照大神と倭大国魂神を宮中の外に移し、天照大神と倭大国魂神の分祀が始まったものの、疫病は終息せず、神祭りの一族の血統である大田田根子に大物主神＝倭大国魂神を祀らせることにより、疫病は終息して五穀豊穰となった、という逸話になっているのである。つまり、三輪山は古代邪馬台国祭祀の中心地ではなく、秦氏に依る大和朝廷祭祀の中心地である。

②巻向坐若御魂神社の位置

先ほども巻向坐若御魂神社が出てきたが、図38を見直すと、箸墓－斎槻岳（元兵主神社）－八王山と八王山－景行天皇陵－多神社のいずれのライン上にも乗っておらず、両者の間にある。それは、荒神社、他田坐（おさだにます）天照御魂神社も同様である。（これらは、特に同一線上にあるわけではない。）

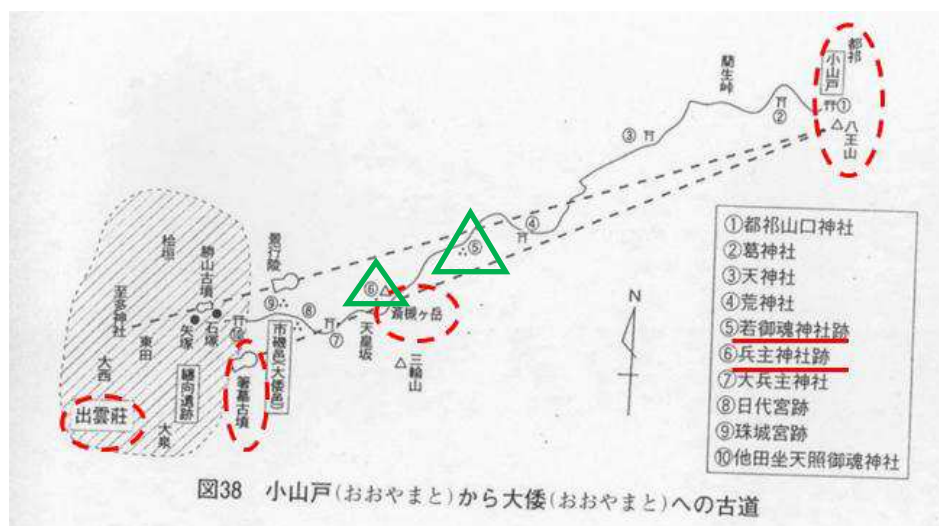


図38 小山戸(おおやまと)から大倭(おおやまと)への古道

・荒神社

(<http://www.geocities.jp/miniuzi0502/jinjadistant/nara/kasayama.html>)

参照。)

荒神発祥の社。祭神は土祖神（ツチノミオヤノカミ）、奥津日子神（オキツヒコノカミ）、奥津比賣神（オキツヒメノカミ）。この神社が鎮座する笠山は荒神出自の源で、笠七岫七谷（ななみねななたに）の最高峰、鷲峯山（じゅぶさん）の頂である。往古の鷲峯山は神奈備と仰がれ、笠の郷は神浅茅原と言われ、笠縫邑の神蹟伝承地である。

この笠山に我が国固有の大地の神、竈の神を奉斎。神仏習合の影響で三宝荒神とも称し、大地を守り、竈・火鎮めの神を祀る日本第一の笠山荒神で、清浄を尊び不浄を誡め、火の神聖な機能によって除災招福を齋する。

土祖神と言え、シュメールではエンキであり、外宮の土宮の神と同一である。そして、“奥津”は息津鏡を暗示し、“鷲”はシュメールの「神々」の象徴で、中でも太陽神ウツの象徴が多い。また、“七”も神の数字である。

火＝日だから、荒神社は地球の主エンキと太陽神ウツを象徴する神社である。周髀算経に依れば“笠を以て天の形を写す＝笠は天の象徴”だから、笠山は天神の山なのである。

・他田坐天照御魂神社 (<http://kamnavi.jp/mn/nara/osada.htm> 参照。)

祭神は天照御魂神だが、他に天照大神荒魂、天照国照火明命やニギハヤヒとする説がある。この神社が鎮座する地は太田なので“他田”となっているが、ここから立春・立冬は三輪山山頂付近、春分・秋分は巻向山頂上付近で、敏達天皇が日祀部を設置した日読みの地であり、真南には箸墓がある。

天照御魂神社と呼ばれる神社は他に、太秦の木嶋坐天照御魂神社などがある。

地名の“太田”は、しばしば登場している大田田根子象徴していることは明らかであり、祭祀氏族の血統を暗示している。日読みの特別な地であり、もう 1 つの木嶋坐天照御魂神社の鎮座する地は元々海部氏の土地で、しかも、祭神は天照国照火明命という説もあるのだから、天照国照尊を祀る神社である。

そうすると、荒神社－巻向坐若御魂神社－他田坐天照御魂神社はエンキとウツ－卑弥呼－天照国照尊という構造で、最初に小さな（あるいは前）統一国家としての邪馬台国で、卑弥呼がエンキとウツを天照国照尊として祀り始めた、という暗示になっている。また、巻向坐若御魂神社の神は芸能の神ともされているが、本来の原型はアメノウズメ＝イナナだから、エンキ、ウツ、イナナという海部氏が重要視されている「神々」である。このように、シュメールを暗示しているので、神器と祭神の両方を象徴している 2 つのラインには乗っていないのだろう。（天神社も同様である。）

荒神社は笠山の頂上に、他田坐天照御魂神社は 2 つのラインの間で箸墓の真北に位置するから、2 つのライン上に乗っていないことも、特徴的な配置である。では、巻向坐若御魂神社はどうなのか。“巻向坐”とはなっているものの、巻向山系の斎槻岳頂上ではないし、巻向山の頂上でもない。まして、箸墓から見て

斎槻岳の向こう側になり、見えない。箸墓から見て見えない隠国は都介野岳だから、巻向坐若御魂神社を“隠国”という概念でも語ることはできない。では、どう考えるべきか。そのヒントが以下の図にある。

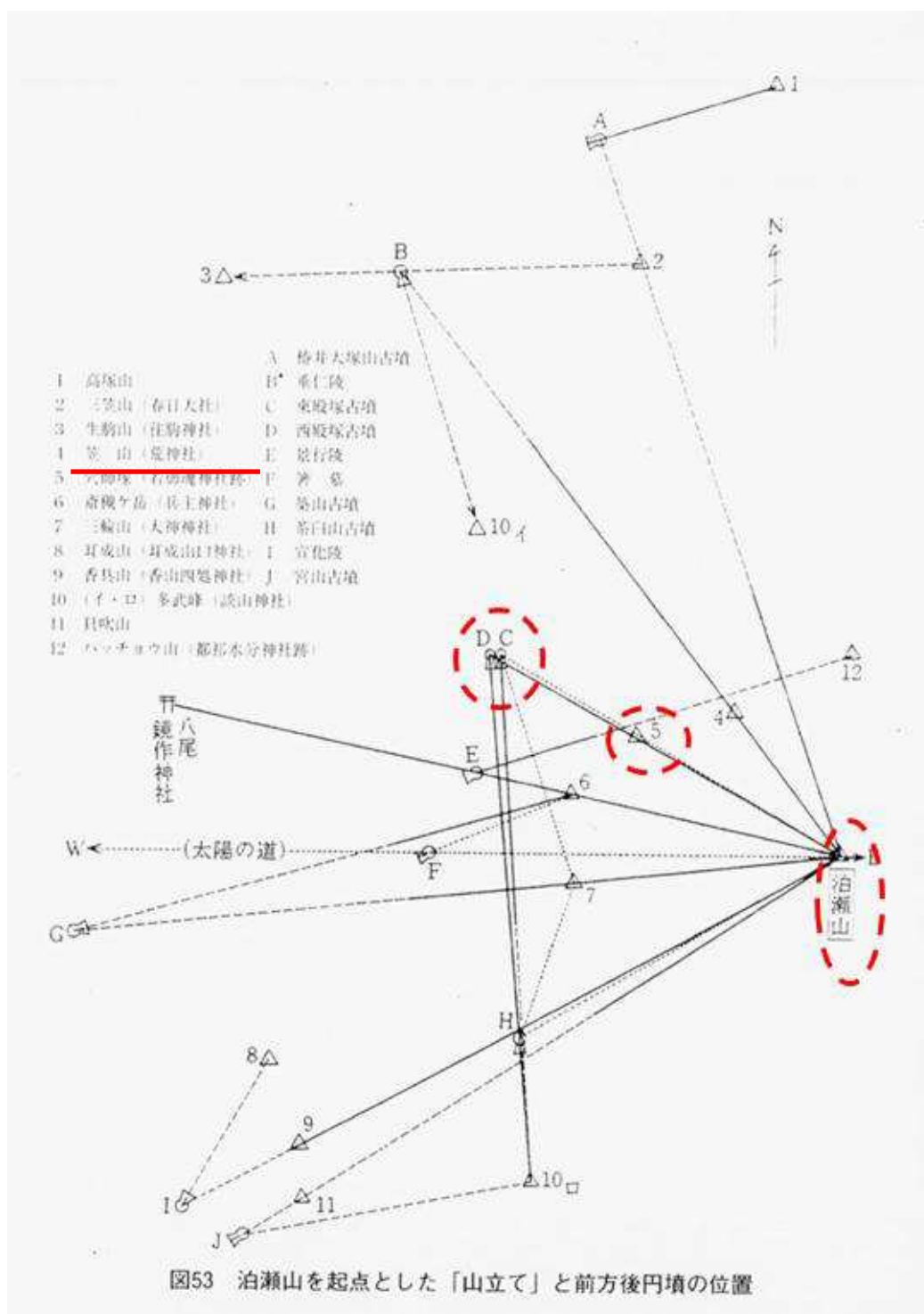


図53 泊瀬山を起点とした「山立て」と前方後円墳の位置

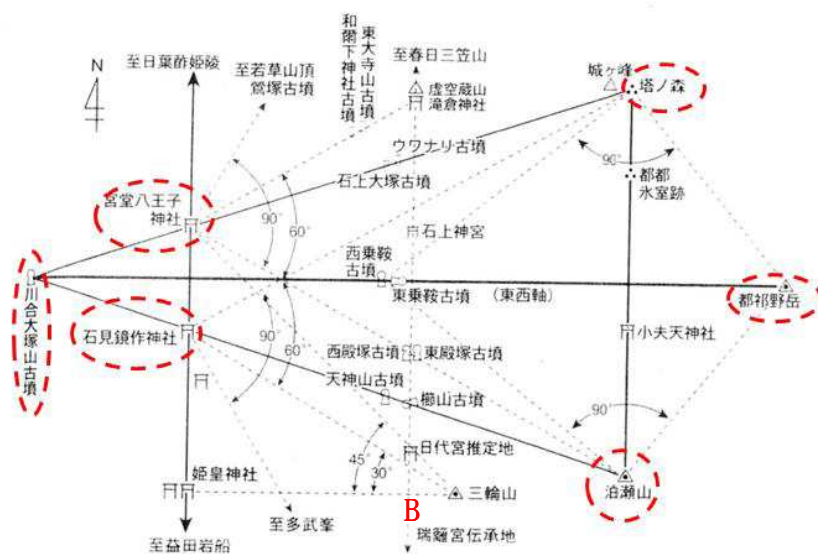


図21 大和の祭祀構造の中央部

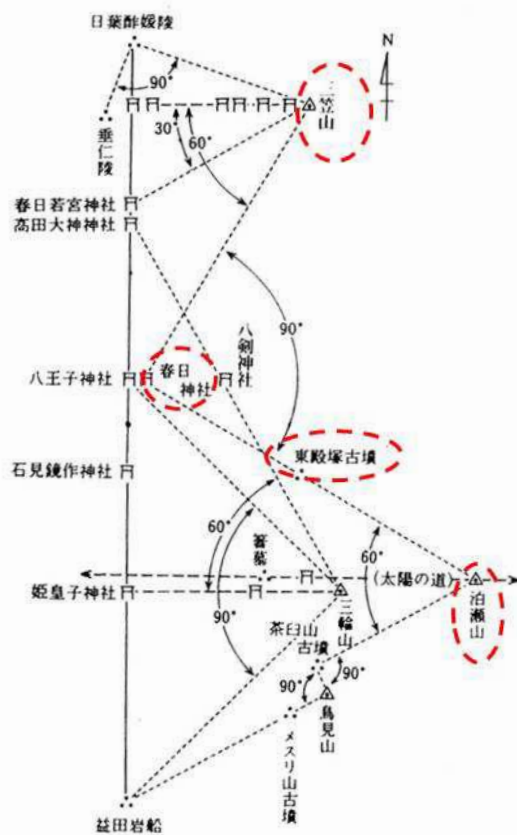


図18 三笠山・三輪山・泊瀬山と大和平野を貫く聖なるライン

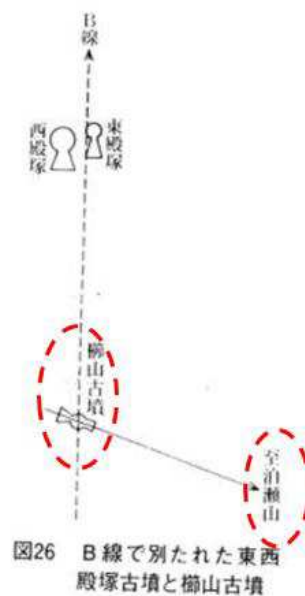
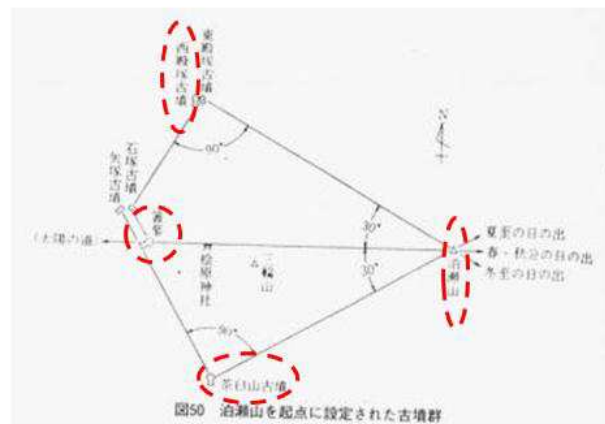
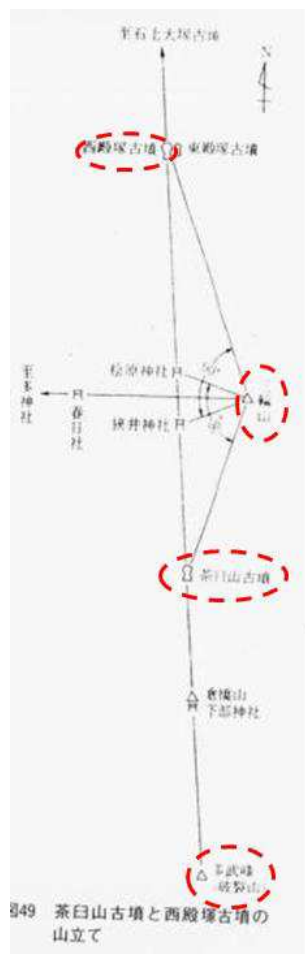


図 53 と図 21 から、巻向坐若御魂神社は泊瀬山－東殿塚・西殿塚古墳－八王子神社のライン上にあり、東殿塚古墳から冬至の日の出の方向に泊瀬山は位置するので、東殿塚古墳（と隣接する西殿塚古墳）は特別な位置にある。

図 18 から、このラインを 90 度曲げると三笠山に達し、平城京に於ける聖なる山で、現在でも禁足地である。（更に、明日香には平安京を象徴する酒船石があり（＜日本の真相＞参照）、平安京まで考慮されている驚くべき設計図である。）

図 49 から、西殿塚古墳の中心線は桧原神社－狭井神社－茶臼山古墳－多武峰のライン上にある。しかも図 50 から、泊瀬山－殿塚古墳群のラインを 90 度曲げ、石塚古墳を経て箸墓に達し、その南側では、泊瀬山－茶臼山古墳のラインをやはり 90 度曲げれば、箸墓の前方部の端のラインと一致する特別な位置にある。

図 21 から、東殿塚古墳と西殿塚古墳の間を B 線が貫き、ここには幾つもの寺社や古墳が位置する。この B 線を境とし、東側は天の領域で、西側は地の領域である。先ほどの泊瀬山－東殿塚・西殿塚古墳－八王子神社のラインは、東殿塚古墳では前方部、西殿塚古墳では後円部を貫いているが、前方部は“方”で地と陰、後円部は“円”で天と陽を意味するから、存在する領域とラインの貫いている箇所それぞれ陰陽＝天地の合一を象徴している。ここを拡大すると図 26 だが、B 線は円丘部の東西に方丘部が付いた中円双方墳という特異な形状の櫛山古墳の円丘部の中心を貫く。これは、東の天と西の地を合一することを象徴する古墳で、この古墳の中心線は泊瀬山に達し、一方は石見鏡作神社に達するという、これも特別な位置関係にある。

また、図 16 を振り返ると、箸墓の後円部－泊瀬山という正確な東西ライン（太陽の道）を基準とし、泊瀬山から東殿塚古墳を経て八王子神社の東の春日社（別名・石上神社！）に至るが、箸墓の前方部－桧原神社－泊瀬山のラインを基準とすると、西殿塚古墳を経て八王子神社に至る。この両者の角度差はわずか 1 度だが、そこまで計算して配置されている。

桧原神社が東西線からやや外れている理由は、次ページの図 11 のように三輪山の中心線の左右に、日の神を祀る桧原神社と水に関わる神を祀る狭井神社を配置し、この二社が三輪山山頂を介し、茶臼山古墳と西殿塚古墳の両古墳と、それぞれ 90 度ずつ展開した位置に設定したためである。言い換えれば、東殿塚・西殿塚という古墳が近接して建造されたのは、泊瀬山からの正確な東西線と、桧原神社－泊瀬山のラインを基準に、それぞれ西北 30 度の位置に設定したからだ、と小川氏は言う。

確かに、そのようにも言えるのだが、広大な地上図に於いては、土地の起伏状態などにより、本来設置したい場所ではなく、やむを得ず近接する場所に設置しなければならない場合もあろうから、1 度という角度は誤差範囲である。ならば、桧原神社と狭井神社の位置を少々ずらして、あるいは誤差とみなして東殿塚・西殿塚の両古墳をまとめて 1 つにしても良さそうだが、そうっていないのは、やはりそれなりの意味を考えなければならない。

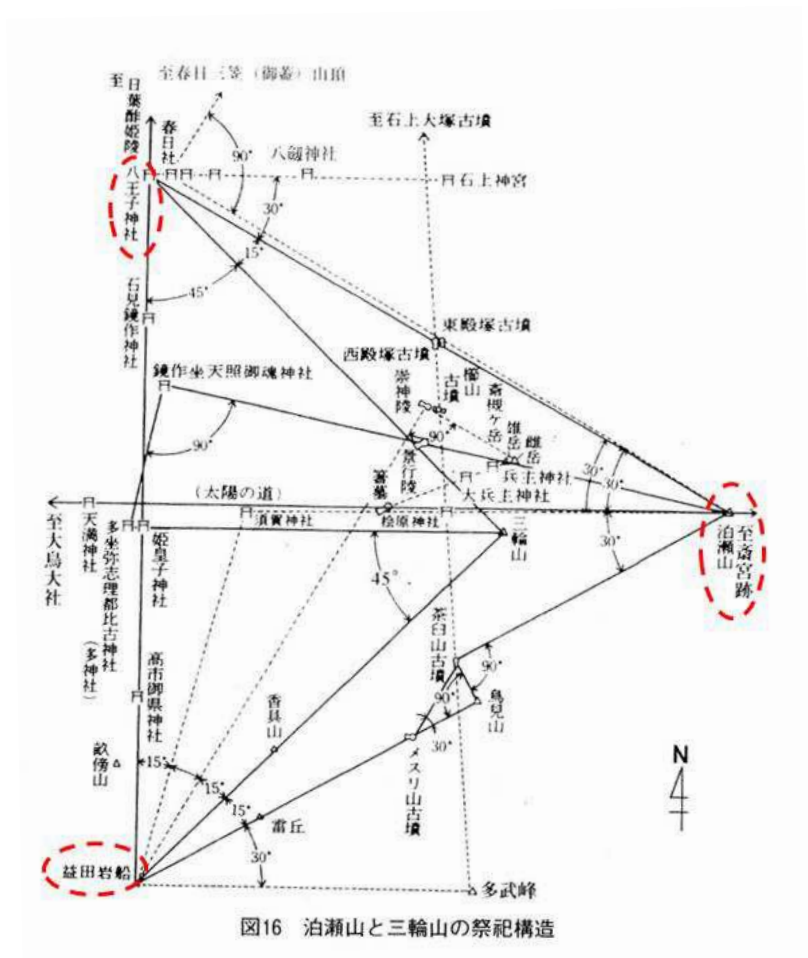


図16 泊瀬山と三輪山の祭祀構造

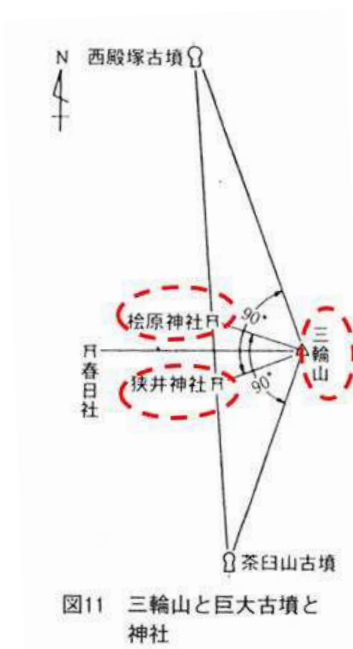


図11 三輪山と巨大古墳と神社

泊瀬山ー西殿塚古墳のラインは八王子神社に達し、象徴的には西殿塚古墳も八王子神社も陰である。対して、泊瀬山ー東殿塚古墳（後円部）のラインは春日社に達し、春日は“三人の日”なので太陽神＝陽の象徴であり、東殿塚古墳も象徴的には陽である。その春日社で90度曲げられて、後の平城京の神山となる三笠山に達していることは、いずれも陽としての性質、とりわけ大邪馬台国に於ける泊瀬山の太陽神影向の性質をそのまま三笠山に遷すという意図を暗示しており、後の都、平城京の設計まで考慮されているのである。そして、春日社から三笠山に遷しているからこそ、現在、三笠山の西にあって三笠山を神山としてお祭りしている神社が春日大社となる。しかも、泊瀬山は東殿塚古墳から見て冬至の日の出の方向に位置し、冬至は太陽（神）の復活と見なされるから、東殿塚古墳は陽の性質として重要である。

①に記したように、大和朝廷の時代から、本来唯一の神であった天照国照尊が陰と陽に分離され、秦氏は天神を直接祭祀することはできないので、陰である地祇を伊理泥王の血統に祀らせていたから、ここの古墳も陰と陽に分離し、後に陽の側面を三笠山に遷す意図があったのである。

故に、古墳をわざわざ陰と陽の2基に分離する必要がある、太陽神と卑弥呼を暗示する巻向坐若御魂神社は、西殿塚古墳ではなく東殿塚古墳の後円部ー泊瀬山のライン上になければならないのである。そして本来、陰と陽は一体だから、両古墳の南側に中円双方墳という特異な形状の櫛山古墳を配置して陰陽の合一を図り、泊瀬山ー櫛山古墳のラインは、八王子神社と共に広大な地上図に於ける最初の起点の1つ、石見鏡作神社に達する。

③ 桧原神社の真相

そうすると、桧原神社は意図的に泊瀬山からの正確な東西線上に乗せなかった、ということになる。それにより、前述のようなわずか1度ずれたラインが形成され、祭祀上の意味が確立されるからである。しかも、桧原神社ー泊瀬山から30度折れるラインが陰の西殿塚古墳を通り、箸墓の陰の部分である前方部を通っているということは、大神神社摂社の桧原神社は実は陰であるという暗示である。

桧原神社は女神の天照大神とされている天照大神若御魂神を祀り、太陽崇拝のはずだから陽だ、と思われている。しかし、大邪馬台国の時代には、箸墓から泊瀬山を遥拝するのはダンノダイラだったから、その手前に更に遥拝所がある必要は無いので、桧原神社は天照大神が泊瀬山から三輪山崇拝へと祭祀を変更した際に、謎を解く鍵として後から建造されたものと考えられる。

その鍵とは、女神としての天照大神である。ここで“天照大神とされている天照大神若御魂神”とは、秦氏の創作した女神の天照大神であることに注意しなければならない、そのモデルは卑弥呼である。それが、“若御魂”として暗示されている。そして、秦氏の最も重要な神はイエスである。＜日本の真相5＞に記したように、現在、女神としての天照大神を祀る最高の霊廟は神宮の内宮であり、そこにはイエスと共に卑弥呼が祀られている。イエスの象徴は十字架で陰だから、カッパーラとしては陰とせざるを得なかった、というのは八咫鳥の主張だが、それだけではなく、この国での最初の女王、卑弥呼と重ねられている

こと、そして、イエスは自らを“神の子”ではなく“人の子”と言っているから、神を天神と見なせば陽で、それに対して人は地で生まれるからイエスは陰となる。つまり、この桧原神社は内宮と同じ構造である。だから、最初の内宮の地、笠縫邑とされているのは、卑弥呼とイエスを共に祀って女神・天照大神とした最初の地で象徴としては陰、という暗示である。言い換えれば、内宮にはイエスと共に卑弥呼も祀られていることが証明されたことになる。

これに対して、前述の荒神社なども笠縫邑の神蹟伝承地とされているが、この場合は秦氏渡来以前の話だから、本来の男神・天照国照尊を祀る笠縫邑なのであり、笠は本来の天神の象徴である。それを、秦氏が後に太陽神の象徴として取り入れて“笠縫”とした、ということである。

ここで、“笠縫宮”ではなく“笠縫邑”となっているのは、完全な祭祀が行われたのではないことを暗示している。秦氏にとって元伊勢（内宮）が“宮”となっていないことは、イエスの御神体（十字架）が無かったからだと考えられる。イエスと卑弥呼を共に女神・天照大神として祀ることにした、という最初の地であって、おそらく御神体は最初の到着地点である籠神社にあったのだろう。故に、2番目の元伊勢の地、籠神社は“吉佐宮”として“宮”の称号となっている。“吉佐＝よさ＝ヨシヤ＝ヨシュア”で、モーゼ亡き後、ヘブライの民を約束の地カナンに導いたヨシュアと、ヨシュア・メシアッハ＝イエス・キリストを表す“ヨシュア”を冠していることは、極めて暗示的である。

* 邑：むら、ゆう (<http://kotobank.jp/word/%E9%82%91> 参照。)

古代支那に於ける集落の総称。土地、区画を示す“口”と、ひざまずいた人を示す“巴”との会意文字で、人間の居住地や集落を表す。阡（おおぎと）は邑の変形である。邑は、多くの場合圉壁を巡らし、その外側に耕地を所有した。人々は宗廟と社とを中心に、邑で共同体的生活を営んでいたと考えられる。

人がひざまずくのは神の前だから、大和朝廷では三輪山を御神体とし、この辺りで集落が形成されていたのだろう。

④三輪山祭祀と大物主神

では、桧原神社と大神神社の関係はどうなっているのだろうか。その前に、三輪山を頂点とした祭祀構造を見てみる。

三輪山は斎槻岳の真南に位置する。三輪山の山頂には高宮神社（あるいは日向神社）があり、斎槻岳の大兵主神社、玉列（たまつら）神社（小川氏の引用図には“烈”と書いてあるが、実際に見学して確認したところ“列”となっていた）、真西の春日神社（慶田寺）、真東の乗田（ひきた）神社で菱形を形成し、その中心に日向神社がある。これらが形成する角度は 30 度、60 度、90 度と特徴的である。では、どのようにしたら、このような特徴的な構図を描けるのだろうか。

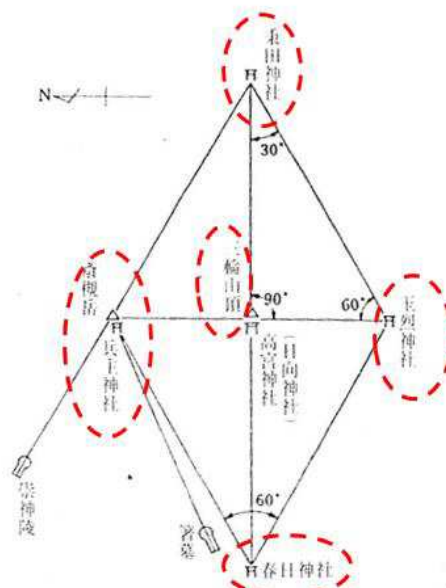
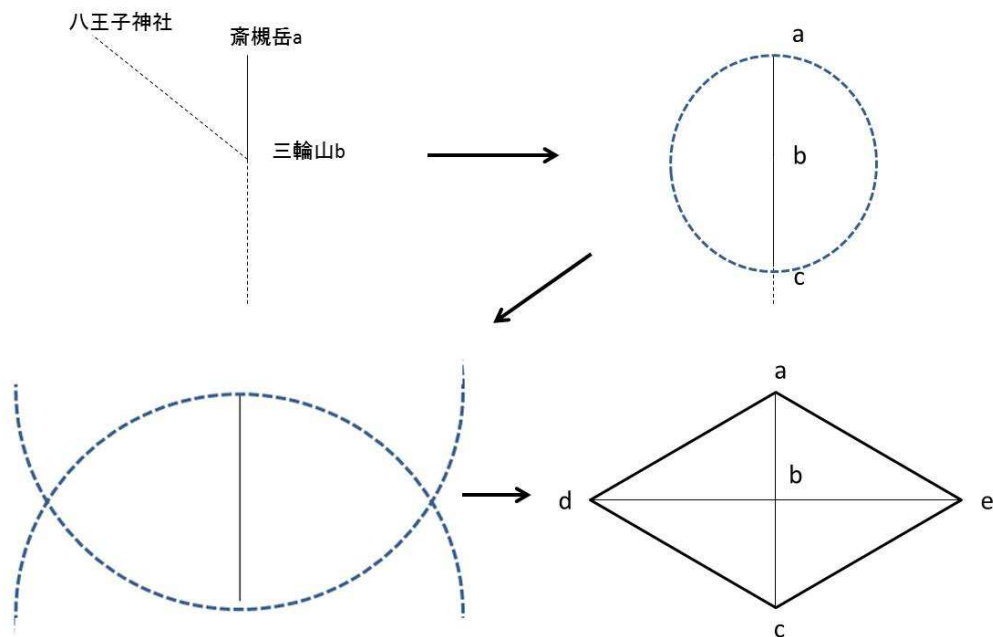


図8 三輪山を頂点とした
祭祀の構造

三輪山は斎槻岳の真南に位置するのと同時に、図16からも解るように、最も基本的な構図である都介野岳、泊瀬山を起点として描かれる八王子神社から南東45度の方向にも位置する。つまり、斎槻岳の南北ラインと八王子神社からの45度ラインとの交点が三輪山である。

- 1) 斎槻岳 a の南北ラインと八王子神社からの45度ラインとの交点を三輪山 b とする。
- 2) 斎槻岳の南北ラインを三輪山から南に延長する。
- 3) 斎槻岳ー三輪山の長さを半径とし、三輪山にコンパスの軸足を置いて円を描き、斎槻岳の南北ラインとの交点を玉列神社 c とする。
- 4) 斎槻岳 aー玉列神社 c 長さを半径とし、斎槻岳 a にコンパスの軸足を置いて円を描く。
- 5) 同様に、玉列神社 c にコンパスの軸足を置いて円を描く。
- 6) 4) と 5) の2つの交点のうち、西側を春日神社 d、東側を兼田神社 e とする。

この方法により、三輪山を囲う各神社は配置できる。すなわち、3つの円によって配置できるから“三輪”という字を充てられている。大神神社史（大神神社史料編集委員会・編纂）に依ると、“大神”はかつて“大御和”と書いたという。これは、大邪馬台国を意識した“大倭＝大いなる和”という語の美称だが、真相はこのようなことなのだろう。



*このダイヤの中の三角形が 30 度、60 度、90 度を成す証明

図は対称形なので、片側だけ ($\triangle ace$ 、 $\triangle abe$ 、 $\triangle cbe$) に着目する。 $\triangle ace$ は正三角形だから $\angle bae = \angle bce = \angle aec = 60$ 度。

辺 $ae = ce$ 、 $ab = cb$ で辺 be は共通だから、 $\triangle abe \equiv \triangle cbe$ 。(合同)

故に、 $\angle aeb = \angle ceb = 30$ 度、 $\angle abe = \angle cbe = 90$ 度。

さて、元兵主神社は元桧原神社でもあり、箸墓と崇神陵の中心線の交点にあって、如何に重要なのか暗示されている。崇神天皇はトヨの時代の大王、オトヨノミコトに相当するので、トヨを暗示する箸墓とオトヨノミコトを暗示する崇神陵が元兵主神社でクロスしていることは、大邪馬台国に於ける第一の祭祀場が元兵主神社だったことを暗示している。

元兵主神社は鏡を祀り、玉列神社は玉を祀るから、三輪山で草薙神剣を奉じれば、鏡、玉、剣という三種の神器が揃う。しかし、これまでにも見てきたように、三輪山は秦氏の神山であり、海部氏・尾張氏が信仰する山ではなく、神器は特定の氏族にしか扱えないから、三輪山に剣を奉じる、ということは無い。その三輪山山頂には、三輪上社と呼ばれた日向神社があった。大神分身類社鈔に依ると、次のようにある。

- ・三輪下神社三座：大神大物主神社三垂（しで）
 - 中座 大己貴命幸魂 神体磐石
 - 左座 大物主命 神体円鏡
 - 右座 櫛瓊（みか）玉命 神体瓊玉

- ・三輪上神社一座：神坐日向（みわにいますひむかい）神社一座
日本大国主命 神体神杉

かつては上下社に分かれ、上社は山頂にあって日向神社（現・高宮神社）と言ひ、神体は巨杉で、この大杉に日輪の如き火気があって三輪の神が降臨された、とされている。現在、日向神社は大神神社域内にあり、見学すると“高宮”の表札が掲げられていた。大神神社史に依れば、三輪朝臣高市麻呂の子孫は大神神社の社家となり、室町時代以降、高宮家を称して代々大神神社の神主を務めた、とあるから、現在では域内摂社まで陥れられているのである。“高宮”というのは外宮の“多賀宮”に通じ、若狭の高向宮も連想させるから、海部氏系である。

神体巨杉の奥の東側には壮大な奥津磐座があるが、三輪山中には多数の磐座が存在し、大別して辺津磐座、中津磐座、奥津磐座と呼ばれている。辺津と奥津は、当然のことながら、辺津鏡と息津鏡を暗示する。また、天に向かって立つ樹木や柱の神籬は天神が降臨する依り代であり、大地の神が出現するのが磐座だから、三輪山自体が天地合一を象徴する。

しかし、ここで注目すべきは、上社の祭神が“天照大神”ではなく“日本大国主命＝大国主命”となっていることである。大国主命＝スサノオとして海部氏の象徴と見なすこともできるが、下社も大物主大神、大己貴命と地祇系になっており、どこにも“天照”が無い。ならば、三輪山の祭祀も海部氏系かというところではなく、これまで見てきたように、明らかに海部氏系から秦氏に変わっている。

つまり、前述のように、天神の“天照＝天照国照尊”は海部氏系しか祀ることができず、秦氏によって天地が分祀され、天神系は海部氏の直系が密かに祀り、地祇系を秦氏に容易に従った徐福の系統の葛城氏＝伊理泥王の血統が祀った、ということである。（伊理泥王の血統を中心とした一族であることは間違いないが、葛城氏すべてが裏切った、とは言えないだろう。）これから言えることは、地祇の中でも根本のスサノオは海部氏で、大国主命、大物主神＝大国主命の和魂などの大国主系は伊理泥王の血統が祀ったということであり、＜日本の真相5＞までに検討したような、スサノオ系はすべて同一でスサノオ、ということではないのである。だから、神話で大国主命はすんなり国譲りしたことになるわけである。ただし、大国主系の中でも建御名方神は最後まで抵抗し、信濃の山奥に追放されたことになっている。これは、海部氏系の性質である。また、尾張氏に縁の深い日本武尊は倭建とも書かれ、いずれも“建”を冠し、“建”は“武”でもある。すなわち、“建”や“武”によって本来の海部氏系かどうか、暗に分けているのである。（なお、建御名方神は“安曇野”という地名から安曇氏で、＜日本の真相5＞に記したように安曇は本来“アド”と読み、エフライム族（海部氏）と共に渡来したフェニキア人と考えられる。）

以上のことから、上社にも下社にも剣は無いわけである。その剣が無い分を、祭神で補っている。祭神の大物主神は蛇神であり、蛇と言えば八岐大蛇を連想し、スサノオが尾を切って草薙神剣が出てきて、それを女神・天照大神に献上

した。その真相は、天神の海部氏をスサノオとして陥れたものの、さすがに神器まで奪うことはできず、祭神をスサノオの系統の大物主神とすることにより、剣を象徴しているわけである。確かに、伊理泥王の血統も元を辿れば海部氏に婿入りした一族の末裔だから、大物主神はスサノオの系統となるわけである。

また、スサノオが天照大神に草薙神剣を献上したことは、太陽神を祀るためには剣が必要であることも暗示するので、海部氏が秦氏に祭祀権まで譲渡したことを暗示し、後にすべての神社・仏閣は秦氏に依って抑えられたのである。

かつては三輪山の神（大物主神）が伊勢の神（天照大神）と同一視されたのも、元が天照国照尊で、それが秦氏に依って天神の女神・天照大神と地祇の大物主神（大国主命）に分祀されたからである。

そして、スサノオと大己貴神＝大国主命との関係から言えば、スサノオは娘のスセリヒメに求婚した大己貴神に対して、死んでしまうような嫌がらせの試練を与えたが、大己貴神は最終的には認められ、大国主命となった。これなどは、容易に秦氏に従った伊理泥王の血統（大己貴神）を海部氏（スサノオ）は快く思わなかったが、最終的にはこの血統が秦氏と共に表舞台で祭祀を行うことを認めた、という暗示である。そうすると、スサノオ≠大己貴神＝大国主命だが、＜日本の真相 4＞＜日本の真相 5＞で記したように、大国主命は少彦名神と協力して国造りを完成させ、海部氏・尾張氏（大物主神＝大国主命の和魂）と徐福（少彦名神）一団が友好を結んで物部氏となり、日本＝ヤマトの根幹を築き上げたことの象徴と見なした。少彦名神は波の彼方より天乃羅摩船（あめのかがみのふね）に乗って来訪した常世の小人神で、医薬やまじないなどを伝えたと言われるから、明らかに秦の方士・徐福である。

では、何かが間違えているのかというと、そうではない。秦氏渡来以前の国造りでは、大国主命は少彦名神よりも先に日本に渡来していた氏族だからスサノオで海部氏の象徴であり、少彦名神はその性質から徐福の一団である。しかし、秦氏渡来後は、容易に改宗した徐福系の影に海部氏を隠し、大国主命を徐福一団に変えたのである。つまり、「合わせ鏡」で大国主命の性質を逆転させたのである。だから、大国主命は因幡の白ウサギを治したように、医薬としての神の要素がある。その「合わせ鏡」により、最後まで抵抗していた海部氏系＝スサノオは、建御名方神という大国主命の子とされてしまったのである。（スサノオが高天原で反逆し、壇国＝新羅に追放されたことは、建御名方神が女神・天照大神の一団に抵抗し、安曇野に追放された構図と同じである。）更に、大国主命を徐福系に変えたことにより、本来の徐福系である少彦名神に“小人”という異形を付加することにより、海部氏的に仕立て上げたわけである。

大国主命は後に仏教の大黒天と習合して大黒様となり、恵比寿様とも習合して、商売繁盛の神とされた。恵比寿＝蛭子で、イザナギとイザナミの国生みの際に流された水蛭子（ヒルコ）であり、それは彦火明命＝天照国照尊に他ならない。つまり、大国主命は必然的に大黒天、恵比寿と習合され、大国主命の元は何だったのか、暗示しているのである。

大国主命は出雲大社の本殿で祀られているが、＜日本の真相 4＞＜日本の真相

5>に記したように祭神は西を向いており（拝殿は北を向いている）、本殿の背後（北側）にはスサノオを祀る素戔社（そがのやしろ）があるので、本来の大国主命はスサノオだ、と暗示しているのである。また、西の海からは大国主命の和魂である大物主神が“海を照らしながらやって来て国をも照らした”から祭神は西を向いているのであるが、これは、出雲大社の本来の神は天照国照尊から地祇として分祀された大物主神が祀られるヤマトに鎮座している、という暗示である。

ここで、日本の大元の神は蛇神だ、と言ってしまえばそれまでだが、何故、大物主神が蛇神とされているのか考える。

大物主神の本質、すなわち、大国主命の前に“海を照らしながらやって来て国をも照らした”という本質が暗示しているのは、明らかに天照国照尊である。その天照国照尊は、エンキやニンギシュジッタ、ウツ、イナンナなどの「神々」が習合した神で、籠神社の極秘伝では“ヤー”とされている。エンキとニンギシュジッタの象徴は蛇であり、特にニンギシュジッタは羽毛のある蛇、ケツアルコアトルあるいはククルカンで、猿田彦と同一視され、それは天照国照尊の性質に他ならないことはく日本の真相 4>に記した。またく神々の真相 3>に記したように、ウツも蛇として象徴される場合がある。それは、メソポタミアの幾つかある“イナンナの冥界下り”の逸話の中に、ドゥムジがウツに頼んで蛇の姿に変えてもらい逃げようとした、という話である。更に、モーゼの杖に掛けられた青銅の蛇はそもそも“銅の彼”の異名を持つエンキの象徴なのだが、木に掛けられたという観点では、イナンナも相当する。そのイナンナが木に掛けられて死に、“復活”したことがイエスの原型となっており、故に、秦氏はイエスをカッパーラの的に蛇神と見なしている。

秦氏がカッパーラの基としている聖書では、地を這う生き物として蛇が挙げられている。蛇はイブを唆し、禁断の“知恵の実”を食べさせたが、これはエンキとニンギシュジッタが、自ら創り出したハイブリッド人類に生殖能力を与えたことが原型である。そして、蛇は地を這うから、地祇となる。

故に、シュメールと聖書の観点から、地祇の大物主神の性質として蛇が選ばれたと考えられる。それにより、大物主神は天照国照尊から分祀されたことを、暗示しているのである。

先ほどは、三輪山に剣の象徴を持って来るために、八岐大蛇という蛇を登場させた、とした。しかしそうではなく、三輪山は秦氏の大和朝廷にとって、太陽神信仰（イエスという人類の光）の山である。そこに、完全な地祇を持って来ては辻褄が合わないわけで、形は地祇でも、天神を暗示する何かが必要ではない。それが、天照国照尊の蛇神としての一面なのである。

天神系の海部氏は、天神（あまかみ）と同じ音の海神（あまかみ）スサノオとして陥れられた。また、“ヤー”の本質は地球の主エンキで、エンキには海神の性質もあるから、天神ということを隠して海神とさせられた、とも言える。そして、本来の神“ヤー”と蛇神（原型となっているシュメールの「神々」）を連想させる“八岐大蛇”という存在を秦氏は創り上げ、海部氏が元々持ってい

たアロンの杖＝草薙神剣を、スサノオが八岐大蛇の尾を切って手に入れたことにされたのである。故に、蛇神が剣の象徴と成り得る。

⑤大神神社と桧原神社

大神神社は三輪山祭祀の中心地なのだが、何故か、三輪山山頂の東西ラインから外れており、三輪山の日の出を拝することもできない。三輪山の日の出を拝することができるのは、三輪下社跡に建てられた春日神社である。

大神神社には本殿が無く、御神体は三輪山である。また、鳥居も独特で、2本の柱に注連縄を張っただけの、鳥居の原型とも言うべきものであり、大神神社の摂社・末社に共通なもので、古代エルサレムの神殿にあったボアズとヤキンに類似している。

拝殿奥には三ツ鳥居があるが、桧原神社には堂々と大きな三ツ鳥居があるので、この拝殿奥の三ツ鳥居は桧原神社を暗示している。この三ツ鳥居を春日神社の位置に置くと、三輪山頂は春分・秋分の、斎槻岳（大兵主神社）は夏至の、玉列神社は冬至の日の出を拝することができる。更に三輪山の西側では、多神社－三輪山のラインが春分・秋分、神武天皇陵－三輪山のラインが夏至、鏡作神社群のある唐古遺跡（石見鏡作神社）－三輪山のラインが冬至の日の出のラインとなる。（著書から抜粋の次の図では、夏至と冬至が逆になっており、誤植である。）

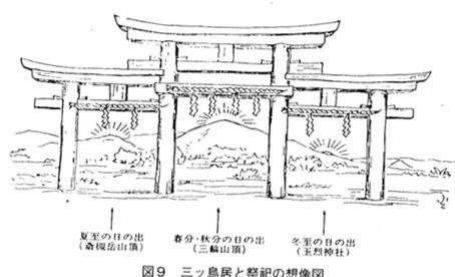


図9 ミツ鳥居と祭祀の想像図

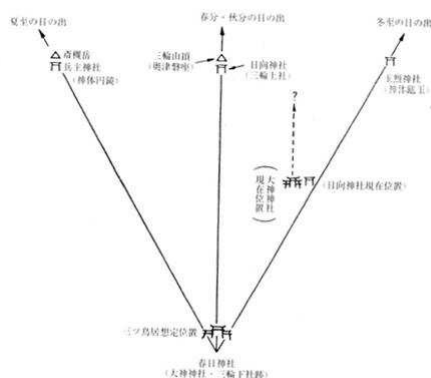


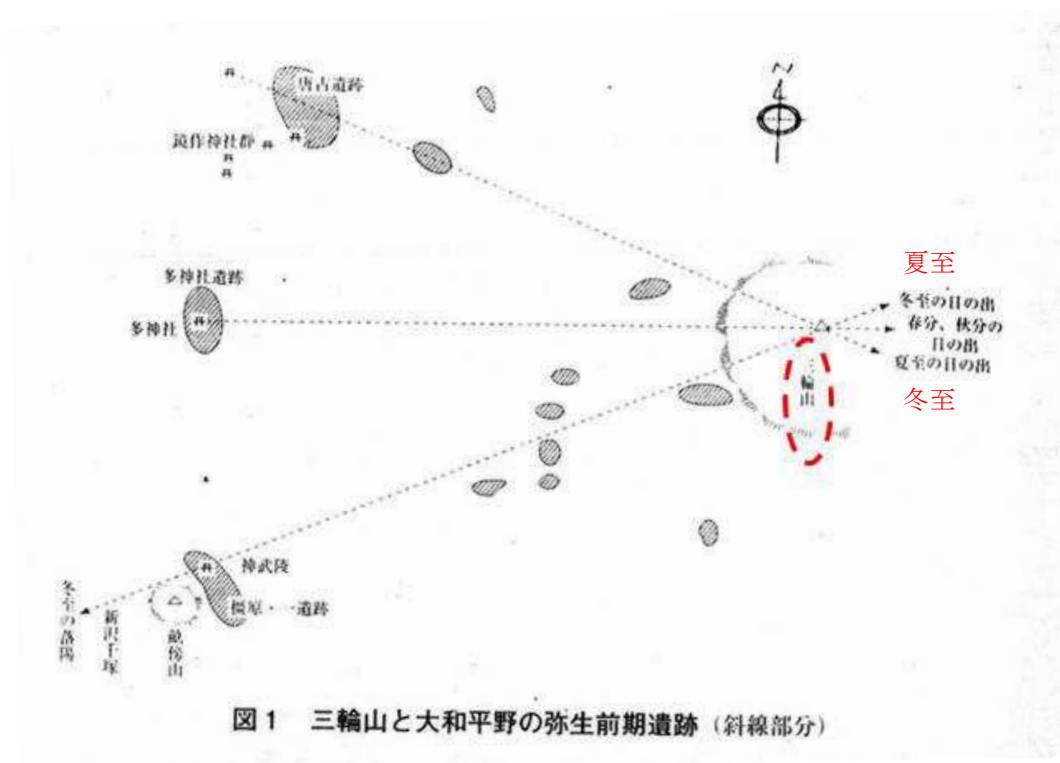
図10 ミツ鳥居の復元想定位置とその祭祀の方角



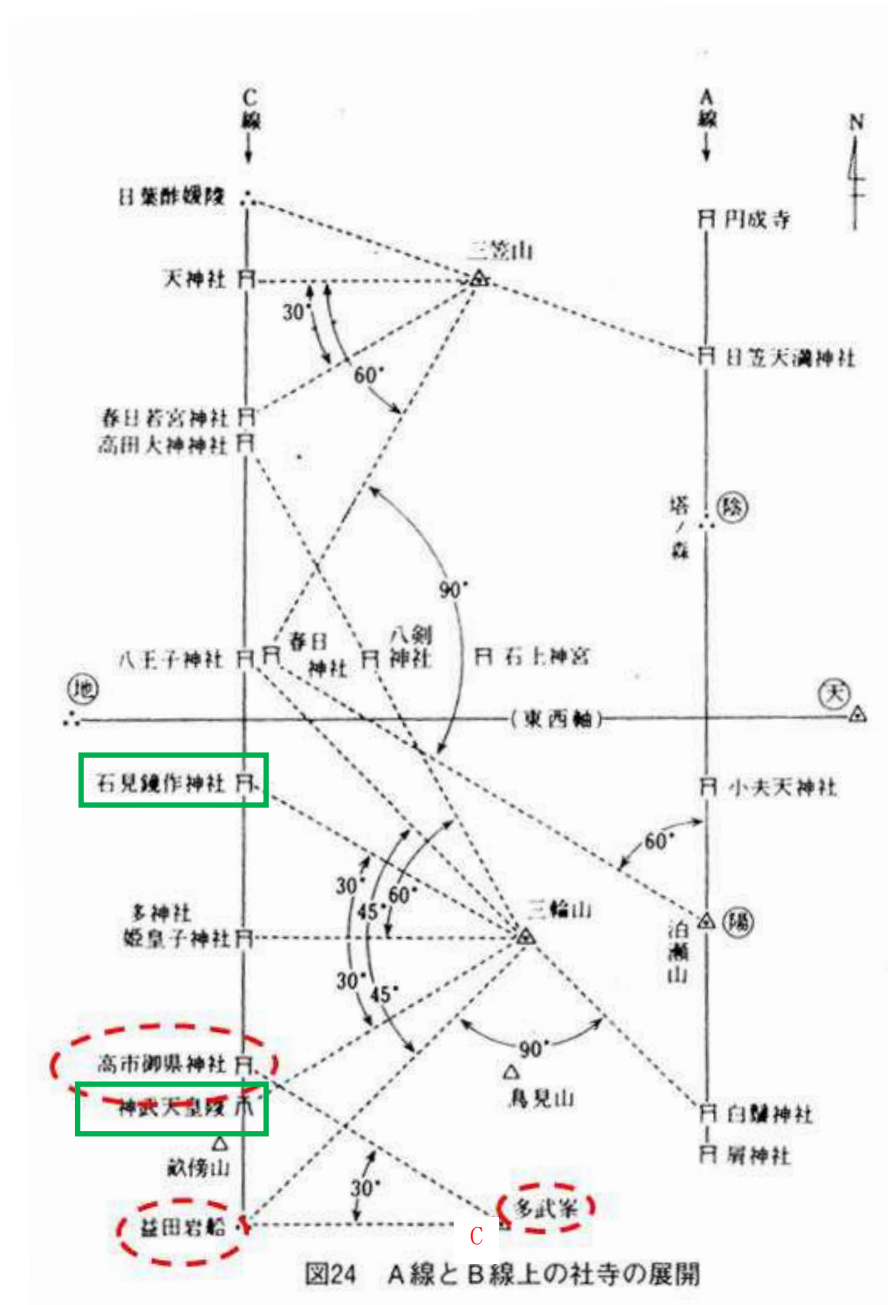
桧原神社鳥居



大神神社鳥居



この図に、更に次の図 24 を合わせれば、三輪山ー多神社の東西ラインに対して、石見鏡作神社と神武天皇陵が対称の位置にあり（八王子神社と岩船も）、この土地では、東西ラインに対して 30 度南東が冬至の、30 度北東が夏至の日の出のラインとなっていることが解る。（この図では“A 線と B 線上の”となっているが、これは“A 線と C 線上の”の誤植である。）このように、三輪山の位置は極めて特異的な位置にあり、形も円錐形であることから、人工の山と推定される。



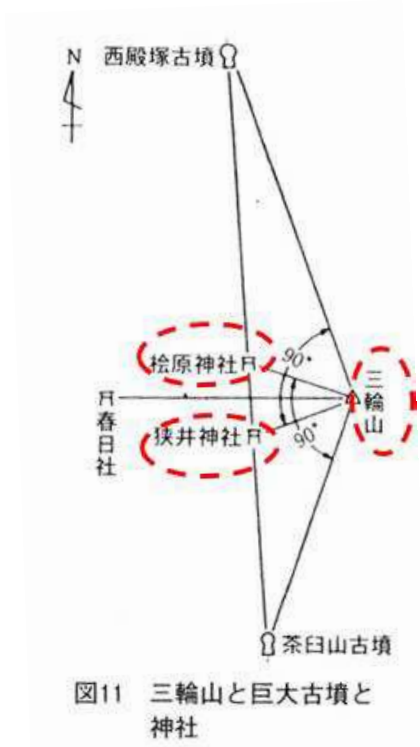
桧原神社の位置は前述の通りだが、三輪下神社三座の大神大物主神社三垂が三ツ鳥居を象徴する。また、“春日”とは“3人の日、太陽神”を暗示し、春分・秋分、夏至、冬至の太陽を象徴している。つまり、三ツ鳥居と春日神社がセットになり、三ツ鳥居を春日神社の位置に置くことによって、太陽神を崇拝していることが暗示されている。しかし、それは根源の天照国照尊ではなく、女神とされた太陽神・天照大神である。

春日神社付近はかつては岩田村と言い、“岩田”は大神神社の“祝田（いわいた）”に由来するとされている。しかし、神社に奉納する稲を育てる田は神田や御戸代（みとしろ）と言い、“祝田”は“斎田（いわいだ）”で、大嘗祭に必要な稲を育てる悠紀田（東あるいは北）と主基田（西あるいは南）のことである。

その春日神社の東に隣接して慶田寺がある。古くは岩田之寺とも呼ばれていたが、ここに祝田があったので、慶（いわい）田の名となったのだろう。しかし、こちら側は三輪山の西側で、主基田に相当するから、東側に悠紀田があるはずで、それが乗田神社である。ここは大己貴神を祭神とする。乗（へい）は禾束（かそく、稲の束）のことで、稲を束ねたものを束（そく）と言い、これが乗である。つまり、乗田神社とは神に奉げる稲束を作る他の社のことで、三輪山西側の祝田と対を成すものである。そうすると、“ヒキタ”は“ユキタ”の転訛であり、祝田は主基に相当する。ならば、その中間の三輪山山頂は、新帝が天神地祇と一夜を過ごして現人神となる大嘗宮だったのである。

この春日神社を真西に延長すると多神社だが、多神社の旧名は春日県（かすがのあがた）の春日宮で、同じ“春日”である。＜日本の真相5＞に記したように、春日氏は和珥氏一族で、共に海部氏一族だから、やはり神祭りを行った特定の氏族を暗示している。

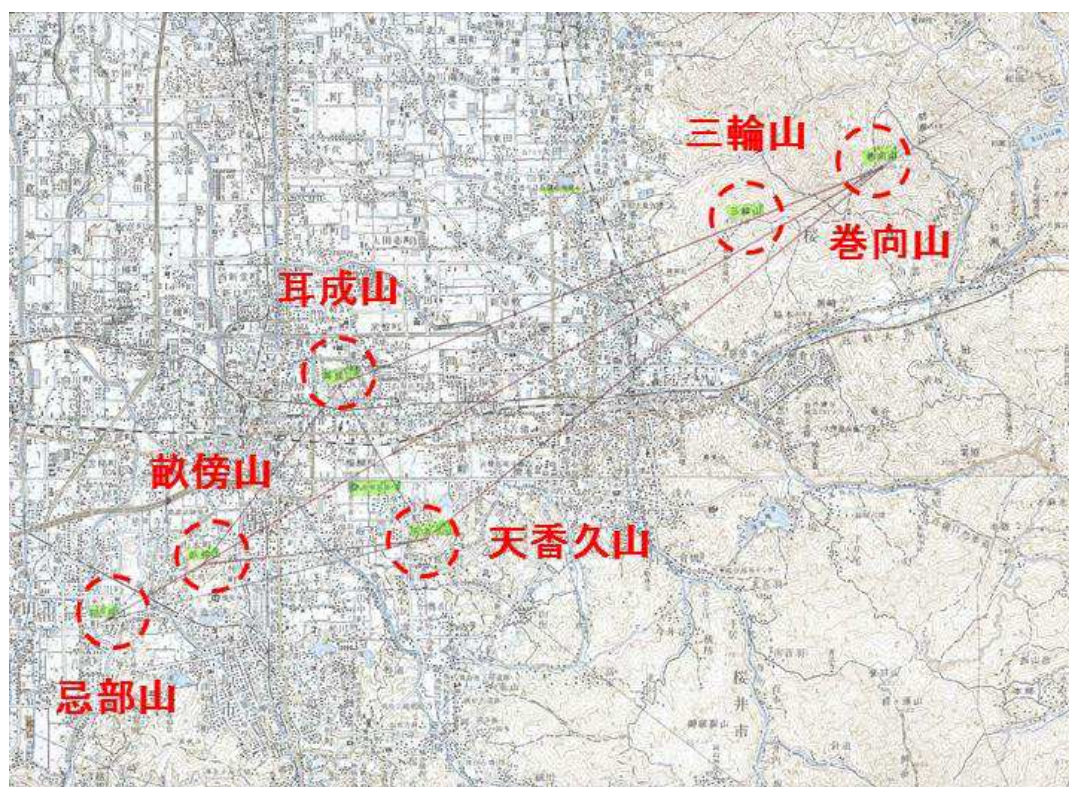
さて、桧原神社と陰陽の対を成すのが狭井神社である。



②に記した西殿塚古墳と茶臼山古墳を三輪山と結び、それぞれのラインに対して90度のライン上に桧原神社と狭井神社は位置し、春日神社から三輪山を望んで等位置の関係にある。桧原神社の祭神は天照大神若御魂神で太陽神の象徴、狭井神社は大神荒魂神（＝大国主命）で、境内には神水が湧き出しているとされる薬井戸（くすりいど）があり、水神の象徴である。これまでの図では、重要な東西ラインに対して北側が陰、南側が陽の象徴だったが、ここでは逆転されおり「合わせ鏡」である。しかし、③の考察からすれば桧原神社は陰であり、④の考察からすれば大物主神は地祇で陰だから、その荒魂は陽となるので、真相としては、春日神社－三輪山のラインに対して北側の桧原神社は陰、南側の狭井神社は陽となる。

⑥三輪山と大和三山

ここで、三輪山が絡んでいる重要なものが、ピラミッドと言われている大和三山である。<http://blogs.yahoo.co.jp/doctor3044/30252629.html> に依ると、三輪山と大和三山の関係は、次のような位置関係にある。



まず、卷向山－三輪山－耳成山ラインに着目すると、これらの山頂は、地図上で完全な直線状に位置している。更に、立体的に見ても、3つの山頂は直線状に並ぶ。すなわち、3つの山頂が見事に直線上に並ぶ。このようなことは自然にはあり得ないので、3つ、あるいは少なくとも2つの山は人工的と言える。

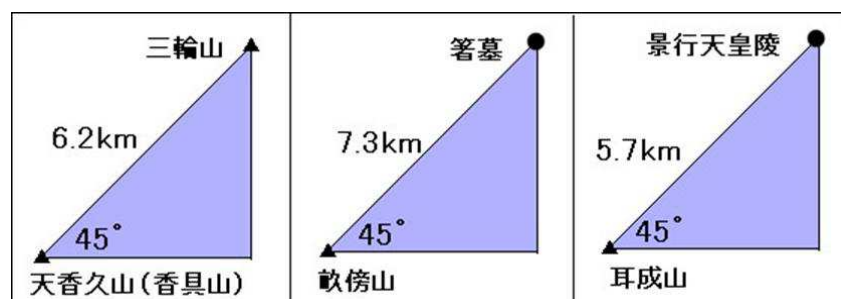
そして、巻向山の尾根にあるダンノダイラは泊瀬山の遥拝所、三輪山は大和朝廷での遥拝所で、共に神山の遥拝所である。また、(4)②に記したように、“ミ”は“神”、“ミミ”は“神々”の象徴となるが、このように 2 つの“神”に関する山と結ばれているからこそ、“神々”を成す山、“ミミ”成山となるのである。

次に、中心線（巻向山－畝傍山－忌部山ライン）に着目する。このライン上には藤原京大極殿跡が位置し、三輪山麓付近まで辿ると、崇神天皇の磯城瑞籬宮跡がある。ここでも、トヨの時代の大王、オトヨノミコトであり、諡号は“ハツクニシラス”で神武天皇と同じで、畝傍山は神武天皇陵に隣接している。そして、“畝傍”は“采日”とも書ける。“采”は采配する意味があり、“畝傍＝采日”ならば“日を采配する”ことになり、①に記した“日知りの王”ということで、“ハツクニシラス”大王に相応しい。

最後に、巻向山－天香具山ラインに着目する。天香具山は“大和の物実”で、王権のある土地の象徴で、ここの土を手にした者が王権（古代では祭祀権と同一）を得る。その山と巻向山が結ばれていることは、それ以前に巻向山に王権があったことを暗示する。

以上のような配置は、偶然に形成されるのではなく、明らかに人工的な配置である。

また、<http://www.geocities.jp/yasuko8787/70925.htm> に依ると、大和三山が特定の場所から 45 度の方向にあるという。



三輪山から南西 45 度方向に岩船があり、そのライン上に天香具山があることは図 16 の通りで、三輪山祭祀構造の基準の 1 つでもある。これから、大和三山の位置は次のように決められたと考えられる。（特に図示はしない。）

- 1) 三輪山－岩船ラインを引く。
- 2) 巻向山－三輪山－耳成山は一直線上にあるから、巻向山－三輪山ラインを引く。
- 3) 耳成山は景行天皇陵から南西 45 度の方向にあるから、景行天皇陵からそのラインを引く。このラインと巻向山－三輪山ラインの交点が耳成山となる。景行天皇陵の位置は、ヤマト祭祀基本構造の泊瀬山－斎槻岳ラインと三輪山－八王子神社ラインの交点として定められる。

- 4) 巻向山－耳成山の長さを半径とし、コンパスの軸を巻向山に置いて円を描き、その円と三輪山－岩船ラインとの交点が天香具山となる。
- 5) 耳成山－天香具山ラインの中点を採り、そこと巻向山を結ぶ。中点の取り方は、耳成山－天香具山を半径とし、コンパスの軸を耳成山、天香具山それぞれに置いて交わった 2 点を結び、それと耳成山－天香具山ラインとの交点が中点である。
- 6) 畝傍山は箸墓から南西 45 度の方向にあるから、箸墓からそのラインを引き、耳成山と天香具山ラインの中点－巻向山ラインとの交点が畝傍山となる。箸墓は八王子山－斎槻岳ラインと泊瀬山を貫く東西ライン（太陽の道）との交点として定められる。

畝傍山は、C 線からわずかに西にずれているが、それはこのように作図されているからである。さすがに、すべての山が人工ではない以上、こうなってしまう。言い換えれば、いくつかの山は、奈良盆地に作図するために人工的に造られた、ということである。それは、都介野岳と泊瀬山だけではない。三輪山も八王子神社－岩船を底辺とした正確な直角二等辺三角形を形成し、都介野岳や泊瀬山と同じく円錐形の山であり、⑤にも記したように極めて特異的な位置にあり、人工の山である。

おそらく、斎槻岳と巻向山は最初からあった自然の山である。それを基準に、都介野岳、泊瀬山、三輪山を造ったのであろう。2 つの自然の山は、斎槻岳は卑弥呼の邪馬台国の都介野岳を、巻向山はトヨの大邪馬台国の泊瀬山を影響する山となっていることから、そう考えられる。また、巻向山と三輪山（と耳成山）の山頂が見事に直線上に並ぶことからそう言える。

そして、三輪山の西から見て、春分・秋分や夏至、冬至の日の出の方向に、都介野岳や泊瀬山のような見えない隠国の神山が無いのは、三輪山信仰は都介野岳や泊瀬山信仰の氏族とは異なる氏族＝秦氏のものである、という暗示である。

大和三山についてはこのようになるが、巻向山－畝傍山の延長線上に忌部山がある。<http://www.geocities.jp/yasuko8787/kyoui2.htm> では太田明氏の説を説明しており、極めて納得できるものなので、それを紹介する。太田氏は綏靖紀の内容を基に、“弦を引く弓の図”を考察している。

“神武天皇には、日向で娶った妃アヒラヒメとの間に生まれた長子・手研耳命（タギシミミノミコト）がいる。更に、皇后・伊須気余理比売命（イスケヨリヒメノミコト）が産んだ 3 人の子、日子八井命（ヒコヤイノミコト、古事記のみの登場）、神八井耳命、神沼河耳命（カンヌナカワミミノミコト、綏靖天皇）がいる。

神武天皇が崩御すると、手研耳命は伊須気余理比売命と結婚し、3 人の弟を殺そうと謀った。彼らの母である伊須気余理比売命は心配になって、歌に託してそのことを我が子たちに知らせた。

綏靖紀では、庶兄の密計を知った神八井耳命と神沼河耳命が先手を取って、

神武天皇が狭井川（奈良県桜井市）のほとりの伊須気余理比売命の家で一夜を共にして生まれた三皇子が上記の皇子たちである。日子八井命は日本書紀には見られず、新撰姓氏録では神八井耳命の子とされている。この構図は、彦火明命と類似している。

Bから弦（直線②）に垂線を引いて矢とする。すると、矢の先に手研耳命が寝ていた大室に通じる西室・東室がある。また、弓形の両端で綏靖陵と綏靖の葛城高岡の宮の所在地と言われる御所市森脇が向き合う。

伊須気余理比売命は大物主神の娘である。＜日本神話＞で“朱塗り矢伝説（古事記版）”を記したが、そこを振り返る。

“三島湊咋（ミシマノミゾクヒ）という男に、勢夜陀多良比売（セヤダタラヒメ）というたいそう美しい娘があった。ある日のこと、比売が厠（川の上に板を渡して作ってある天然水洗トイレ）で大きい方の用を足していると、突然、何かが比売のホトに突き当たった。驚き、立ち上がって走り出て見ると、“真っ赤な丹塗矢”であった。比売はそれを持ち帰り、床の間に置いた。すると、夜になって矢が美しい男に変わった。実は、その矢は三輪山に住む大物主神の変身だったのである。神は比売を一目見て好きになってしまい、矢に変身して川を流れてきたのである。大物主神と勢夜陀多良比売は契りを結び、2人の間に生まれたのが富登多多良伊須須岐比売（ホトタタライススギヒメ）であり、後に神武天皇の皇后となった。”

このホト（女陰）タタライススギヒメが後に改名して、比売多多良伊須気余理比売（ヒメタタライスケヨリヒメ）＝伊須気余理比売命となったのである。

ならば、三輪山の方から神武天皇陵と畝傍山に向かっている矢が大物主神の象徴であり、その矢が突いたのが勢夜陀多良比売のホトで、そこから生まれたのが伊須気余理比売命となるから、忌部山は“陰部山”のことで、勢夜陀多良比売と伊須気余理比売命の両方を暗示していると考えられる。

よって、太田氏の説は正しいと考えられ、大和三山と忌部山はセットなのである。

ただし、太田氏は大和三山の作図方法を知らないようで、故に、氏の説では忌部山の位置の決め方が解りにくい。忌部山の位置は大和三山の位置が決まれば簡単で、岩船にコンパスの軸足を置いて岩船－畝傍山を半径とする円を描き、巻向山－畝傍山のラインとの交点が忌部山の位置となる。

(6) 三笠山の祭祀

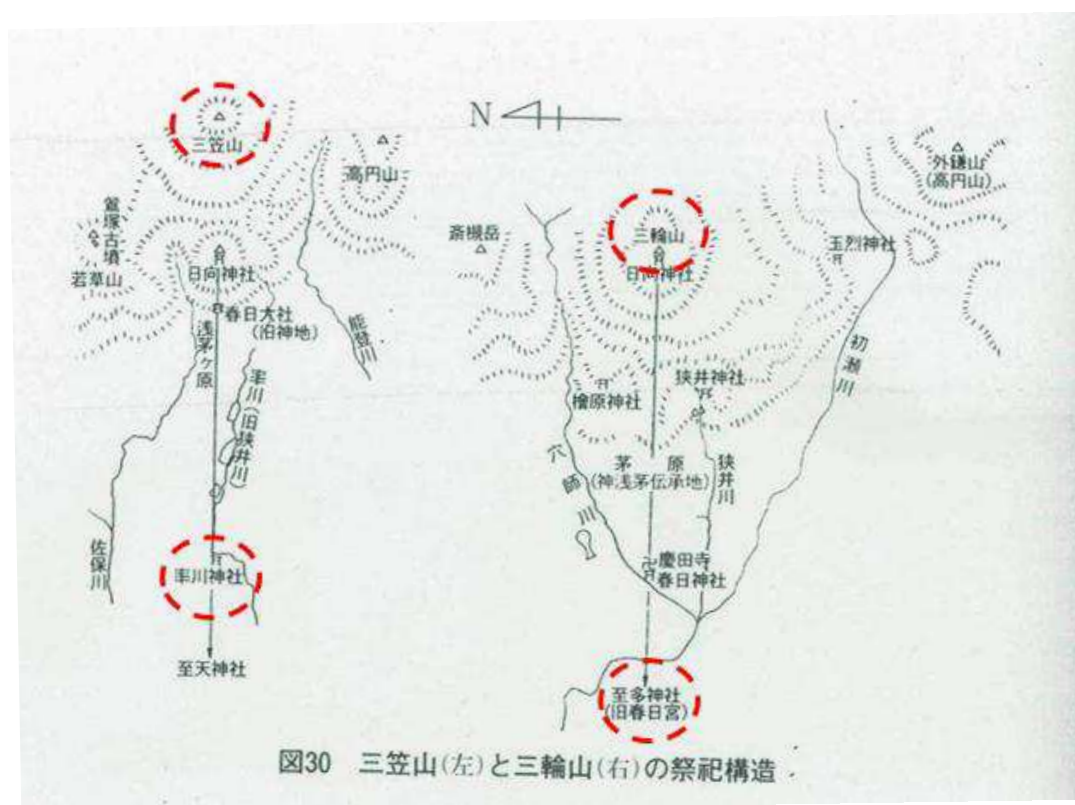
ここまで見てきたように、三輪山での祭祀は、卑弥呼の邪馬台国（都介野岳）に始まってトヨの大邪馬台国（泊瀬山）で完成し、それが巧妙に秦氏の大和朝廷へと受け継がれたものである。そして、この大和朝廷の祭祀は平城京へと受け継がれ、最終的には平安京へと至る。ここでは、同じ奈良盆地に位置し、完全に秦氏の都となった平城京での祭祀と大和朝廷での祭祀を比較する。すなわち、三笠山と三輪山の祭祀である。

①三笠山の意味

三輪山と三笠山は共に天を表す数字“三”を冠し、“天の山”である。三輪山山頂の高宮神社は元は日向神社と言い、三笠山山頂の浮雲神社もかつては日向神社だった。その西の麓には、茅原（三輪山）と浅茅ヶ原（三笠山）がある。崇神紀 7 年の条には、天皇が神浅茅原に於いて八十万の神々の神集（かみつどへ）を行ったとされ、これに由来する。このように、地名や神社名は類似している。

また、三輪山の真西には大神神社の故地と考えられる春日神社があるが、三笠山の真西には大神神社の摂社で三輪の神とされる狭井大神と、その娘のヒメタタライスズヒメノミコト、その母の玉櫛姫命の三座を祀る率川神社がある。

大神氏家牒には、この社（率川神社）のある春日率川邑を狭井川邑としており、“狭井”を「合わせ鏡」で反転させて“いさ”としている。狭井川は三輪山を水源とする聖なる川であり、率川は三笠山を水源とする聖流で、三輪山を挟んで南北に山があり、三笠山も同様である。このように、地形的にも類似している。



狭井の神は大神（大物主神）の荒魂とされ、率川神社の狭井大神も同様である。その亦名が、前述の狭井川（奈良県桜井市）のほとりに住んでいた伊須気余理比売命の父、三島湊咋である。ならば、三島湊咋は大物主神の荒魂で、本質は同一、ということである。道理で、勢夜陀多良比売と娘とされる富登多多良伊須須岐比売は共に“タタラヒメ”なのである。つまり、大物主神が太陽神の代わりで和魂なら、その荒魂は水神となるわけで、象徴は陰である。陰だから、象徴としては女性的側面が強調され、勢夜陀多良比売は水（川）に関わり、露骨に“陰の部分＝ホト”と言っているのである。

この“狭井”は、実は有名な寺の名称にも隠されている。奈良市の西郊には秋篠寺、西大寺、唐招提寺、薬師寺などの古刹があるが、この付近はかつて菅原＝清々しい野原と言われ、東の春日野と対応する清浄な地域だった。それを区画するのが秋篠川で、かつては土地の人たちは“サイ川”と呼んだ。つまり、

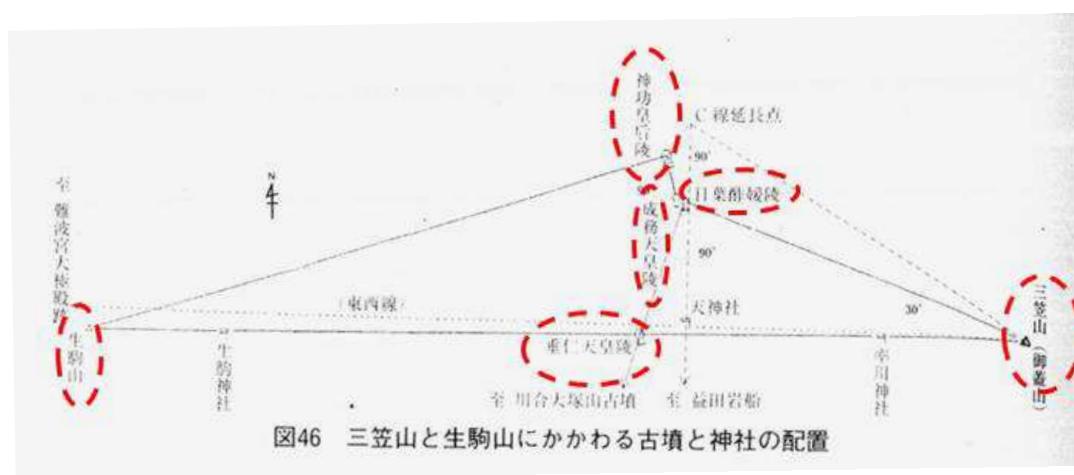
正常な地域を区画する川なので、聖なる川、狭井川と同意なのである。(ならば、秋篠宮殿下の宮号も、将来的な意味が込められていたのだろう。)

このように、三笠山周辺は三輪山と類似の構造となっている。そして、(5)②に記したように、陽を象徴する泊瀬山―東殿塚古墳（後円部）―春日社のラインは春日社で90度曲げられて、後の平城京の神山となる三笠山に達しているから、大邪馬台国に於ける泊瀬山の太陽神影向の性質をそのまま三笠山に遷すという意図を暗示している。そして、春日社から三笠山に遷しているからこそ、現在、三笠山の西にあって三笠山を神山として拝している神社が春日大社となる。しかも、泊瀬山は東殿塚古墳から見て冬至の日の出の方向に位置し、冬至は太陽（神）の復活と見なされるから、平城京に於いても“不老不死”の概念が根本を貫いているわけである。

そして、三輪山から昇る太陽が二上山に沈むように、三笠山から昇る太陽は、生駒山に沈む。

②日葉酢姫陵

三笠山―生駒山の東西ラインよりも北側には日葉酢姫陵、成務天皇陵、神功皇后陵という最大級の古墳が並んでおり、更に、東西ライン上には垂仁天皇陵もある。成務天皇陵と日葉酢姫陵はほぼ全長 218 メートルで、神功皇后陵は箸墓とほぼ同じの 275 メートルである。平城京に都が置かれたのは 710 年だが、これは何を意味するのか。



まず着目するのは、都介野岳を起点としたヤマト祭祀基本構造に含まれ、岩船と結ぶ南北ラインで、西の端のラインを形成する日葉酢姫陵である。＜日本の真相 5＞に記したように、日葉酢姫は卑弥呼が投影された海部氏の巫女であり、卑弥呼、トヨに次いで重要な女性である。その日葉酢姫陵は八尾鏡作神社と同様に、三笠山と結んだラインを90度曲げ、日の出の三笠山と落日の生駒山を結

んだラインとの交点に垂仁天皇陵の後円部が位置している。

垂仁天皇は熱田神宮の祭神でもある建稲種命に相当し、“稲種”は食の根源でもあるから豊受大神の象徴である。また、籠神社が鎮座する（丹後の）宮津を暗示する宮簀姫命と共に祀られており、後円部は陽で太陽（天）を象徴するから、垂仁天皇の後円部は天照国照尊を暗示している。垂仁天皇陵は古来、不老不死の蓬莱山の別名があることから、そう言える。

日葉酢姫陵は天照国照尊を祀る八尾鏡作神社と同様な作用をしているから、天照国照尊を祀る卑弥呼が投影された海部氏の巫女を暗示している。

よって、三笠山－日葉酢姫－垂仁天皇陵後円部は天照国照尊を祀った卑弥呼を暗示する。更に、三笠山は泊瀬山－東殿塚古墳（後円部）－春日社のラインで結ばれ、トヨの大邪馬台国に於ける泊瀬山の太陽神影向の性質をそのまま三笠山に遷すという意図を暗示しているから、卑弥呼と共にトヨも暗示しているわけである。

この日葉酢姫陵には、他の古墳には見られない特徴がある。殉死を廃止して形象埴輪を陵に立てるようになった最初の陵ということである。その埴輪は盾形と家形が南北に1個で、他は蓋（きぬがさ）形のものが中央に1個、その東側と西側に各々4個、計9個が置かれているという。それぞれが高さ約1.5メートル、幅約2メートルという巨大なものである。蓋は“オオガサ”と言い、朝儀や祭会の時に貴人の頭上を高く覆う笠、天蓋のことで、これを“キヌガサ”と読むのは、表と裏を絹で覆うからである。“青丹よし”でも記したように、このような笠は天と地を象徴する大きな笠だから、日葉酢姫陵は天と地の合一を象徴するものである。9個の“9”は最大の陽数で太陽神を象徴し、八角形の“8”は横向きにすると“∞”で“不老不死”を象徴するから、天を象徴する蓋がほぼ八角形に配置されていることは、太陽神の不老不死を暗示する。

そうすると、その南端の岩船は(3)に記したように、大地の神が出現する磐座で、天神の依り代である神籬を立てたとされるから、万物の生成発展を象徴化したものとして、日葉酢姫陵と対応する。

成務天皇陵は日葉酢姫陵とほぼ同じ大きさで、隣接している。しかも、成務陵はかなり落差のある斜面に、相当無理をして建造されているので、必然的な理由があるはずである。

成務天皇はちょうど日葉酢姫と同時代の大王、丹波大矢田彦命に相当するから隣接しているわけだが、それだけではない。前述の図46から解るように、三笠山－生駒山のラインに対して、三笠山から30度の方向にラインを引き、日葉酢姫陵－岩船の南北ラインと交差した点で90度曲げると神功皇后陵に達する。交差した点から三笠山の方角は冬至の日の出の方角で、不老不死を象徴する。また、日葉酢姫陵と隣接する成務天皇陵から中心線を伸ばすと神功皇后陵の中心線と重なる。神功皇后は、言うまでもなく卑弥呼を暗示しており、成務天皇＝丹波大矢田彦命と日葉酢姫は同時代である。つまり、成務天皇を介することにより、日葉酢姫は卑弥呼が投影された海部氏の巫女であることを暗示しているわけである。そして、成務天皇陵－神功皇后陵のラインを90度曲げると生駒

山に達することは、日の出の三輪山と落日の二上山という構造を、日の出の三笠山と落日の生駒山という構造に遷しているということを暗示する。

なお、日葉酢姫陵と垂仁天皇陵の後円部から前方部を貫いた中心線を延長すると、多武峰に至る。多武峰は神に幣を手向けて祈りを奉げる“手向けの峰”の意味で、ここから岩船も切り出された。

ヤマト祭祀基本構造は人工の山である都介野岳（と泊瀬山）を起点とし、山麓と岩船を基準にして造られている。その岩船は多武峰由来だから、都介野岳、泊瀬山、多武峰を基準としている、と言っても良い。そして、多武峰が自然の山だとしたら、そこを起点として人工の山、都介野岳と泊瀬山を配し、更に三輪山を配することによって祭祀構造を創り上げ、それを三笠山まで持ってきた、ということである。ならば、三笠山も人工の山の可能性がある。

③生駒山

このような説明により、それなりに納得できるのだが、三輪山は“三”で天を、二上山は“二”で地を象徴し、両者で天地合一となる。また、三笠山の“三”も“笠”も天を象徴するが、生駒山には象徴的な数字などが無い。では、生駒山とは何なのか。

<http://www.ikomataisha.com/yurai.html> に依ると、生駒山には往馬（いこま）大社があり、祭神は次の七柱である。

- ・生駒山の神である伊古麻都比古神（イコマツヒコノカミ）
亦名：産土大神（ウブスナノオオカミ）
- ・伊古麻都比賣神（イコマツヒメノカミ）
亦名：産土大神
- ・気長足比賣命（オキナガタラシヒメノミコト、神功皇后）
- ・足仲津比古命（タラシナカツヒコノミコト、仲哀天皇）
- ・譽田別命（ホンダワケノミコト、応神天皇）
- ・葛城高額姫命（カツラギタカヌカヒメノミコト、神功皇后の母）
- ・息長宿禰王命（オキナガスクネオウノミコト、神功皇后の父）

伊古麻都比古神と伊古麻都比賣神は古代より火を司る神として信仰されている。大嘗祭で用いられる浄火を起こす道具である火鑽木（ひきりぎ）は、代々、この社が献上することとなっており、今上天皇の大嘗祭でも、この社の火鑽木が使用された。そして、昭和と平成の大嘗祭の“斎田點定（てんてい）の儀”にも御神木の上溝桜が使用された。（斎田點定：斎田を亀ト（きぼく）により定める儀式。）

つまり、生駒山は火の神の象徴であり、太陽が昼間を照らす“日”ならば、同じ“ヒ”の読みでも“火”は闇を照らすから、生駒山は日の出の三笠山に対する落日の象徴となる。

また、この山にある神社は大社を名乗るほどの格であり、それが“往馬”という字を当てられているから、元々は“往馬山”なのだろう。現在、神社には

絵馬を奉納するが、かつては実際に馬を捧げ、それがいつしか絵馬に変わった。この、馬を神殿に捧げる風習はフェニキア由来である。ならば、海部氏と共に渡来した一族由来である。何よりも、祭神の産土大神は“大神”という高い格であり、“土”は外宮の土宮と同義で、主エンキを暗示する。また、譽田別命を除いて、神功皇后＝卑弥呼に関わる海部氏系の人物ばかりである。そして、火＝日を祀り、祭神名が“土”を冠するならば、それは(5)②に記した荒神社と同義である。(土祖神＝産土大神。)

よって、生駒山＝往馬山も本来は天神系なのだろうが、中核の天神系は海部氏で“日”だから、フェニキア系は闇を照らす“火”としているのだろう。そして、フェニキアの語源であるフェニックスは“火の鳥”である。

ここで、火の神と言えは愛宕神社である。Wikipediaに依れば、以下の神々を祭神としている。

- ・本殿

イザナギ、埴山姫神（ハニヤマヒメノカミ）、天熊人命（アメノクマヒトノミコト）、稚産霊神（ワクムスビノカミ）、豊受姫命、若宮雷神、迦遇槌命（カグツチノミコト）、破无神（ハムシノカミ）。

- ・奥宮

大国主命はじめ十六柱。

埴山姫神は、古事記では火之迦具土神（ホノカグツチノカミ）を産んで死ぬ間際のイザナミの大便から波邇夜須毘古神（ハニヤスヒコノカミ）と波邇夜須毘売神（ハニヤスヒメノカミ）の二柱が誕生し、この二柱を一柱の神名としたのが埴安神であるとされる。(Wikipedia 参照。) いずれにしろ、“埴”は土器の埴輪を連想させるから、火神由来である。

天熊人命は日本書紀に登場し、月読尊が剣で切ってしまった保食神のところへ天照大神が差し向けた神で、天熊人命が行って見てみると、切られた保食神からは穀物や繭など、人間が生きて行くのに必要なものが生じた。しかし、古事記ではスサノオが大気津比売神（オオゲツヒメノカミ）を殺したことになっているから、天熊人命＝スサノオである。そして、“熊”は<日本の真相 5>に記したように、海部氏を暗示する。

稚産霊神は、日本書紀では火の神、軻遇突智神（カグツチノカミ＝火之迦具土神）と埴山姫神の間に生まれた子。頭に蚕と桑が、臍の中に五穀が生じたという。古事記ではイザナギの子で、和久産巢日神（ワクムスビノカミ）とされている。(http://kotobank.jp/word/%E7%A8%9A%E7%94%A3%E9%9C%8A%E7%A5%9E 参照。) そして、外宮の豊受大神の親ともされているから海部氏系である。

豊受姫神は外宮の豊受大神とされており、海部氏系である。

若宮雷神の“若宮”は“若御魂”に通じ、天照国照尊を祀った卑弥呼の暗示であり、雷神と言えは、海部氏と同族である上賀茂神社の祭神、賀茂別雷神（カモワケイカヅチノカミ）である。また、奥の院は現在“若宮社”と言い、これも“若宮”である。(http://kyoto-atago.jp/images/yuishogaki2.htm 参照。)

迦遇槌命は火之迦具土神のことである。

破无神は不明だが、无の字は“無”と同字で、存在しないことを意味する。

奥宮の大国主命は言うまでもなくスサノオの子孫である。

いずれも“火＝日”の神であり、海部氏系の暗示である。そして、火と言え
ば“火の鳥、不死鳥フェニックス”であり、フェニキア由来である。

このように、表向き海部氏を隠し、秦氏が祭祀を乗っ取ったかのように見え
てはいるものの、本来の神祭りは特定の氏族にしか許されないから、実はその
氏族の神々を勧請し、その氏族を裏切ってはいるものの、その氏族の血統に祀
らせているわけである。

この愛宕神社の元とされ、“愛宕の本（もと）宮、本社”と言われるのが、愛
宕山の南西にある愛宕神社である。ここではホノカグツチノカミ、イザナミ、
オオクニヌシが祀られている。

(<http://everkyoto.web.fc2.com/report1012.html> 参照。)

ここは阿多古神社とも書かれ、牛松山の麓の保津町から千歳町へと続く歴史
街道にある。

(<http://www.eonet.ne.jp/~enjoykameoka/page/densetu/densetu9.htm> 参照。)

この牛松山は“丹波富士”の異名を持ち、祭りに牛の生贄を捧げていた牛祭
りがあり、それが転じて“牛松”になった、と伝えられている。

(http://www.wombat.zaq.ne.jp/yama_hai2010/20091206.html 参照。)

牛を生贄として捧げる風習はユダヤやフェニキアにあり、それを日本国内で
も行ってきたのが物部氏である。その風習は、“正しいユダヤ教”である原始キ
リスト教から見れば、エルサレムの神殿のみで行われるべきものだから、秦氏
によって禁止された。それでも隠れて行う者たちがいたから、“牛に勿れ”と言
われた部族という意味で“物部”と呼ばれるようになり、ある者は差別され、
いわゆる“部落”が形成されるようになったわけである。

海部氏の領地だった太秦の広隆寺で行われる牛追い祭りは、牛に扮した人物
をひたすら追いやる。＜日本の真相 4＞では、偶像崇拝の対象たる金の牡牛、エ
ンリル系、シヴァ＝イナンナ＝牛頭天王＝スサノオと推察したが、それよりも、
牛を生贄として捧げていたことを暗示していると考えた方がすっきりしている。
故に、愛宕の本宮、その分社の愛宕神社は海部氏系であり、生贄を焼き尽くす
火の神なのである。

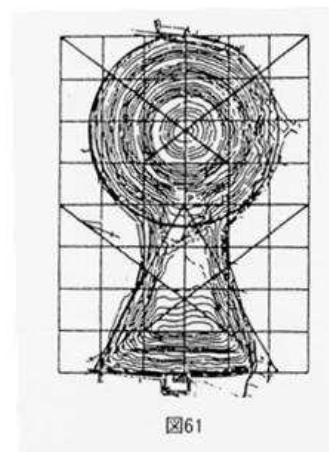
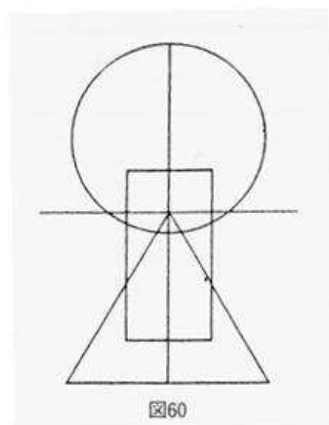
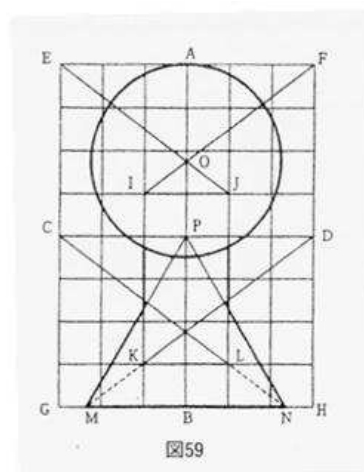
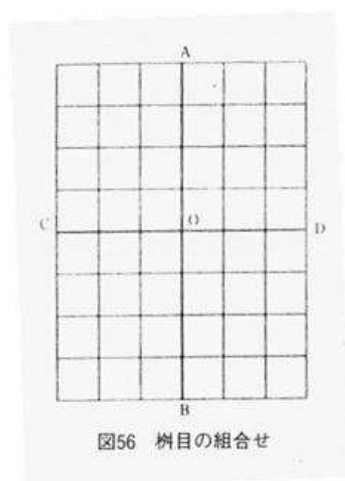
なお、生贄の根源はシュメールにあるが、シュメールでは普段、仔羊や山羊
を生贄として捧げていた。しかし、特別に大神に祈願する場合のみ、牛が捧げ
られた。（小林登志子著、シュメールー人類最古の文明（中公新書）参照。）すな
わち、牛を生贄として捧げる根源はシュメールであり、牛の燔祭を行っていた
物部氏は、羊が日本にいなかったから牛を捧げたのではなく、シュメールの
「神々」を意識してのことだろう。

原始キリスト教からすれば、唯一絶対神が正しい解釈であり、多神教は偶像
崇拝に相当する。前述の燔祭の風習はエルサレムの神殿のみで行われるべきも
の、という理由もあるだろうが、シュメールを根源とした多神教的崇拝を封印

するため、秦氏は物部氏を抑え込んだ、とも考えられる。

④古墳の造成方法

最後に、古墳の造成方法を簡単に記す。基本は、 8×6 個の正方形で組み合わされた長方形を、上（＝天）と下（地）に分ける点である。これの基は 4×3 であり、これを長さで見れば、対角線は 5 の長さとなる。そこに円と三角形、四角形を組み合わせるのだが、それぞれの大きさは古墳毎に依る。



古墳はこのように設計されているのだが、古墳時代のほぼ最後の前方後円墳と言われているのが、奈良県橿原にある奈良県最大の前方後円墳、見瀬丸山（みせまるやま）古墳である。この古墳は橿原市見瀬町、五条野町、大軽町にまたがった地区に存在し、6世紀後半に築造されたと推定されており、欽明天皇と堅塩媛の陵墓であるとの説もあるが、定かではない。（Wikipedia 参照。）

2012 年 7 月 8 日に放映された NHK の「NHK スペシャル 知られざる大英博物

館第3集「日本巨大古墳の謎」に依ると、特徴的なことは、古墳時代のほぼ最後の前方後円墳であること以外に、石室が横穴式ということである。それ以前は後円部の上から石棺を入れる縦穴式だったが、この古墳は横穴式なのである。

“横穴”と言えば、イエスが葬られた横穴式の洞窟が思い浮かぶ。おそらく、この古墳は、それを意識しているに違いない。

また、この古墳の棺を納める玄室は後円部の中心からずれている。それ以前の古墳では、後円部の中心に玄室が配置するように設計されていた。古墳が巨大になるほど、横穴式だと玄室を後円部中心に持ってくるのが困難となる。そして、この古墳をほぼ最後に、巨大な前方後円墳が造られなくなったのは、そのような横穴式の限界のためである。

前方後円墳は大陸や半島の墳墓を基礎として、日本風にアレンジされたものであるが、それを更に原始キリスト教の墳墓にしようとしたが、失敗に終わったのである。

3：フェニキア

これまで見てきたように、古代日本にはフェニキアの影響が明らかである。しかし、フェニキアについては不明な部分が多く、今までまとめた著書はなかったが、創元社からグレン・E・マーコウ著、片山陽子訳「フェニキア人」が刊行されたので、その内容をまとめる。＊が私見である。

(1) フェニキアの諸都市

- ・ビュブロス
は海岸の町トリポリスを経由して内陸への通路を使っており、BC2千年紀の初めには、エジプトを相手としたメソポタミア貿易の大きな玄関口となっていた。

- ・ビュブロスはフェニキア海岸の主要都市の中で、青銅器時代初期からBC1千年紀まで切れ目無く人が住んでいたことが解っている唯一の都市であり、ウガリトと並んで地中海東岸最大の商都だった。

- ・フェニキア本土の四大都市はテュロス、シドン、ビュブロス、アルワドである。

- ・聖書に於けるシドン人とは、およそカナン人あるいはフェニキア人の総称である。

- ・ヒッタイト時代にはシミュラ、ビュブロス、アルワドといったフェニキア北部の商都が利益を得ていた。

- ・ダンにはイスラエルのアシェル族がいたが、テュロスとの密接な結びつきがあった。

- ・リビア系フェニキア人（昔のカルタゴ＝現在のリビアの土地を植民地支配したフェニキア人）をポエニ人と言う。ポエニの産業は造船、兵器、漁業である。

- ・アラム人は西セム系遊牧民の混合集団である。

＊フェニキアとは、現在のシリアやレバノン付近である。ビュブロスとは神々の真相 5>でイエスの真相を考察した際に登場した、セム族の女神が祀られていた最古の古代都市である。ここは古代シリアの港町で、旧約ではゲバルと呼ばれ、現在のジュバイルである。パピルス意味する古代ギリシャ語 “Byblos” に由来し、聖書の英語 “bible” は、この都市に因んだものである。

ビュブロスの王たちは、自分たちで統治できるようになるまでは、女神から命令を受けていた。王は自分に祝福が与えられることを、そして末永くビュブロスの王であることを、女神イナンナに祈願した。亦名はマリであり、これが転じて “マリア” となる。

マリはまた、ユーフラテス川中流の西岸にあった古代シュメール及びアムル人の都市国家であり、マリの最高神は西セム系の穀物神で嵐の神ダゴン（イシュクル）で、ダゴンに捧げられた神殿があったほか、豊穡の女神イシュタル（イナンナ）に捧げられた神殿、太陽神シャマシュ（ウツ）に捧げられた神殿もあり、シャマシュはすべてを見通す全能の神として知られていた。故に、ウツが天照国照尊であっても不思議はない。

(2) 文化

- ・フェニキア語は北西セム語群カナン語グループの中では最も発達した言語で、後のアルファベットの発祥言語である。フェニキア語は子音字だけで綴るシステムで、母音を表す文字が無かった。最初は縦書きにも横書きにもされたが、やがて横書きが主流となり、読み書きの方向は右から左だった。

＊読み書きの方向は右から左なのは、かつての日本と同じである。

- ・エジプトの外交文書であるアマルナ文書に依ると、テュロス、シドン、ベイルートといったフェニキア南部の都市はいずれも王家や議会、商船団を持ち、発達していた。

- ・フェニキア人は海のエンジニアとして古代から評判が高く、商業都市はすべて港が中心だった。そして、フェニキア人の軍隊と言えは海軍であり、その軍船は速さと俊敏さで抜きん出していた。

- ・フェニキア人はかなり南まで航海しており、エジプト王ネコ（BC610－BC595）の命によるアフリカ周航に成功していた。

- ・BC13 世紀から 12 世紀に掛けて、“海の民” と称される外国人の侵入があった。しかし、海岸沿いのどの都市についても、大きな破壊や崩壊の跡は示されていない。

ない。

- ・キュプロスと同様、アシュケロンからアッコに至るパレスチナ沿岸諸都市も、“海の民”の侵入の跡、BC12 世紀後半に急速に発展している。キュプロス島の“キュプロス”とは、古代ギリシャ語で“銅”という意味である。

*フェニキア人は海人族だが、以前に“海の民”による侵入を受け、その時点から急速に発展している。ならば、この“海の民”は古代先進文化、シュメールの末裔ではないのか？そうすると、海部宮司がシュメールを重視しているのも、より納得できる。

- ・エジプトが古くからビュブロスに関心を持っていたのは、レヴァントの木材が欲しかったからである。フェニキアは何よりも杉の取引を大事にしてきた。

- ・テュロスの神殿はソロモン王の興味をかきたて、フェニキアのエンジニアに目を付けた。旧約（列王記）では、フェニキア人は青銅で祭具を製作することや建物内部の装飾など、特定の仕事を請け負っている。ソロモンがフェニキア人に頼んだ2本の青銅の柱、ヤキンとボアズは、ヒラム王がテュロスのバアル・シャメム神殿に建てた記念碑的な一対が手本だったのかもしれない。

- ・ソロモンの神殿建設は、テュロスと新興のイスラエル連合王国との通商協定の産物だった。ソロモンはテュロスに木材と専門技術（大工仕事、石積み、青銅工芸など）の提供を頼み、その見返りに、毎年かなりの量の小麦とオリーブオイルを提供し、更に銀で支払いを補った。つまり、イスラエルはテュロスの商業経験と技術的ノウハウの恩恵を受けた。そして、テュロスとイスラエルの関係は王家同士の婚姻によって更新され、強化された。分裂後のイスラエル王国の新しい首都はサマリアだった。なお、そのイスラエル連合には、フェニキア南部の後背地、テュロスやシドンなどの境界線まで含まれていた。

- ・フェニキアから様々な国に渡った“渡りの職人”が古代社会に重要な役割を果たした。

- ・豪華な象牙細工は、フェニキアのお家芸とも言える特産品で、職人は同業組合ギルドのメンバーだった。

- ・フェニキアの金細工師の技術と名声は、旧約の中では不動のものだった。フェニキアの特徴として、装飾された金属鉢などの中央には必ず円形の部分、メダリオンがあり、ロゼッタか物語の一場面が描かれている。

*ソロモンの神殿は、材料的にも人材的にもフェニキア人に依るものだった。聖書を絶対視する者はユダヤ人の技術だと勘違いしている。ならば、日本の職人技の凄さも、フェニキアに由来するものだろう。そして、フェニキアとイス

ラエル（10 王国）の関係は、王家同士の婚姻によって強化されたのである。

- ・紫の衣服はフェニキアの特産品であり、アクキ貝という貝から抽出される色素（テュリアンブルー、テュロス紫）が原料だった。

- ＊イエスが纏わされた外套も紫で、皇室に於いても、最高の色は濃い紫である。

- ・フェニキアのガラスは古代世界で持て囃された。

- ＊フェニキア人はイタリア半島にも渡っているが、フェニキアに因んでヴェネチアと名付けた。その証拠に、ヴェネチアにはフェニーチェ劇場があり、これはフェニックス＝フェニキアを意味する。

(3) 宗教

- ・フェニキアの宗教の世界に於いては、最高の社会的地位にある女性は最高の地位に就くことができ、神官長や神官会議の長にもなれた。

- ・都会の神殿は職業的神官によって運営されており、こうした地位が王家と深く結び付いていた。王自身か直近の親族（妃の母親も含む）がしばしば神官あるいは女性神官＝巫女として、その都市の主神に仕えていた。このような神官職は、大体貴族社会で世襲されていた。

- ＊最高の王族海部氏一族から卑弥呼とトヨが女王となったこと、大王家による政祭一致世襲の起源は、このように中東、とりわけフェニキアにある。

- ・フェニキア人の王の権力と威光は、その神聖なる役割、すなわち、神と人との仲介者であったことと深く結び付いていた。王の名前の多くがバアル、エシムン、メルカルト、アシュタルテといった神の名を冠しているのも、その結び付きの深さの象徴であり、神々に対する敬意の表れでもある。

- ・神の呼び名は大抵総称的で、例えばバアルは単に“主人”とか“かしら”という意味で、固有名詞ではない。

- ・バアル像を統合すると、嵐の最高神とフェニキア神界の首領という二面性が見られる。地方版のバアルは、神聖な山や岬と結び付いており、特にサポン山はその嵐の神の本拠地だった。ウガリトの神話では、そこに宮殿のような住まいがあったという。

- ＊バアルの根源は嵐（風）の神エンリルである。＜神々の真相 1＞に記したように、息子のイシュクル（アダド）がトルコ～シリア、レバノン付近を治めていたので、イシュクルも嵐の神である。後に、マルドゥクが乗っ取りをしてから、バアルとはヘブライ語でマルドゥクを意味するようになった。

・天地創造はエル（とダゴン）によって行われた。エルはセム語で“神”の意味だが“人類の父”と呼ばれ、ダゴンは“穀物”を意味した。

*人類を創成したエンキ（エル）とニンギシュジッダ（ダゴン）である。ニンギシュジッダはニビルから帰還する際、小麦を持ち帰ったが故に“穀物”である。本来のエルは大神アヌだが、シュメール以外の神話・伝承では、このように混乱している。

・ビュブロスではバアラト・ゲバル（＝ビュブロスの女主人）への信仰が盛んで、その相方の男神バアル・シャメム（＝天の主）への信仰もずっと行われていた。シドンの主神はアシュタルテとエシュムン、ウガリトの最高神はエル、キティオンでは“矢の王”と呼ばれたセム族の神シェドである。中でも、メルカルト、エシュムン、アシュタルテが最も崇拝された。

・バアラトは母性と豊饒性を持ち合わせ、後にギリシャのアフロディーテになった。

・アシュタルテの通称はシェム・バアル（＝バアルの名前）という意味で、天界と海の神、多産や生殖力の神、戦いの神でもあった。

・願掛けや念願成就の際には、神殿に様々な品が奉納され、青銅製やテラコッタの礼拝者か神の像が圧倒的に多く、特にアシュタルテに捧げられた。フェニキア領内では、天然の洞窟や岩屋にもアシュタルテが祀られ、中にはワスタの岩屋のように、女性器を表した落書きで飾られている所もあった。これらアシュタルテを祀ったたくさんの洞窟が、後に聖母マリアの神殿に発展した。

・アシュタルテは2頭のスフィンクスが支える玉座とも結び付いている。

*アシュタルテはイナンナのことであり、フェニキアではイナンナが最高神である。イナンナは豹や獅子を従えた姿としても描かれている。

・各都市が“神々の三人家族”に支配されているとした。母なる神、父なる神、その息子であり、息子は植物の神で、その死と復活が農業の年周期と結び付いていた。どの神々のカップルに於いても、男神が“死と復活”の概念と結び付いている。テュロスでは“メルカルトの目覚め”が、毎年国民的祝祭として定着していたが、これは死と儀式的な火葬の後にメルカルトが復活することを再演する春の儀式である。メルカルトとは、ミルク・カルト（＝都市の王）という意味である。また、同様な儀式がビュブロスにもあった。特にビュブロスでは、毎年アドニス祭が行われていた。これはギリシャ神話の影響だが、アドニスは獰猛な猪に殺され、1年の半分ずつを生の世界と死の世界で生きることを余儀なくされた。このアドニスという名前はセム語のアドン（＝主人）かアドーナイ（＝私の主人）に由来する。また、シドンの神エシュムンも“死と復活”

の神として信仰された。どの神の場合にも、復活には相手の女神が“聖婚”の儀式を通して一役買っていた。メソポタミアのアキツ祭にも類似の儀式がある。

・フェニキア人の1年は、農業の周期と連結した宴と祭りに支配されていた。特に、新年や収穫の祝いには、生贄が捧げられた。月日は新月の日から計算され、太陽と月への崇拝が暦に大きな役割を果たしていた。最大の年中行事が“春の目覚め”で、テュロスではメルカルト、シドンではエシュムンの復活祭であった。メルカルト祭（2月か3月）では、メルカルトの人形が儀式用の薪で焼かれ、その後、相方のアシュタルテとの儀式的な結婚＝聖婚を通じて復活祭が行われた。

・古くから神殿売春の習慣があったが、これはアシュタルテ信仰と結び付いていた。

*メルカルト＝アドニス＝エシュムンで、＜神々の真相4＞に記したように、イナンナが愛するドゥムジの愛称であり、聖書に於いて“主”を意味する“アドーナイ”の語源だった。そして、獰猛な猪はマルドゥクの象徴である。つまり、イナンナとドゥムジの聖婚がこれらの儀式の根源である。

また、アドニスは木となったミュラーから美の女神アフロディーテが取り出したことになっており、それが“植物の神”として象徴され、農業の周期と関連した宴や祭りとなっている。

・シドンのエシュムンはバアルの地域版とも言えるが、“シュムン”は“油”を意味し、癒しの神としても崇められ、また、泉や聖水とも深い結び付きがあった。

*ドゥムジの父エンキは水神であり、水瓶を持って洗礼する象徴でもある。この洗礼が、“油”を掛けて聖別する風習へと変化している。

・羊と子羊が生贄にされ、豚は生贄としても食用としても忌み嫌われていた。

・香を供えたり焚いたりすることが、重要な生活習慣だった。

・信仰には、神の存在やその場所を示す種々のシンボルが使われたが、いずれも人間や動物の形をとらない非偶像的なものである。

*ユダヤ教と同じである。聖書には、イスラエル周辺諸国は偶像崇拝の国とあるので、フェニキアも偶像崇拝と思われがちであるが、実は偶像崇拝禁止なのである。単に、ユダヤ教徒から見ての異教徒、ということに過ぎない。

・男性神官は髭を奇麗に剃り、裸足で、つばの無いぴったりの帽子を被り、足下まである長い亜麻布の神官服を纏っていた。前の方にはプリーツがたたま

れ、袖はゆったりとして、左の肩には神官の印である薄い布を折りたたんだストールが掛かっていた。カディスという土地でのメルカルト神殿では、神官は白く緩やかなローブを纏い、頭髪を剃り、性的禁欲を守った。

・儀式的な剃髪が重視されており、女神への信心の証として頭を剃った。

*日本の神職の格好に類似している。頭髪を剃るのはエジプトの神官の影響であり、フェニキアはエジプトとの交易が盛んだったことから、宗教的な影響も多大に受けている。フェニックス伝説がその典型である。（＜神々の真相 4＞参照。）なお、剃髪の大元は＜神々の真相 1＞に記したように、アダパが「神々」の星ニビルに連れて行かれる前に、ボサボサの髪が剃られたことである。

・マルツェ（ポエニ語で“再会の間”の意）と呼ばれる宗教的な親睦会があった。これは、神格化された祖先（レパイム）を讃える儀式的な食事のことである。その祝宴では、供物や生贄が捧げられ、大酒を飲んだ。

*神道に於ける直会（なおらい）と同じである。

・アシェラと呼ばれる奉納用の小さな木製の柱は“聖なる森”を、ベテュル（セム語で“神の家”）と呼ばれる高さ 1.5 メートルほどの一本石柱は神の存在と座のシンボルだった。ベテュルは祭壇か供物台の前など、神殿の中心に据えられ、旧約ではマッセバ（仕上げをした石）と呼ばれている。

*これまでもよく登場したアシェラは“柱”と同一だとしてきたが、その原型が、この奉納用の小さな柱だったのである。

ベテュルは旧約のベテルであり、創世記の“ヤコブの夢”に登場する。

“ヤコブはベエル・シェバを発ってハランへ向かった。とある場所に來た時、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあった石を 1 つ取って枕にし、その場所に横たわった。（中略）ヤコブは眠りから覚めて言った。「真に主がこの場所におられるのに、私は知らなかった」そして、恐れおののいて言った。「ここは、何と畏れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ」ヤコブは次の朝早く起きて、枕にしていた石を取り、それを記念碑として立てて先端に油を注ぎ、その場所をベテル（神の家）と名付けた。因みに、その町の名はかつてルズと呼ばれていた。ヤコブはまた、誓願を立てて言った。「神が私と共におられ、私が歩むこの旅路を守り、食べ物、着る物を与え、無事に父の家に帰らせてくださり、主が私の神となられるなら、私が記念碑として立てたこの石を神の家とし、すべて、あなたが私に与えられるものの 10 分の 1 を捧げます。」

おそらく、旧約のベテルの原型がベテュルであって、ベテルからベテュルが派生したのではないだろう。何故なら、＜神々の真相 5＞でも記したように、聖

書はフェニキアのビュブロスで編纂された可能性が高いからである。

また、この文章の中の“記念碑として立てて先端に油を注ぎ”の“立てる”の原語が“マッセバ”である。これは、ヒンズー教でリングの先端にミルクやギー、胡麻油などを掛けることと同義であり、その根源はシヴァ神＝イナンナである。

以上のことから、神の存在と座のシンボルであり、神殿の中心に据えられた1.5メートルほどの一本石柱ベテウルこそ、心御柱の原型と言える。海部宮司は、かつて心御柱は時の天皇の背の高さと同じだった、と言われていたが、古代人の背は低かったとされるから、ちょうど1.5メートルぐらいが背の高さに値するので、心御柱として矛盾しない。

・神殿の形態には2つあって、1つは露天の聖域と、もう1つは屋根や壁のある建物の神殿である。露天の代表が旧約のバマー＝“聖なる高台”で、大抵は舗装された吹きさらしの、一段高くなった方形の中庭“テメノス”で、そこにベテウルや祭壇などの礼拝設備があった。

・フェニキアでの最大の露天聖域は、シドン郊外のボスタン・エシュ・シェイクにあるエシュムン神殿である。そこには水路と溜池による精巧な給水設備があり、清めの儀式が行われる場所だった。水に関する儀式は、フェニキア人の治癒力信仰に於いて、重要な役割を果たしていた。

*方形は地を表し、陰である。そこで、陽である神を祀った。そこにベテウルが必要ならば、これは太陽神に対して剣＝心御柱を立てて祀ったことと同義であり、神道の原型がこれである。また、方形は陰なので、陰の象徴の水が関わる。この場合の、治癒力信仰に於いて重要な役割を果たす水とは、イナンナが“復活”する際に与えられた「生命の水」に他ならない。

・フェニキア人は死後の世界を信じており、死者をレパイムと呼んでいたが、これは神である祖先、あるいは神となった死者、を意味し、その語源は“癒す、回復する”という意味である。

*“神である祖先”“神となった死者”という考えは神道とまったく同じであり、ここからも神道の根源はフェニキアにある、と言える。

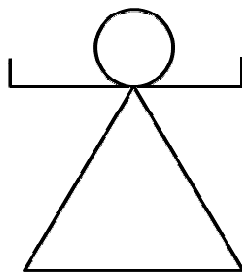
・硬貨などに刻まれたフクロウはギリシャの女神アテナのシンボルで、その影響を受けている。硬貨の図案としては他に、半人半魚の海神、翼のある女神ニケと四頭立て戦車、馬、ヤシの木などがある。この女神と馬、ヤシの木は三大モチーフとも言うべきもので、フェニキアという名称は“ヤシの木”という意味のギリシャ語の“ポイニクス”に由来する。また、ポイニクスには“紫”や“えんじ色”をも指す。カルタゴの守護神は女神タニトと言った。

*アテナ＝ニケ＝タニト＝イナンナであり、半人半魚の海神はオアンネス＝エ

ンキである。ナツメヤシの学名がフェニックスであり、紫、ナツメヤシの 3 つの意味を持ち、ナツメヤシはイナンナの好物だったことは<神々の真相 4>で記した。それが、ギリシャ語ではポイニクスとなる。

イナンナとナツメヤシに加えて馬が三大モチーフならば、イエスが降臨する際に乗って来るとされる白馬や神社の絵馬の原型はフェニキアにあり、やはりイナンナと関係が深いと言える。

・ポエニ人（カルタゴ）には母都市テュロスの信仰が持ち込まれ、女神アシュタルテと男神プメイ（ピュグマリオン）が登場するが、初期の最高神はメルカルトだった。BC5 世紀頃には、女神タニトが台頭してきた。タニトはトペテに奉納された石柱の中で祈りが捧げられている神である。タニトは翼のある姿に描かれており、アシュタルテとの類似性が伺われる。タニトの象徴は三日月や、三角形の上に水平の腕と円が乗った“タニトの印”などである。



*アシュタルテ＝タニト＝イナンナである。イナンナは、シュメールでも翼のある女神として描かれている。三日月はエンキの象徴で、男神プメイとはエジプトのプタハ＝エンキのことだから、半人半魚の海神と合わさってタニトの象徴となったのである。（カルタゴは現在のチュニジアであり、エジプトの影響は多大である。なお、三日月はイナンナの父ナンナルの象徴でもある。）

“タニトの印”の三角形、水平の腕、円は「生命の樹」の三界を象徴する。三角形の頂点で区切られているのは、そこが隠されたセフィラ“ダウト”であり、“智慧”＝「生命の樹」の奥義＝カッパラーの本質を知った者のみが真理を知って神の領域（＝絶対神の目＝円）に達することを意味する。そして、この形は鏡餅の原型である。（三角形が餅、水平の腕が干し柿を刺した木、円が橙。）

トペテとは、子供の生贄を埋葬した墓地である。人間の生贄は宗教に於ける最大の暗黒の側面であるが、その根源はイナンナにあることは<神々の真相 3>に記した。これからも、タニト＝イナンナである。

・ポエニ人の副葬品には、銅製のカミソリがある。刃は小さな鎌のような三日月形で、柄はトキや白鳥などの首と頭になっている。

・イヤリングには十字架の垂れ飾りが良く使われ、取り付け用のリングを含め

ると、アネク形（アネク十字）に見える。

・フェニキアにも印章があり、蓮の花やスカラベなど、再生や復活と結び付いたエジプト的要素が見受けられる。図象としては、4つの翼を持つ悪魔が多用された。

*三日月はエンキ＝プタハ、トキはニンギシュジッダ＝トートの象徴でエジプトの影響であり、アネク十字もそうである。4つの翼を持つ悪魔はメルカバーだが、イナンナ＝タニトが（2つの）翼のある姿ならば、その暗黒面を象徴したのが4つの翼のある姿とも言える。

(4)火葬と生贄

・動物の生贄（羊か子羊）は神官か執行人によってうやうやしく祭壇へと運ばれ、その後ろから生贄の提供者と祭具（斧、ナイフ）の運び人が付いて行く。生贄は血を抜かれ、切り落とされた頭部が祭壇に供えられる。生贄が焼かれる間、供犠の祈りが唱えられ、脂肪と内臓が焼き尽くされると肉が切り分けられ、執行人と提供者に分配される。執行人は胸と右の腿肉を取り、提供者は残りの肉と皮を取る。その後、生贄の灰が埋められ、そこに奉納の石柱が建てられる。

*ほぼユダヤ教と同じである。

・BC1 千年紀のどこかの時点で、新しい埋葬法である火葬が、フェニキア本土と近隣のシリア、パレスチナを含んだレヴァント海岸に出現した。テュロスではBC10 世紀には既に火葬が行われており、その習慣がフェニキア起源である可能性が高い。

*火葬と言えばヒンズー教である。ヒンズー教では、魂は焼かれることによって天に登り、遺灰を近くの川に流すことで自然に還り、新しく生まれ変わることができる信じられている。この考えは、フェニックスと同じである。フェニキアもインダスも創造神はイナンナだから、基本的に同じ考えとなる。（同じイナンナを創造神とするインドとペルシャは、どちらがイナンナの気を引くかということで互いに中が悪く、正反対の考えである。）

歴史的にはインダスの方が古いが、火葬の起源がフェニキアなのかインダスなのかは、定かではない。

・フェニキアでは死者はネクロポリスという共同墓地に葬られ、子供の生贄を埋葬したトペテが存在した。

・ポエニには悪名高い生贄の儀式があった。トペテの埋葬地から発掘された骨壺からは、生贄は3歳未満の幼児で、未熟児が多かった。ボロボロの灰になるまで焼かれているので、性別は不明である。明らかに未熟児や新生児が多く、大人の墓地には赤子がほとんど埋葬されていないことなどから、死産児や病氣

で死んだ子供という可能性もある。しかし、様々な文書や、墓自体と添えられた墓標には“バアル・ハンモンとタニトにモルクを供える”と記されていることから、この儀式は実際にあったとされている。“モルク”とは子羊の供物を指すが、修飾語の“b' l”が人間の埋葬を意味し、ポエニ語の“願掛け”や“誓願”に相当する“ndr”という語が頻繁に見られることから、普通の墓石とは明らかに性質の異なるものであることが伺われる。そして、他の墓地が何度か移転しているにも関わらず、トペテだけは決められた場所から動かず、不可侵であることも、特別な意味を持っている。旧約では、預言者たちが幼児の生贄を激しく非難していることから、実際にあったのだろう。このような生贄の儀式は、商人、神官、市の執政官など上流階級が行っていたが、ローマ帝国によって廃止されたものの、北アフリカでは AD1 世紀になっても密かに継続されていたという。

*最初は病気の新生児や未熟児だったのだろうが、次第に誤解され、幼子が供されるようになったのだろう。そもそもフェニキア人とは<神々の真相 4>に記したように、アシュタルテ＝イナンナに生贄として捧げられた聖王のことで、霊魂＝鳥が火葬の炎から再生して天界へ飛翔すると考えられた。

このように、今まで日本に於いてユダヤ教由来だと見なしていたことが、かなりの部分、フェニキア由来だと判明した。故に、ヤマトに於ける最初の大王家、海部氏はフェニキア人の大船団と共に渡来した北イスラエル王国の王族、エフライム族の大王家である。

4：まとめ

長くなったので、今回の内容をまとめる。

- ・卑弥呼の邪馬台国は都介野岳を拝する小夫にあった。
- ・トヨの大邪馬台国は纏向遺跡付近にあった。
- ・大邪馬台国では、元兵主神社を遥拝所として斎槻岳越に、見えない卑弥呼の邪馬台国の神山である都介野岳を遥拝した。また、新たな神山として泊瀬山が選ばれ、ダンノダイラを遥拝所として巻向山越に、見えない泊瀬山を遥拝した。
- ・元兵主神社での祭祀は海部氏直系のみが担当し、ダンノダイラでの新たな祭祀は秦氏に素直に従った徐福の系等の葛城氏（出雲氏）が加わり、葛城氏が中心となって祭祀を行っていたと考えられる。
- ・奈良盆地に於ける巨大な祭祀構造は都介野岳と泊瀬山が基準となっており、三輪山なども合わせて人工の山だと考えられる。

- 平地での起点は益田岩船であり、天地合一・陰陽合一の祭祀施設で、奈良盆地に秦氏の仕掛けが施されたことを暗示している。
- 巨大な祭祀構造は長谷ー泊瀬山ライン（聖なる山の聖線）、日葉酢姫陵ー岩船ライン（平地の俗なる地域のライン）、三笠山ー聖林寺ライン（両者の接点の山麓地帯）に分けられ、都介野岳ー穴闇の東西ラインを中心に南北に分割される。南側が太陽神＝陽、北側が水神＝陰という陰陽の構造である。
- 中でも重要な神社は、天照国照尊を祀る八尾の鏡作坐天照御魂神社である。
- 巨大な祭祀構造に見られる角度は 30 度、45 度、60 度、90 度と特徴的だが、これはこの土地に於いて、東西ラインに対して 30 度南東が冬至の、30 度北東が夏至の日の出のラインとなっていることを基準としているためである。あるいは、そのような土地が「神々」によって選ばれ、預言されし土地とされた、とも考えられる。
- 古墳は単なる墓ではなく、前方部は陰、後円部は陽を象徴する陰陽道の表れで、寺社と共に中心線や配置によって様々な暗示をしている。
- 本来の“三諸山”は三輪山ではなく、穴師山、巻向山、白山で、秦氏によって変えられた三諸山は穴師山、巻向山、三輪山と考えられる。
- 都介野岳、泊瀬山での祭祀は海部氏系だが、三輪山での祭祀は大和朝廷のもので、秦氏に変わっている。
- 秦氏は天神を直接祭祀することはできないので、本来唯一の神であった天照国照尊を陰と陽に分離し、陰である地祇を伊理泥王の血統に祀らせていたと考えられる。（陽である天照大神は、息津鏡・辺津鏡を有する海部氏が祀る。）それが、崇神天皇 6 年に天照大神と倭大国魂神を宮中の外に移し、両大神を分祀したものの、疫病などは終息せず、神祭りの一族の血統である大田田根子に大物主神＝倭大国魂神を祀らせることにより、疫病は終息して五穀豊穡となった、という逸話として暗示されている。
- 祭祀構造は表向き海部氏を隠し、秦氏が祭祀を乗っ取ったかのように見えてはいるものの、本来の神祭りは特定の氏族にしか許されないから、実は海部氏の神々を勧請し、裏切ってはいるものの、海部氏一族の中の徐福の系等で、伊理泥王の血統に祀らせている。
- 桧原神社は大和朝廷が泊瀬山から三輪山崇拝へと祭祀を変更した際に、謎を解く鍵として後から建造されたものである。桧原神社はイエスと卑弥呼を共に女神・天照大神として祀ることにした最初の地で、象徴としては陰であるが、“笠縫宮”ではなく“笠縫邑”となっているのは、イエスの御神体（十字

架)が無かったからだと考えられる。(当時あったのは籠神社。)

- ・出雲大社の大国主命の和魂が大物主神であるということは、出雲大社の本来の神は天照国照尊から地祇として分祀された大物主神が祀られるヤマトに鎮座している、という暗示で、その地は古代から“出雲”である。
- ・シュメールと聖書の観点から、地祇の大物主神の性質として蛇が選ばれたと考えられる。それにより、大物主神は天照国照尊から分祀されたことを暗示している。そして、本来の神“ヤー”と蛇神（原型となっているシュメールの「神々」）を連想させる“八岐大蛇”という存在を秦氏は創り上げ、海部氏が元々持っていたアロンの杖＝草薙神剣を、スサノオが八岐大蛇の尾を切って手に入れたことにされたが故に、蛇神が剣の象徴と成り得る。
- ・三笠山周辺は三輪山と類似の構造となっている。そして、都介野岳、泊瀬山、三輪山、岩船を中心とした祭祀構造を三笠山まで持ってきている。
- ・ヤマトに於ける古代祭祀には多分にフェニキアの影響が見受けられ、今まで日本に於いてユダヤ教由来だと見なしていたことが、かなりの部分、フェニキア由来である。故に、ヤマトに於ける最初の大王家、海部氏はフェニキア人の大船団と共に渡来した北イスラエル王国の王族、エフライム族の大王家である。
- ・心御柱の根源は、フェニキアの神殿の中心に据えられた 1.5 メートルほどの一本石柱ベテュルである。

5 : エピローグ

これまでの一連の資料は、飛鳥氏の説が正しいのかどうか判断するため、氏の著書内容をまとめ始めたのがきっかけである。それは、日本の真相から始まったわけだが、実は原始キリスト教やユダヤ教だけではなく、その根源は人類初の文明、シュメールにあることが解り、それを起点として様々な考察を行ってきた。

そして、海部宮司との対談から、また日本に戻って再考せざるを得なくなり、終には、謎とされている邪馬台国や古代ヤマトに於ける祭祀について、ようやく光明を得たわけである。

すなわち、シュメールや海部宮司の言われることに矛盾は無く、すべてはシュメールが根源であり、日本に於いては海部氏こそが、謎を解く鍵を握っているのである。故に、終わりの時代に「神々」が降臨することを預言した“かごめ歌”は、籠神社の隠し歌なのである。

その終わりの時代に関わることをして、「やりすぎ都市伝説 (テレビ東京系列、2012 年 4 月 6 日放映)」で興味深い内容が放映されていた。この番組では時折、

日本とユダヤ、フリーメイソンの関係などについて述べられているが、今回は2013年に関してである。

番組では、アミシャブの幹部、ラビ・アビハイル氏が応じていた。ヘブライ語で“13”は神聖数字であり、元服なども13歳で行う。(日本でも、数え年で13歳前後に元服式が行われていたことは類似している。)

*アミシャブ

世界中に離散した失われた十氏族の行方を調査するために、1975年に設立されたイスラエルの特務機関。裏にモサド(諜報機関)の関わりの可能性有り。

ヘブライ語はカッパラー的に創られている。例えば“w”に相当する“ו”は6番目、つまり、カッパラー数秘術的には“6”を象徴するので、“www”は“666”を意味していることになる。

そこで、“13”が何故、神聖数字なのか、説明されていた。ヘブライ語で“13”を表す象徴的な言葉は、次のものである。(ヘブライ語をそのまま打ち込むと見難いので、図として扱った。)

愛: אהבה (アハバー)

$$5+2+5+1=13$$

ひとつ: אחד (エハッド)

$$4+8+1=13$$

ヘブライ語はかつての日本語のように右から左に読むが、これらがテレビ局の“ヤラセ”ではないかと疑い、以下のWebのページ“Online 日本語 ヘブライ語辞書”で確認したところ、問題は無かった。

(<http://www.etranslator.ro/ja/nihongo-heburaigo-online-jisho.php>)

つまり、“13”は“愛”や“ひとつ”という意味になるから神聖なのである。故に、大邪馬台国の女王としてトヨが即位したのが13歳だったのである。この“ひとつ=1つになる”ことを象徴しているのが、イスラエルにあるフリーメイソンロッジのシンボルである。

(次のページより転載。)

<http://image.search.yahoo.co.jp/search?rkf=2&ei=UTF-8&p=%E3%83%95%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%83%A1%E3%82%A4%E3%82%BD%E3%83%B3+%E3%82%B7%E3%83%B3%E3%83%9C%E3%83%AB>)

ユダヤ教を象徴する六芒星の中に、キリスト教を象徴する十字架と、イスラム教を象徴する月が1つのシンボルとしてまとめられている。つまり、将来、

これらの宗教は“愛によって 1 つになる”といい、その役割を果たすのが、聖書に預言されている、東の海の島々にあって聖書を知らない民、すなわち、日本人だ、というのである。

実は、これに類似しているシンボルが日本にもある。それは、籠神社の絵馬である！ (<http://www7a.biglobe.ne.jp/~mkun/nazo/rokubousei3.htm> より転載。)

イスラエルロッジのシンボル



籠神社の絵馬にある六芒星



籠神社の絵馬には、六芒星の中に日と月がある。日と月は陰陽の合一で、日本的には日は天照国照尊の陽の面、月は陰の面である。しかし世界的には、イエスを人類にとっての光とするなら、太陽とも象徴される。

故に、籠神社の絵馬にある六芒星は来たるべき将来の、世界宗教の統合を暗示しており、イスラエルロッジのフリーメイソンシンボルの別の形態とも言えるから、海部氏は秦氏渡来以前の正統フリーメイソン＝カッパーラの使い手（カバリスト）なのである！すなわち、元八咫鳥である。

唯一の神ヤハウエのヘブライ語表記は、これまでに何回か登場しているが、次のようになる。

ヤハウエ: יהוה

$$5+6+5+10=26$$

神聖 4 文字（テトラグラマトン）だが、数秘術的には“26”である。これは“13”の 2 倍だが、その解釈は次のようになる。

$$2013=2\times 13=26$$

つまり、“ヤハウエ”という神聖文字は神聖数“13”が2つあるということで、“愛が1つになる”“愛により1つになる”という意味になり、2013年に「神々」の降臨によって、良い意味での“世界が1つになる”ということを暗示するために創られた言葉と言っても良い。そして、カッパーラの創始者と考えられるニンギシュジッダが創造したマヤのカレンダーでは、2012年冬至から新たな時代が始まることを暗示するので、降臨の時期は2013年がかなり濃厚である。ならば、ヤハウエ及び降臨する「神」はニンギシュジッダか？

この2013年には、“神の宮、神のお住まい”である神宮で第62回式年遷宮が行われ、新たな宮（お住まい）が完成する。遷宮は戦国時代や大東亜戦争の時に途絶えていたが、大東亜戦争後、本来の年よりも4年遅れて実施された。せめて宇治橋だけでも本来行うべき年で、ということで、宇治橋の架け替えが遷宮の4年前に行われるようになったから、大東亜戦争で中断しなければ、2009年に第62回式年遷宮は行われていたのである。

また、2013年は草薙神剣を祀る熱田神宮創祀1900年目で、古代に神祭りを共に行っていた出雲氏の出雲大社でも平成の大遷宮が行われる年でもある。出雲大社の遷宮は約60年毎とされているが、延享元年（1744年）に遷宮御造営されて以来は、1809年、1881年、1953年と行われており、必ずしも60年毎ではない。それが今回、ちょうど60年目に相当し、“60”は大神アヌの数字である。

つまり、2013年は海部氏系三氏族の最も重要な宮で、最重要の神事がすべて重なる極めて稀な年である。ならば、大東亜戦争後にわざわざ神宮の遷宮を2013年に修正し、出雲大社の遷宮もそれに合わせたと言っても過言ではない。

番組では、その伊勢で歌われる伊勢音頭が紹介され、ラビ・アビハイル氏が、出エジプト記に由来したものではないか、と言われていた。

“コラー コラー ヤーハ トコーオ セエヌオ”
“呼べ 呼べ ヤハウエを 憎しみを砕く”

<http://iseondo.gr.jp/laboratory/kasi/index.html> で本来の歌詞を調べてみると、次の部分の解釈である。

“コラコラヤートコーオオー セエノオー（ヨイヤナー）”

ヤハウエを呼んでいるわけだが、これは御木曳きや伊雑宮のお田植え祭りで掛けられる掛け声“エンヤー”も同様である。“エン”はシュメール語で“主”、“ヤー”は“ヤハウエ”だから、これもまた“主ヤハウエ”を呼んでいるわけである。

よって、あらゆる意味で2013年に収束している、と言っても過言ではない。その象徴が、神宮の第62回式年遷宮である。“第62回”もカッパーラ的には6

+2=8 で、イエスの象徴数字であると同時にイナンナの象徴でもあり、横にすると“∞”で“不老不死、復活”を暗示する、極めて象徴的な数字である。

他に歌の解釈としてヘブライ語的とされているものには多くの日本民謡が挙げられるが、誰もが知っている最も有名なものは“君が代”である。解るところに堂々と隠すのが、カッパラーの常套手段である。

★君が代の解釈 (<http://judea.naritacity.com/index.asp> 参照。)

“君が代は 千代に八千代に さざれ石の巖となりて 苔の生すまで”

・キミガヨハ

“君が代は”は、ヘブライ語で“クム・ガ・ヨワ”という3つの言葉に分けられる。

クム (koom) は“立ち上がる”あるいは“起き上がる”。

ガ (gaah) は“立ち上がる”という意味だけでなく、“相手を誉め称える”というニュアンスも含まれている。

ヨワは“神”を意味するヤハウエ (YHWH) の発音が多少転訛したか、YHWH に任意の母音を付加したものだろう。YHWH という神聖な神の名を意味する言葉は、人間が発音できないように当初から母音が無い。

よって、“キミガヨハ”は“立ち上がって神を誉め称えよ！”という意味となる。

・チヨニ ヤチヨニ

“シオンの民”という意味。そこに、“神”を意味する“ヤ”を付加して“ヤ・チヨニ”とすれば、“神の (シオンの) 民”あるいは“神の選民”という意味。

・サザレ イシノ

ヘブライ語で“サッ (sas)”と“サリード (sareed)”と発音する2つの言葉が合わさった言葉。“サッ”は“喜ぶ”、“サリード”は“残りの民”“選民”の意味。

“救い”を意味するヤシャ (yasha) が語源のイシュ (ish) と、“人類”を意味するイノシュ (enosh) が複合してできた“イシィノ (シュ)”で、“人類の救い”を意味する。

よって、“サザレ イシノ”は“人類を救う、残された民として喜べ！”という意味。

・イワヲトナリテ

“イワ・オト・ナリテ”という3つのヘブライ語。“イワ”は“神”を意味する YHWH に任意の母音を付け、日本流の神の呼び名である“イワ＝磐＝磐座”となった。また、ヘブライ系ユダヤ人のことをアラム語では“IWARAA、イワラ”と呼んだり、神の民を“YEHUDI、イフディ、イワデ”と呼び、それらに“イワ”

という発音が含まれるのも、“神”の意味が含まれているからに他ならない。新約に於いても、イエスは“救いの岩”と呼ばれているように、“イワ”は“神”を象徴する言葉である。

“オト”は“印”や“サイン”を意味する“オト (ot)”で、神の証や預言に関わるニュアンスが含まれている言葉。

“ナリテ”は“ナリアタ (nali-atah)”が転訛したもの。これは“成就する”“完成する”という意味で、“ナリ”は“得る”、“アタ”は“来る”という意味から、この2つの言葉が繋がって、“成就する”という意味になる。

よって、“イワヲトナリテ”は“神の予言が成就した！”という意味。

- ・コケノ (kol-kano)

発音はコ (ル) カノ。“コル”は“すべて”、“カノ”は“基礎、台”の意味で、“すべての場所”の意味。

- ・ムスマデ (mooshma、ムーシュマ)

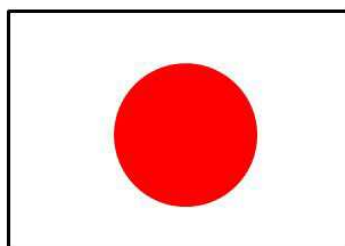
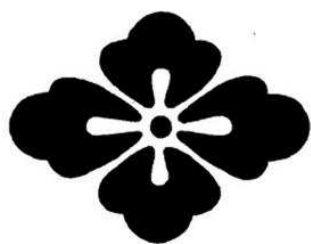
“語られる”“鳴り響く”という意味。ヘブライ語の文法上、女性形も使用されることがあり、ムーシュマッテはその女性形である。

よって、“コケノ ムスマデ”は“すべての場所に語られる”という意味。

以上のことから、“君が代”は次のように解釈できる。

“立ち上がって神を誉め称えよ、シオンの民よ！そして、人類を救うために選ばれた民として喜べ！人類に救いが訪れ、神の預言が成就した。これを、全地にあまねく宣べ伝えよ！”

“君が代”が詠み人知らず、とされているのも、このような真意が隠されていたためである。そして、＜日本の真相2＞に記したように、神宮の御紋は日の丸そのものである。



最後は、最も日本的なもの、いや、日本そのものと言える神宮と日の丸で締めくくりとなったのも、お導きとしか言いようが無い。

参考著書：

- ・海部穀定著、「元初の最高神と大和朝廷の元始」、桜楓社。
- ・金久与市著、「古代海部氏の系図」、学生社。
- ・伴とし子著、「ヤマト政権誕生と大丹波王国」、新人物往来社。
- ・伴とし子著、「卑弥呼の孫トヨはアマテラスだった」、明窓出版。
- ・小川光三著、「ヤマト古代祭祀の謎」、学生社。
- ・大神神社史。
- ・小林登志子著、「シュメル—人類最古の文明」、中公新書。
- ・グレン・E・マーコウ著、片山陽子訳、「フェニキア人」、創元社。

初版：2012 年 5 月

改定：2012 年 7 月

改定 2 版：2013 年 1 月